# 肥前国府跡 Ⅰ

（第一次～第三次発掘調査報告書）

1978・3

佐賀県教育委員会
新郷土刊行会

佐賀県文化財調査報告書第39集

# 肥前国府跡 I

# 序

肥前国府跡は，以前から，佐賀郡大和町大字久池井一帯にあるといわれてきました。

近年，この地域を東西に横切って九州横断高速自動車道と，そのインターチェンジの建設が予定されることになり，緊急に国府・国庁跡を明らかにせねばならなくなりました。

この調査は，昭和50年度から３ヵ年にわたって実施したものであります。この間，数多くの貴重な資料が収集されるとともに，遺構の配置状況等も次第に明らかになって来ております。しかし国府という古代都市の再現であり，広大な地域がその対象となります。今回までの調査で明確になった部分は，まだその何割かであり，全貌を明らかにするには，今後の調査を待たねばなりません。

ここに，肥前国府跡の発掘報告書の第１集を刊行することになりましたが，これまでの成果と共に，これらの重要な文化財を，県民の共有財産として，大切に保存し活用していくための資料として役立てていただきたいと思います。

なお，おわりになりましたが，この調査にあたって奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターをはじめ，調査委員の方々，大和町当局，大和町教育委員会ならびに土地耕作者の方々の深いご理解と献身的なご協力をいただきましたことを心からお礼申しあげます。

昭和５３年３月

佐賀県教育委員会

教育長　池　田　武　生

# 例　　言

1．本書は国庫補助事業により昭和50年度から52年度にかけて発掘調査を実施した肥前国府跡の発掘調査報告書（Ⅰ）である。

2．調査は佐賀県教育委員会がこれにあたった。

3．本書の執筆はつぎのとおりである。

Ⅰ……樋渡敏暲
Ⅱ……杠　一義
Ⅲ1……樋渡敏暲
　2……立石泰久
Ⅳ1・2……中島直幸
　3・4……高瀬哲郎
Ⅴ……松尾直子・藤原新子
総　括……高島忠平

4．遺構の実測は調査員がこれにあたり，遺物の実測は，山本タカ子・福島憲子・池田高子・中尾とし子・島孝子・藤原倫子・東中川忠美・松尾吉高・原田保則・高瀬哲郎・藤原新子があたった。製図は七田忠昭・東中川忠美・松尾吉高・岸本義彦・高瀬哲郎・中島直幸・藤原新子がおこなった。拓本は藤原新子・遺構写真は立石泰久・樋渡敏暲・中島直幸がおこない，遺物写真は田平徳栄・中島直幸・松尾直子があたった。

5．編集は立石泰久が担当した。

# 凡　　例

1．遺構については一連番号を付し，その前にＳＢ：建物，ＳＤ：溝，ＳＥ：井戸，ＳＫ：土壙の分類記号を標記する。

2．遺構の寸法数字はｍ単位である。

3．実測図基準は国土座標にする。

# 目　　次

序

Ⅰ　調　査　の　経　過

1．調査に至る経過……1
2．調　査　関　係　者……2
3．調　査　日　誌……4

Ⅱ　遺　跡　の　概　要

1．遺　跡　の　環　境……6
2．国府跡の推定と諸説……8

Ⅲ　遺　　構

1．遺　構　概　要……10
2．遺　構　各　説……12

Ⅳ　遺　　物

遺　物　の　概　要……20
1．土　　師　　器……20
2．須　　恵　　器……25
3．　　瓦　　……29
4．そ　の　他　遺　物……36

Ⅴ　その他遺構遺物

1．遺　　構……37
2．遺　　物……40

総　　括……48

# 挿　図　目　次

Fig 1．国府跡周辺地形図…… 7
2．基本土層図…… 9
3．ＱＣ地区05発掘区平面図…… 13
4．ＲＧ地区31発掘区平面図…… 14
5．ＲＢ地区25発掘区平面図…… 15
6．ＲＧ地区32発掘区平面図…… 16
7．ＤＤ地区01発掘区平面図…… 18
8．ＲＡ地区37発掘区平面図…… 19
9．ＲＡ地区39発掘区平面図…… 19
10．ＲＦ地区02発掘区平面図…… 19
11．土師器実測図(1)…… 21
12．土師器実測図(2)…… 23
13．須恵器実測図(1)…… 26
14．須恵器実測図(2)…… 27
15．軒丸瓦実測図…… 33
16．軒丸瓦・軒平瓦実測図…… 34
17．軒平瓦実測図…… 35
18．陶磁器実測図…… 36
19．ＮＣ地区土壙出土土器実測図…… 38
20．ＳＤ023 出土土器実測図(1)…… 39
21．ＳＤ023 出土土器実測図(2)…… 41
22．ＳＤ023 出土土器実測図(3)…… 43
23．特殊器台実測図…… 44
24．ＳＤ019 出土土器実測図…… 45
25．石器及び土製品実測図…… 46
26．鉄器及び鏡実測図…… 47
Tab 1．建物一覧表…… 19
2．土師・須恵器出土地点一覧表…… 24

# 図　面　目　次

PLAN 1．国府跡周辺瓦分布図
2．発掘区位置図

# 図　版　目　次

PL 1．国府跡空中写真……51
2．ＲＧ地区31発掘区ＳＢ001……52
3．ＲＧ地区……53
4．ＲＧ地区32発掘区……54
5．　〃　……55
6．　〃　……56
7．ＲＢ地区25発掘区……57
8．ＩＦ地区05発掘区……58
9．ＤＤ地区01発掘区……59
10．　〃　……60
11．ＲＣ地区05発掘区……61
12．ＱＣ　〃　……62
13．ＱＣ地区，ＲＤ地区……63
14．ＱＤ地区……64
15．ＲＡ地区……65
16．ＲＦ地区……66
17．　〃　……67
18．Ｏ地区……68
19．　〃　……69
20．Ｓ地区……70
21．ＲＩ地区……71
22．ＲＣ地区……72
23．ＮＣ地区……73

24. ＮＦ地区……74
25. ＩＦ地区……75
26. ＲＧ地区32発掘区ＳＤ 023弥生時代溝土器出土状況……76
27. ＲＧ地区弥生時代住居跡……77
28. ＤＤ地区01発掘区弥生時代遺構……78
29. ＤＤ地区01発掘区……79
30. ＲＦ地区08発掘区古墳時代住居址……80
31. 土師器……81
32. 土師器，須恵器……82
33. 軒丸瓦……83
34. 軒平瓦……84
35. 弥生土器（ＳＤ 023出土）……85
36. 弥生土器（ＳＤ 023出土）……86
37. 弥生土器（ＳＤ 023出土）……87
38. 弥生土器（ＳＤ 019出土）……88
39. 石器，土製品，ガラス製勾玉，鏡……89
40. 鉄製品……90

# Ⅰ 調 査 の 経 過

## 1．調査に至る経過

肥前の国府は，古くから佐賀県佐賀郡大和町大字久池井一帯に置かれていたというのが研究者の定説である。それは，この地域に「惣座」「国尺」「丁の坪」などの地名，「印鑰社」「国分寺」「国分尼寺」などの神社・寺院の存在，高段土居と呼称される土手や水田・畑・宅地などの地割，それに加えて奈良時代から平安時代にかけての古代瓦の出土など，国府と関連すると推定される遺称・遺構・遺物が存在していることによる。しかし，国府・国庁などの明確な位置関係は不明であった。

ところが，九州横断高速自動車道並びに，そのインターチェンジが国府跡推定地附近に計画されるに至り，周辺の開発の恐れも出て来た。国府跡は，その全貌が明らかにされないまま破壊されてしまう危険にさらされることになった。

そこで，これらの開発に先だち，国府・国庁域を確認し，今後の保存計画を進めるために発掘調査を実施することになった。

1974年6月まず大和町大字久池井周辺の概要を把握するために，佐賀大学考古研究会の協力を得て，瓦と土器の分布調査を実施した。(ＰＬＡＮ１）その結果，土器は弥生土器から須恵器まで広範囲に分布しているが，瓦の散布状況は，通称瓦塚といわれる塚を中心とする地点と，久池井部落の天神社を中心とする地点に密度が高いといえる。次に米倉二郎説(Fig 2)の南限附近と，惣座部落に点在している。

1975年11月，佐賀県教育委員会を主体に，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの指導を得て，国庫補助を受け，総額 1,000万円（国 500万県 500万）の予算で，第１次発掘調査を行った。

発掘調査はインターチェンジが予定されている久池井の水田地帯を中心にして，国道 263号線より東側より開始した。この地は，かって米倉二郎が推定した国庁域である。全体を大地区割してさらに，それを小地区割にわけた。(ＰＬＡＮ２）その中にまず幅３ｍのトレンチを東西方向に全長約 400ｍのものを２本，南北方向に全長 200ｍのものを１本基本トレンチとして設定し，確認のために順次トレンチを設けていった。

その結果，国道 263号東側の八幡神社（甘奈比社）の南方に推定されていた国庁域からは国庁関係の遺構は発見され得ず，一段高くなった北側の山際の水田中から，奈良時代の小掘立柱穴を持つ住居跡群が検出された。これらの住居跡群が国府とどういう関りを持つものか不詳である。

1976年４月，前年度に引続き第二次発掘調査を実施した。発掘調査は国庫補助をうけ，総額 600万円（国 300万県 300万）で，佐賀県教育委員会が主体となって実施した。調査地は

国道 263号の西側水田地と，嘉瀬川の自然堤防上である。嘉瀬川東岸の自然堤防上の密柑園中より，掘立柱穴を持つ建物跡が検出され奈良時代の官衙跡の発掘であると，国庁の手掛りがつかめたと色めき立った。

その後，稲作の関係で一担調査を中止し翌年の1月より調査を再開した。

調査地を嘉瀬川自然堤防上に定め，栗林の中を実施した。周囲は，密柑類の果樹園がほとんどであり，空地を見つけての調査であった。

しかし，栗林中から，南北に伸びる掘立柱建物跡の検出がなされ，この附近一帯に官衙と推定されるものがあったことが判明してきた。しかし瓦の出土が少なく，国庁跡と呼ぶに足るかは判然としなかった。

1977年4月，大和町惣座部落を横切って九州横断道の中心杭がうたれた。国府跡がかかる恐れが出て来たので第二次調査に引続き第三次発掘調査を実施することになった。

第二次で検出された建物跡が北側のどこまで広がっているかを調査することを目的として，国庫補助を受け総額 500万円（国 250万県 250万）で県教育委員会が主体となって実施した。その結果，嘉瀬川堤防上で惣座部落の西側から国府域の最北端と思われる5間×3間の倉庫跡と思われる総柱の掘立柱穴と東西へ伸びる溝を検出した。これ以北には少なくとも隣接しての遺構はなく，北限かと推定されるが部落内の発掘が出来ていない現在では詳細は不明である。

次に，南へ下り瓦塚と呼称される瓦を集積した塚の東側の密柑園の発掘調査を実施したがここからも，東西へ伸びる掘立柱穴を持つ建物跡を検出した。布目瓦の出土も多く，従来まで検出された建物跡が瓦をあまり併なわなかったのに比べ瓦葺き建物跡と推定される。

又，一次と二次で検出された建物跡と瓦塚東側の建物跡とを同一国庁域内にあった建物と考えると，一辺が二町を越える庁域となるため，同一域内の建物跡群とは断定し難い。これまで，三次に亘る発掘調査によって，国庁の全貌は摑めなかったが，手掛りとなる建物跡が発掘され，これからの調査への指針が与えられたと云えよう。

## 2．調査関係者

### 第一次発掘調査

肥前国府跡発掘調査委員会

○委員長　瀬戸口芳夫（県教育委員会教育長）

○委員　鏡山猛（九州歴史資料館館長）・米倉二郎（広島大学名誉教授）・岡崎敬（九州大学教授）田中琢（奈良国立文化財研究所研究指導部長）・沢村仁（九州芸術工科大学教授）・七田忠志（神埼高等学校教諭）・小田富士雄（北九州歴史博物館主幹）・木下之治（県文化財調査監）

○特別調査員　木下良（神奈川大学助教授）・日野尚志（佐賀大学助教授）・高橋誠一（京

都大学文学部助手）・木原武雄（基里中学校教諭）

○事務局　田中寿義雄（県文化課課長）・武富雅道（同課長補佐）・百武定弘（同庶務係長）

肥前国府跡調委員

○調査指導　田中琢（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長）・松沢亜生（同考古計画研究室長）・工楽善通（同遺物処理研究室長）・木全敬蔵（同測量研究室長）・伊東太作（同主任研究官）・西村康（同文部技官）・岩本圭輔（同文部技官）

○調査員　高島忠平（調査主任，県文化課文化財調査係長）・樋渡敏暲（同指導主事）仏坂勝男（同）立石泰久（同嘱託）

○調査補助員　中島直幸・藤原新子。

○調査参加者　久保伸洋（別府大学生）・種浦修（同）・城野一郎（久留米大学生）

**第二次発掘調査**

肥前国府跡発掘調査委員会

○委員長　池田武生（県教育委員会教育長）

○委員　鏡山猛・米倉二郎・岡崎敬・田中琢・沢村仁・七田忠志・小田富士雄・木下之治

○特別調査員　木下良・日野尚志・木原武男

○事務局　田中寿義雄・武富雅道・片渕正美（県文化課庶務係長）

肥前国府跡調査員

○調査指導　田中琢・松沢亜生・工楽善通・木全敬蔵・伊東太作・西村康・岩本圭輔

○調査員　高島忠平・樋渡敏暲・立石泰久

○調査補助員　中島直幸・藤原新子

○調査参加者　久保伸洋・種浦修・城野一郎

**第三次発掘調査**

○委員長　池田武生

○委員　鏡山猛・米倉二郎・岡崎敬・田中琢・沢村仁・七田忠志・小田富士雄・木下之治

○特別調査員　木下良・日野尚志・木原武雄

○事務局　田中寿義雄・武富雅道・片渕正美・大塚博昭

肥前国府跡調査員

○調査指導　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

○調査員　高島忠平・樋渡敏暲・杠一義（県文化課指導主事）・立石泰久・高瀬哲郎（県嘱託）

○調査補助員　松尾直子・川崎吉剛（駒沢大学生）久保伸洋・種浦修・城野一郎・林孝登史・藤原新子・山本タカ子

第一次～第三次発掘調査協力者

大和町役場・同町教育委員会・同町春日農業協同組合。その他地元民各位。

## 3. 調査日誌

### 第一次発掘調査　1975年11月17日～1976年3月31日

11・17　鍬入式・全体地区割・R地区に東西トレンチを設定。表土除去開始。

11・18　R地区トレンチ排土，表土浅く20cmで床土あり，遺物・遺構なし。

11・19　N地区にトレンチ設定，表土除去，北西から南東へ走る小溝状の遺構あり。

11・20～22　R地区10トレンチの包含層より縄文晩期土器・土師器・須恵器と共に出土，遺構は不整形のピットであり性格は不明。

11・25　R地区8トレンチのPit上層より，白磁片・青磁片・黒曜石・石斧出土。

11・26　R地区遺構検出16トレンチから，南北への幅20cm深さ50cmの小溝あり。

11・27～29　R・N地区遺構検出，N地区15トレンチより弥生土器出土，遺構性格不明。

12・1　NC区遺構検出，不明Pit群あり，土師器椀・須恵器甕片が出土。

12・2　IF区にトレンチ設定，表土除去，通称，高段土居といわれる土居の東側水田。

12・3～4　IF区遺構検出，南北溝検出，幅約3mあり。

12・5　NF区に南北トレンチを設定，表土除去，南側より，須恵器・土師器・青磁・弥生土器片出土。

12・8　NF区5トレンチの黒褐色土層を掘り上げるが遺物一片も含まれていず性格不明。

12・9　NF区南北トレンチ排土，表土・床土を30cm掘り下げると黄褐色粘土層の地山である。

12・11～12　NF・NE区での南北トレンチの遺構の検出を行うが，遺構なし。

12・13～15　NF区6トレンチ精査，砂層に切込んだPitを検出。性格不明。

12・16　RC区トレンチ設定，表土除去，須恵器・土師器片出土。

12・17　RC区，トレンチ遺構検出，浅い南北の溝状と小掘立柱穴建物跡検出。

12・18　NC・NF・IF区の遺構検出。

12・19　一段高くなったO区に南北トレンチを設定し，排土する。土師器・須恵器片多し。小Pit群が検出される。

12・22　O地区は表土・床土の下層に黄褐色土層があり，さらに黒褐色土層・黄色土地山と続き，南へ深い傾斜をなす。

12・23　NT区，トレンチに幅1.2mの南地溝状遺構あり，その約5m東方に平行して一部が重なった柱穴列を検出する。全部浅い。

12・24　遺構清掃，写真撮影。

12・25～1・11　年末，年始で調査中止

1・12　仕事始め，O地区トレンチ表土除去

1・13　O地区，トレンチで弧状の小溝を検出溝中から，須恵器・土師器出土

1・14～16　IF区5トレンチ杭穴列検出。RF区8トレンチから須恵器甕を伴う住居跡らしきもの検出

1・19～21　S地区に新たに南北トレンチを設定し排土し遺構を検出する。

1・22～29　RI区にトレンチを伸ばし排土包含層中より弥生後期の遺物出土，遺構の性格は不明

2・2～21　各トレンチ清掃，写真撮影・実測。

2・16～20　奈文研より木全敬蔵・伊東丈作・西村康，各氏来訪基準点測量

2・23　RG区トレンチ設定・排土・掘立柱穴群を検出。米倉二郎氏来訪。

2・24～3・31　写真・実測・埋め戻し

### 第二次発掘調査　1976年4月1日～5月31日　1977年1月　日～3月31日

4・1　第一次調査に引続き第二次調査を開始する。

4・2～12　第一次発掘調査の各区未実測か所の実測と埋め戻しを行う。

4・13～15　RH区の掘立柱穴群を東方にトレンチを伸し，4個の柱穴を加える。

4・16　RI・RH・RG区にトレンチを設定し排土にかかる。調査委員会を開催する。

4・17～24　QD区トレンチ検出，フイゴの破口，ツルボなど出土

4・26～28　写真撮影・実測・埋め戻し

4・30～5・1　雨天作業中止

5・6～30　実測・埋め戻し・補足調査

5・31　機械徴収

1977．1・18　第二次発掘調査を再開する。RG区嘉瀬川自然堤防上にトレンチを設定

1・19～20　表土除去

1・21　トレンチ中央に幅1mの落ち込みを確認する。

1・21～25　RG区トレンチを東西へ拡張し埋土を除去する。

1・27　東西へ伸びる溝状遺構確認する。

1・29～31　トレンチを拡張，柱穴確認

2・1～4　排土・表土下黒褐色土層が約80cm堆積している。

2・5　坪井清足鑑査官来訪

2・7～14　遺構検出，3棟の掘立柱建物跡が重なっているようである。

2・17～23　雪により作業中止

2・24　弥生期の溝より土器多量に出土

3・3～12　土器群撮影・実測開始

3・14　隣接東側にトレンチを設ける。

3・16～23　雨天のため室内作業

3・24～31　実測・写真撮影

## 第三次発掘調査 { 1977年4月1日～9月2日 / 1977年11月1日～1978年1月31日

4・1　第二次発掘調査に引き続き第三次調査を実施する。

4・2～30　RG区・精査・補足調査・実測

5・6　DD区トレンチ設定・表土除去

5・7～11　DD区北側には遺物は少なく，南へ下るにつれて多くなってくる。

5・12～25　DD区・ユンボーで表土除去

5・23　肥前国府跡調査指導委員会の開催

5・26～31　DD区遺構検出，東西へ通る溝を検出

6・1～6　溝は二条検出され，北側は奈良時代で南側は弥生時代のものであると推定される。

6・8～9　弥生期の溝の中には土器が多数堆積している。器台が多い。

6・13　米倉二郎氏・日野尚志氏来訪

6・14～30　雨天で作業中止

7・2～16　DD区土器取り上げ。

7・18～21　遺構清掃・写真撮影

7・22～30　実測・DD区補足調査

8・1～12　RG区埋め戻し

8・16～29　DD区埋め戻し

9・2　調査を一応終える。

11・1　第三次発掘調査を再開する。

QC区瓦塚東側蜜柑園にトレンチを設定し，表土を除去する。

11・2～4　南北溝を確認，溝は途中で切れており時代は奈良時代より新しい。

11・5～9　ベルコンを入れ排土

11・10～14　表土中より弥生土器片・土師器片・須恵器片出土

11・15～19　南北にトレンチを拡張して排土

11・21～30　QC区拡大部分の排土。掘立柱穴群を確認。

12・1～13　遺構清掃・写真撮影・実測

12・14　QC区西南部の溝より軒丸瓦出土

12・15～26　実測

1・9～12　実測・補足調査

1・13～30　埋め戻し

1・31　調査終了

# Ⅱ 遺 跡 の 概 要

## 1．遺跡の環境

肥前国府跡は佐賀県のほぼ中央に位置し，現在は佐賀県佐賀郡大和町久池井及び惣座に推定されている。

大和町は面積 55.13㎢で，北部は三瀬村・富士町に，東部は脊振村・佐賀市に，南部は佐賀市・三日月町に隣接し，南北に細長い地形になっている。大和町の北部を走る山系が筑紫山地でほぼ東西に走り，また，この山地に端を発した嘉瀬川（川上川）は惣座の西側を通り，佐賀平野を貫流し有明海に注ぎこんでいる。この嘉瀬川は惣座付近に扇状地を形成している。肥前国府跡はこの扇状地上に位置する。大和町を含めた筑紫山地の山麓一帯は現在，柑橘などの栽培，工場，住宅の建設，そして高速道の建設予定など大規模土地開発が進行している。このような現状から，この地域に濃密に分布している文化財と開発との問題が山積してきている。

国府が建設された場所は，一般的に「大化前代における文化・政治の中心地域であり，それぞれの国でのみのり豊かな生産の場であり海陸両様からする交通の焦点，かつは結節点であったといっても誤りがない。また，たとえ国府が内陸国の中央盆地に位置していても，その大部分は河川を通して下流の河口にその外港をもち海上交通にも決して不便でない地理的位置を保っていた[(1)]」ところだが，肥前国府も例外でなく陸路を通じて太宰府との連絡に便利な位置にあり，また嘉瀬川が隣接するなど自然的に優位な条件を持っている。

それに加え文化・政治の発展を証明する遺跡・遺物が幅広く分布している。大和町惣座付近では，先土器時代についてはわずかであるがナイフ形石器が出土し，縄文時代以後については数多くの遺跡・遺物が出土している。

昭和25年，本格的な発掘調査が実施され，住居址・洗場などの遺構，それにモミなどの植物種子も出土した久留間遺跡[(2)Ⓒ]をはじめとして弥生時代の遺跡が密集している。また，惣座の南東 1.5km大和町尼寺南小路からは広形銅戈，そして脊振山地南麓で最初に確認された支石墓も出土している。また大和町の嘉瀬川の川床から弥生土器とともに方角規矩鏡片も採集されている。注目すべきは前記の銅戈や佐賀市高木瀬町出土の広形銅鉾など佐賀市周辺の銅器類は，ほとんど嘉瀬川流域から出土していることである。このことは弥生時代，嘉瀬川流域が佐賀市周辺における中心的位置を占めていたことを物語るものであろう[(3)]。次に注目すべきは大和町佐賀市の脊振山麓は，佐賀県でも特に古墳が濃密に分布することである。5 世紀に造ら

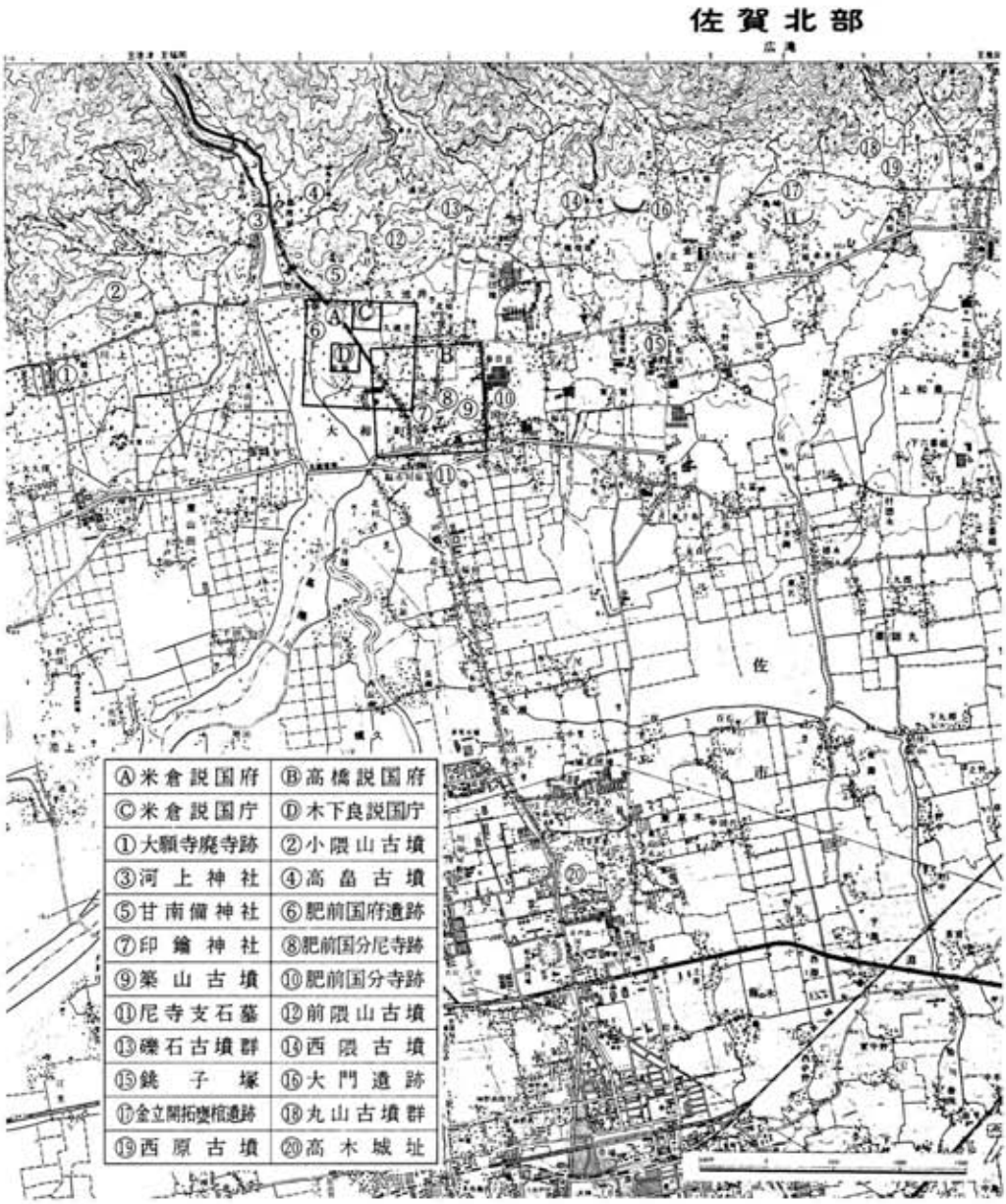



Fig. 1　国府跡周辺地形図

れた長さ 4.3mの熊本山舟形石棺墓[4]，県内屈指の大前方後円墳で封土の周りには周濠が設けられ，前方部が低く細長い柄鏡式の形をした銚子塚[5]，有明海沿岸では福岡県八女市の岩戸山古墳につぐ県下最大の前方後円墳で周濠も設けられ七基の陪塚を有している船塚[5]，その他前方後円墳として築山古墳[4]，小隈山古墳[4]などがあり，円墳としては琴柱形石製品をだした森の上古墳[6]，そして高畠古墳[4]などがある。5世紀には彩色の線刻文様のある家形石棺を内蔵した

西原古墳[4]や西隈古墳[5]，九州横断道の発掘調査で発見された，阿蘇凝灰岩製の舟形石棺を持つ3号墳を初めとした10基の円墳からなる丸山古墳群，鏡などの豊富な副葬品を持った前方後円墳の関行丸古墳[7]など，そして7世紀には男女山古墳群[4]，礫石古墳群[4]などの古墳群がある。また古墳以外には，古墳時代後期に築成されたと推定され，全国的にも数少ない，しかもわが国における最古の山城跡である帯隈山[8]神籠石，二町四方に及ぶ規模で確実な資料がなく，その創建や廃絶の年代など一切不明であるが礎石や遺瓦の様式からみて奈良時代の創建になるものと推定されている大願寺廃寺跡[5]，神功皇后の妹といわれる淀君を祭神としており，古来，肥前国一の宮として崇敬された河上神社[5]，そして国分寺跡，国分尼寺跡[9]などが所在する。特に権威の象徴である前方後円墳が濃密に所在することは，この地方に強力な支配者層が存在したことは確実である。「ここの小字に国尺という所があり……国造を国作と書き…再三転じて国尺と書くにいたったものであろう[10]」ということから，この地に国造がいたという説もあるが，「国造本紀」には大和町を中心にした一帯にはその名が見えず，その存在は定かではない。しかし，なんらかの支配者がいたことは伺い知る。とにかく，嘉瀬川を中心とした惣座一帯が肥前国の中心であり，古墳時代までに国府設置の下地ができていたことは推測に難くない。

## 2．国府跡の推定と諸説

国府の所在を示す最古の文献である「倭名抄」には甲斐・相模・丹後・備前・豊後・肥前・肥後などの国府のように現実の国府跡と思われるものと合致しないものがある[11]。肥前国府の場合，「小城郡乎岐国府」とし国府所在を佐賀県小城郡としている。しかし，これについて「小城に絶えて府址を見ず，佐賀郡久池井に遺址ありて，其国分尼寺并に惣社も此に在れば小城に作るは誤ならん[12]」という説があり，現在は国府と関連のある地名や社が多く存在する大和町惣座に設定するのが通説になっている。たとえば国司が国内の主な神社への巡拝の労を省くため諸神を集め祭った総社の遺称である惣座の地名や印鑰社の存在，国府に納めた米穀その他の貢祖を収納する倉庫が建っていた「納所」，納所に納める米がこぼれ散ったところか，あるいは惣社に供えた賽米が散布していたところで散米からきている「佐熊」，国司甘南備真人浄野の名前からきている「甘南比神社（山）」，その他，「国尺」，「下印鑰」，「鑰尼」，「井釜」，「じょうの内」，「庁の坪」，「宝満」などがあり，また，国府の例からみると一般的に国府に近接している「肥前国分寺」，「肥前国分尼寺」などが所在している[13]。

肥前国府の正確な位置についても諸説があって推定の域を出ない現状である。米倉二郎[14]は国府と関係の深い神社や地名が残存している大和町久池井付近にあったと推定し「久池井から北原・小川を経て金立へ通ずる道路と国道 263号線との分岐点の北側，方二町を国府址とし，国府域をこの国庁址を中心としてその南北および東西の方向に形成されたとしている[3]」高橋誠一[13]は道路の形態のみならず「印鑰」，「下印鑰」，「納所」，「宝満」などの小字名など

神籠石の前面に国府・交通路・水田・豪族の本拠地のセットが見られ「大和町尼寺の交叉点を東西に走る県道久留米小城線付近を南限とし，北は久池井から金立へ通ずる道路，東は県立春日園の東側を南北に通っている道路，西は県立佐賀農芸高校の中央付近を南北に引いた線で囲んだ一帯を国府域と推定している[3]」　木下良[16]は国府域については米倉説と同じであるが，国庁域は水田化された一帯の低湿地で洪水の被害を受けやすく不適当の地として米倉説を否定し，府域中央側にあって布目瓦を出土する，一帯の畑地となっている微高地(「瓦塚」と称している)，すなわち「国道263号線の西側で佐熊部落の北側二町四方の地を推定している[3]」木原武雄は瓦が多く散布する久池井部落を中心としたところを国庁域と推定している。その他，国分寺と国分尼寺の中間，築山古墳一帯をあてる説などいろいろな推定がなされている。また，直接国府とつながるかは明らかでないが，昔から「萩原長者」と「栗の長者」の伝説が残っている。これは木下説に関連ある国道 263号線をつきぬけた西方一帯の畑地である萩原と，現在，春日より久池井部落の西方にかけ「高段土井」と称する堤防上に水路を設けた長堤と関連する伝説であるが，萩原になんらかの建物（国府？），または権力者(国司？）を想定できるものである[13]。

以上，肥前国府の所在について諸説があるが，今はみかん畑・栗畑・水田などに変化しているこの嘉瀬川の扇状地の微高地に国府が存在したことは間違いないであろう。


註 (1) 藤原謙二郎　『国府』吉川弘文館　1969

(2) 松尾禎作，七田忠志　「久留間遺跡調査概報」『佐賀縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第10掛，佐賀県教育委員会　1951

(3) 『佐賀市史』第１巻，佐賀市教育委員会　1977

(4) 『佐賀県の遺跡』佐賀県教育委員会　1964

(5) 『佐賀県の文化財』佐賀県教育委員会　1956

(6) 松尾禎作　「春日村森の上古墳」『佐賀縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第８掛，佐賀県教育委員会　1951

(7) 『関行丸古墳』佐賀県文化財調査報告書，第７集　1958

(8) 鏡山猛　「帯隈山神籠石」『帯隈山神籠石とその周辺』佐賀県文化財調査報告書，第16集，佐賀県教育委員会　1967

(9) 松尾禎作　「肥前国分寺及尼寺」『佐賀縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第６掛，佐賀県教育委員会　1951

(10) 米倉二郎　『東亜の集落』　1962

(11) 木下良　「歴史地理からみた国府所在地」『自然と文化』日本ナショナルトラスト　1977

(12) 吉田東伍　『大日本地名辞書』上巻　1907

(13) 『大和町史』大和町教育委員会　1975

(14) 『佐賀県史』上巻　佐賀県教育委員会　1968

(15) 高橋誠一　「古代山城の歴史地理」『人文地理』第24巻・第５号

(16) 木下良　「印鑰社について」『史元』第17号　1973

# Ⅲ 遺　　構

## 1．遺構概要

第一次から第三次まで三年間にわたって，発掘調査を実施したのであるが，東西 700m南北 540m四方(国土座標Y －67.620～－66.920，X ＋34.956～＋35.496)の地域に発掘区を，3m幅を基本としてD地区1本・I地区7本・N地区25本・O地区8本・Q地区5本・R地区39本・S地区6本・合計91本を設定した。そのうち，面として拡大した地区が4か所である。（PLAN 2）

地形により発掘地域を大まかに分けると，山麓から平野へと伸びる一段高くなった水田，宅地部とそれに続き，なだらかに南下する水田地帯と西側を流れる嘉瀬川の自然堤防の部分になる。

水田地域は，全般に黄褐色粘質土が地山でその上には黒褐色土の薄い包含層を持つか，すぐ床土であり，その上に表土が堆積している。(Fig.2－1・Fig.2－2）奈良時代の遺構は

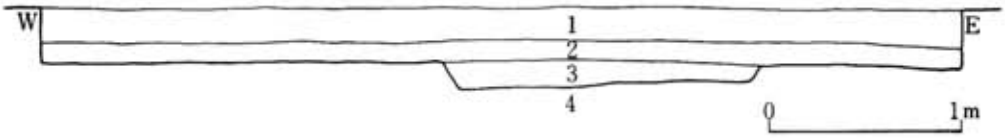



Fig. 2－1　RC区東西土層図　1．耕作土　2．床土　3．黒褐色土　4．黄褐色土(地山)

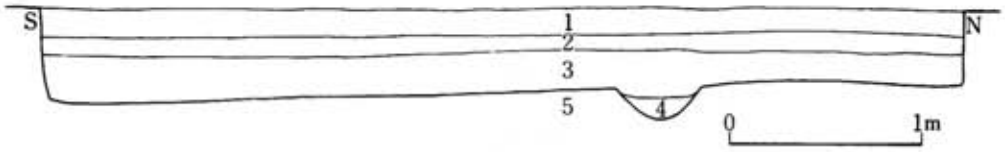



Fig. 2－2　O地区南北土層図　1．耕作土　2．床土
3．黒褐色土　4．黒色土　5．黄褐色土(地山)

地山上面で検出される。

嘉瀬川自然堤防地域は，黄褐色粘土質の地山の上層に，黒色粘質土・暗茶褐色粘質土，とあり，耕作土と堆積している。(Fig 2－3）奈良時代の遺構は，暗茶褐色粘質土層の上面にあり，地山まで切り込んでいる。

遺構は，全体的に見ると中央から東側水田には幾条かの溝を検出したが，

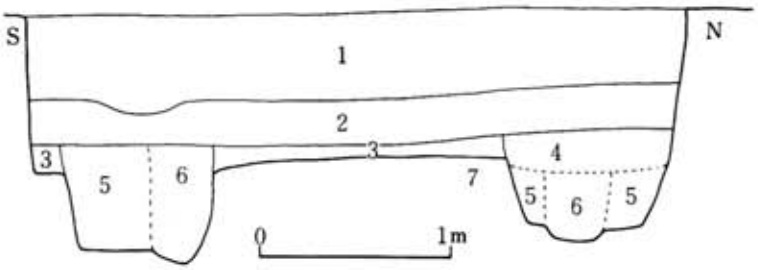



Fig. 2－3　RG区東西土層図　1．耕作土　2．暗茶褐色粘質土
3．黒色粘質土　4．黒色土　5．黒色粘質土(地山ブロック混入)
6．灰褐色砂質土　7．黄褐色土（地山）

溝の走る方向に発掘区を拡大できず，発掘区間では関連した溝として把握されなかったので，これらが国府・国庁と如何なる関りを持つのか明確ではない。

しかし，一段高くなった北部水田中から西側水田にかけて，小掘立柱穴を持つ住居跡が存在する。これらは，国府の存続期のものであり，何らかの関りを持つものと考えられるが，その性格等についての詳細は明らかではない。

次に，嘉瀬川自然堤防上では，明らかに，官衛跡であろうと推定される堂々とした掘立柱穴を持つ建物跡群が検出された。これらの遺構は重複しており，数回にわたって建て替えられたものと考えられる。しかし，これら建物跡の相互関係については明らかではない。

地区ごとに遺構を見ると，(PLAN 2)，IF区では，2・3・5・6・7 発掘区から南北の溝が9条検出されたが，2・3・6・7発掘区の溝が性格的に類以しており，もしつながると推定すれば，蛇行し，二股に分かれて北から南へ流れていた溝であったろうと思われる。時代的には奈良時代より古いものであろうと推定される。

N地区では，4発掘区東端から西北より東南へ斜行する小溝と，15発掘区西端から，逆に東北より西南へと斜行する小溝が検出された。これらは，途中で曲るか，消滅していると思われ，まじわっていない。又，この地区からは，弥生時代の土器を伴うPit群が検出されているが，性格等は不詳である。

R地区では，RA区37発掘区の東端から，約9mの間隔で2条の溝が少し西へふれて南北に走っており，これは，RC区16・17発掘区にかかる溝と，RC区10発掘区の西端の溝と関連していると推定される。これら溝は，幅約0.8m，深さ約0.5mで，国土座標北に対して約1度37分西へ振れて走っている。

また，RF区22・23発掘区から，ほぼ東西へ走る溝が検出されたが，他の溝との関連は不明である。

RF区2発掘区では，4個の柱穴が方形に並び，その両側が浅い南北の溝状を呈しさらに西側に3個の柱穴をもち，その西側がまた浅い溝状になっている遺構を検出した。その性格等については不明であるが，先述のRC区における溝と溝との芯心から約81(270尺)mはなれており，何らかの区割をはなすものではなかろうか。

RA区38・39発掘区からは，東西へ走る溝が，大小8条と，青磁・白磁が出土した井戸を検出した。これらも，国府を割するものと思われるが国府地割のどの部分にあたるかの判断は現段階では難しい。

次に，RI・RH区をゆるやかに蛇行して南へ流れていたと思われる小川状の遺構が検出された。伴出する土器は弥生後期のものであり，国府期より古い小川であったと思われる。

国道263号に隣接するRB区では，2間×2間の総柱の掘立柱建物跡を検出した。(SB006)

O地区，1・2・4・6発掘区からは，小柱穴群を発掘した。奈良時代の小規模な掘立柱の住居跡であると考えられるが，国府域との関りについては不詳である。

S地区では，3発掘区において，西北から東南へ斜行する深い溝が検出された。奈良時代の遺構であると推定されるが，詳細は不明である。

QD区，3発掘区において東北隅より柱穴の一部を検出する。東側へ広がると考えられるが，明らかではない。中央部やや南の部分から，鉄滓と共にフイゴの破口，ルツボを出土する。小鍛治の跡ではないかと思われる砂床を持つ部分があるが，明確な遺構として捕えられなかった。老司式の軒平瓦も出土している。

DD区・RG区・QC区の掘立柱建物跡については次に詳述するが，DD区では，3間×5間の総柱の東西棟，RG区では，3間×6間以上の南北棟，それと重複して1間×2間以上が少なくとも3棟はあったと推定されるが，後の3棟は軸線が少し異なる。又，31発掘区から3間×7間の東西棟が検出されている。QC区からは3間×5間の東西棟がそれぞれ検出されている。これらは，いずれも嘉瀬川の自然堤防上に位置しており，国庁に何らかの関りを持つと推定される。

次にQ·C区の通称瓦塚と呼ばれる遺構であるが，布目瓦・青磁・白磁・須恵器類を多量に廃棄して塚状になっているものである。建物基段と考えられたが，その痕跡はなく，多分，ある一時期に畑地の開墾等によって出土したものを集積したものであった。しかしこれだけの多量の瓦は，SB 007の建物跡のものだけとは考えられず，近くに，瓦葺きの建物跡の存在を推定させる。

遺構の概要については，以上のようであるが，溝状遺構も幾条も検出され全域にわたって東西，南北に大小通っていた事が推定される。しかし，これらの全体のつながりはかならずしも明確ではない。Fig 2－4はRG区における南北溝の東西土層図である。

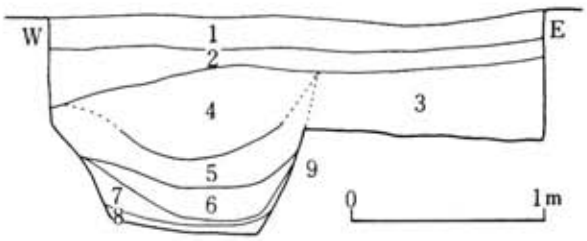



Fig. 2－4　RG区南北溝東西土層図　　1．耕作土
2．暗褐色粘質土　3．黒色粘質土
4．黒色土　5．黒褐色土　6．暗黒褐色土
7．暗黒褐色砂質土　8．暗黒褐色粘質土

掘立柱建物跡の位置関係は，倉庫跡も含めると南北260mを測り，除いても南北約220mとなり，国庁域二町内に全部を配置するには無理があると思われる。発掘調査が幅3mの発掘区を基本として行なわれ，地域的な制限等で発掘域が拡大出来なかったため詳細は今後の調査に待つところが多い。

## 2．遺構各説

### QC地区の遺構

検出した遺構は，掘立柱建物跡1棟，溝2条，弥生時代の竪穴住居跡1棟，江戸時代の溝2条である。掘立柱建物跡SB 008は調査区の中央に位置し，西妻がSD 026を切っている。

ＳＢ 008の南側にＳＢ 008と柱筋は通らないが，東西に並ぶ柱穴は，他の建物跡と思われる。発掘区東南隅にある土壙ＳＫ 064は，平面形が楕円形で袋状に掘りこまれており，壙内の黒褐色粘質土の堆積土から「老司式」系の軒平瓦が出土した。

ＳＢ 008掘立柱建物跡（Fig.3，ＰＬ．11－1･2，ＰＬ.12－1） 5間×3間（11.5m×5.7m）の東西棟の建物跡で建物方位の南北軸は座標北に対して西へ5度26分25秒傾いている。柱間は桁行の西端の1間が2.6m（8.7尺）で，他は各 2.2m（7.3尺）である。梁行の柱間は各 1.9m（6.3尺）である。柱掘形は各一辺約1mの方形プランで，深さは約 0.8mあり，柱痕の直径は各約 0.3mである。

ＳＤ 025南北溝（Fig.3，PL.12－2）

幅約 1.5m，深さ 0.5mで南北にのびる溝である。江戸時代の溝に破壊されているが，底面から「老司式」系の軒平瓦（Fig.17－5，ＰＬ．34－5）が出土した。ＳＤ 026と切合って

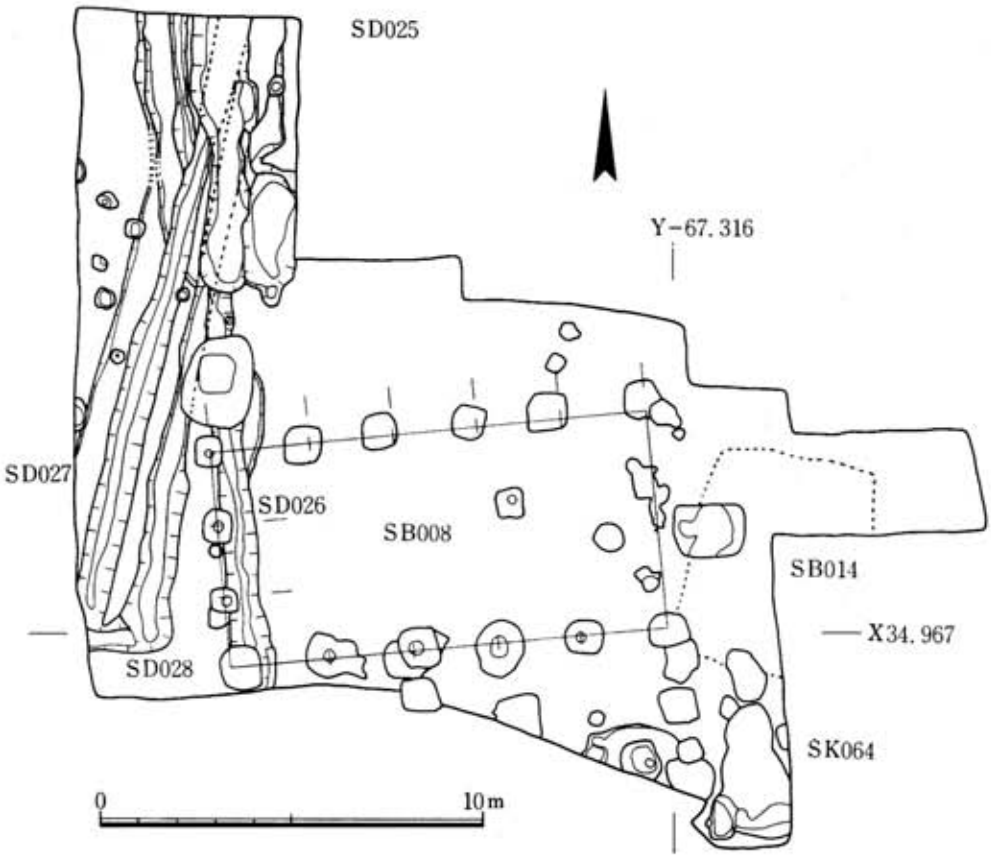



Fig. 3　QC 地区05 発掘区平面図

いるがこちらの方が新しい。

SD 026南北溝（Fig.3，PL.12－2）

幅約 0.8m，深さ 0.7mの断面台形状で南北にのびる溝である。SB 008の西妻で途中点々と切られ，又SD 025によって切られている。底面は南端の方が北端よりわずか低くなっている。

**RB地区の遺構**

RB地区で検出した遺構は，掘立柱建物跡一棟，溝1条である。掘立柱建物跡SB 006は発掘区西端にあり，溝SD 047は中央に位置している。

SB 006掘立柱建物跡（Fig.5，PL.7－1・2・3） 2間×2間（3.3m×3.3m）の総柱の建物跡で，建物方位の南北軸は座標北に対して西へ11度18分35秒傾いている。柱間は各1.65m（5.5尺）である。柱掘形は各一辺約0.7mの方形プランで，深さは 0.3mあり，柱痕の直径は各約0.23mである。

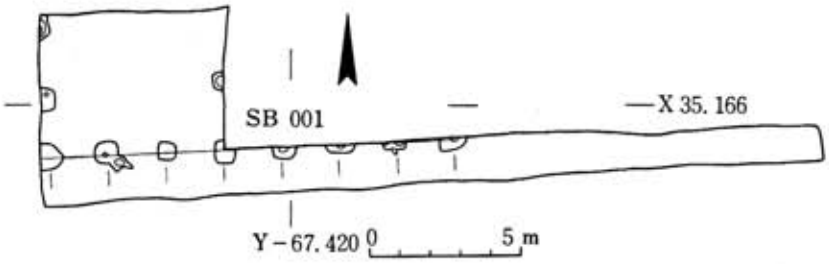



Fig. 4　RG 地区31発掘区平面図

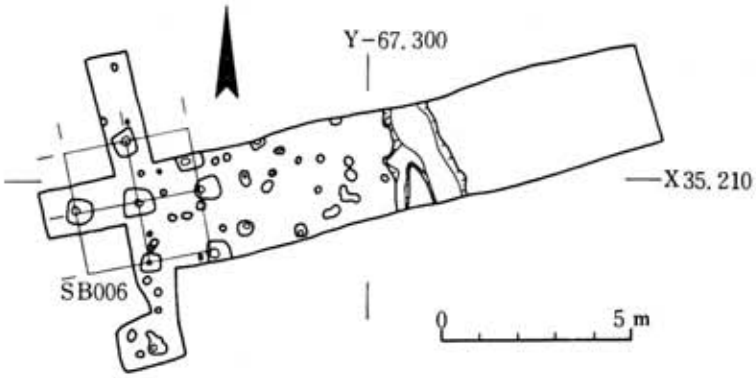



Fig. 5　RB 地区25発掘区平面図

SD 047南北溝（Fig.5，PL.7－1）幅約 0.8m，深さ約0.35mの断面台形状でほぼ南北に走る溝である。東壁の一部を最近の溝で破壊されている。SB 006と方位が似ている関係上同時期のものであろう。

**RG地区の遺構**

RG地区は合計4本（No.30～No.33）のトレンチを入れた。30発掘区はピット群を，31発掘区は掘立柱建物跡1棟，32発掘区北側で弥

生時代の竪穴住居跡１棟，33発掘区で掘立柱建物跡４棟，溝４条，その他弥生時代の竪穴住居跡２棟，溝１条を検出した。33発掘区では弥生時代のものを除くと，３条の溝に囲まれるようにして建物跡があり，一部これらの遺構は重複している。発掘区西北部の柱掘形群は，発掘区域の関係からまとまった建物跡として確認できなかった。これらの建物跡は重複関係から三時期に大別できる。A期の建物跡ＳＢ 005，B期ＳＢ 004，C期ＳＢ 002・ＳＢ 003になる。31発掘区のＳＢ 001はこれらの建物跡との時期関係は直接的にはつかめなかったが，建物規模，方位からみてB期に属すると考えられる。

溝は３条がコ字形に配置され，重複関係から二時期，もしくは三時期に分かれる。二時期としては，A期ＳＤ 020・ＳＤ 021，B期ＳＤ 022の順で，三時期としてはA期ＳＤ 020，B期ＳＤ 021，C期ＳＤ 022の順になる。

ＳＢ 001掘立柱建物跡（Fig.4　PL.2－1・2，PL.3－1）

この建物跡は調査区の関係から全掘できなかった。７間×３間(13.5m×4.2m）の東西棟の建物跡である。建物方位の南北軸は座標北に対して西へ２度27分27秒傾いている。柱間は桁行各 1.9m（6.4尺），梁行各 2.1m（７尺）である。柱掘形は各辺約 0.8mの方形プランである。深さは各約 0.6mで，柱痕の直径は平均して 0.3mある。

ＳＢ 002掘立柱建物跡（Fig.6，PL.4－1）　２間×１間（5.35m×2.4m）の建物跡である。建物方位の南北軸は座標北に対して西へ20度22分35秒傾いている。柱間は桁行各 2.67m（９尺），梁行 2.4m（８尺）である。深さは各約 0.3m，柱痕の直径は平均して 0.25mである。ＳＢ 004の東側柱穴と切合っており，ＳＢ 004がＳＢ 002より新しい。西北隅柱は調査区の関係で検出できなかった。

ＳＢ 003掘立柱建物跡（Fig.6，PL.4－1）　３間×１間(4.6m×2.65m）の建物跡である。建物方位の南北軸は座 標北に対して西へ20度22分35秒傾いている。柱間は桁行各 1.5m（５尺）である。柱掘形は各辺約 0.7mの方形プランで，深さ各約 0.4mである。柱痕の直径は平均して0.25mである。ＳＢ 004の東側中央部柱掘形で切合い関係にあり，この建物跡の方が古い。

ＳＢ 004掘立柱建物跡（Fig.6，PL.4－1・2，PL.5－1）　7間以上×３間(18m以上×6.5m）の南北棟の建物跡である。建物方位の南北軸は座標北に対して西へ４度３分12秒傾いている。柱間は桁行で，南から北へ５間までは各2.75m（９尺），その他は各 2.1m（７尺）になる。梁行は各 2.2m(7.3尺)である。柱掘形は各辺 1.1mの方形プランをなし，深さ各約0.8m，柱痕の直径各0.25mである。このＳＢ004建物跡の北側の妻は調査区ではまとまらず，北へのびるものと思われる。桁行７間以上にもなるので，詳細は今後の調査をまたねばなら

ない。このＳＢ 004建物跡の桁行の方向と，ＳＤ 022の方向とがほぼ平行に走り，梁行も又ＳＤ 021と平行に走る。これはある時期に建物跡と溝は，共存していたとも考えられ，この場合この建物跡はＳＤ 021とＳＤ 022に囲まれた一画の東南隅に位置することになる。

ＳＢ 005掘立柱建物跡（Fig.6，PL.5 － 1） 1間×1間（2.85m×2.65m）の建物跡で建物方位の南北軸は座標北に対して西へ11度58分33秒傾いている。柱掘方は一辺約 0.6mのほぼ正方形である。深さは約 0.4m，柱痕は直径約 0.3mになる。ＳＢ 004と東南隅で切合い，この建物が新しい。

ＳＤ 020南北溝（Fig.6，PL.4－2，PL.6－3） 幅約1.3m，深さ約 0.5mの断面台形で

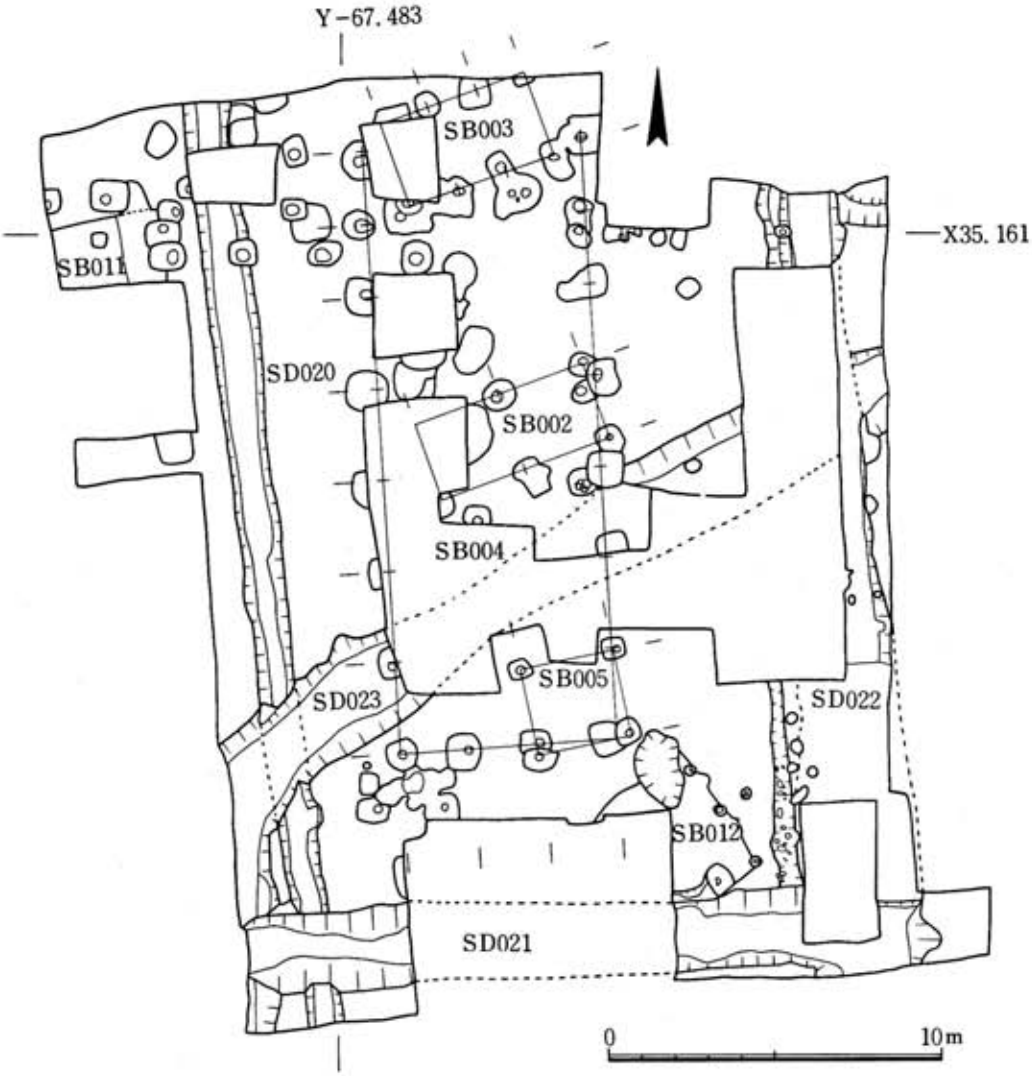



Fig. 6　RG 地区33発掘区平面図

北端の底面と南端の底面との比高差が約１ｍの南流する溝である。ＳＤ023を切り，ＳＤ021に切られている。遺物として須恵器片が出土している。

ＳＤ 021東西溝（Fig.6，PL.6－１・３） 幅約 2.3m，深さ約１ｍの断面台形の東西溝である。底面の凹凸が著しく，他の溝に比べて深くなっている。東南隅でＳＤ 022と切合って終了している。ＳＤ 022に切られているが，規模，構造が以ているところから，共存していた時期もあると考えられる。溝内の堆積土は黒褐色粘質土を主としているが，この溝の上面から土師器（Fig.12－7， PL.31－２）が出土している。

ＳＤ 022南北溝（Fig.6，PL.6－２） 幅約 3.5m，深さ約１ｍの断面台形の南北溝である。北端の溝底と南端の溝底の比高差は約 0.7mで，南の方が低くなっている。西壁上端と東壁上端では約 0.7m近く西壁の方が低くなっている。このことは建物跡の存在する面の方が高くなっていることから，高い方がある区画の内側，低い方が外側になると考えられる。

**ＤＤ地区の遺構**

検出した遺構は，掘立柱建物跡１棟・溝２条，その他に弥生時代の竪穴住居跡２棟・溝１条･甕棺墓1基･石蓋土壙墓1基である。これらの遺構は発掘区中央に溝3条,南側に掘立柱建物跡１棟・甕棺墓・石蓋土壙墓があり，各々は重複関係にある。この地は嘉瀬川の東岸沿いに位置しているが，氾濫を受けた形跡はなく，遺構の保存状態が良い。

ＳＢ 007掘立柱建物跡（Fig.7，ＰＬ.9－1･2，ＰＬ.10－1） 5間×3間(8.3ｍ×5.5ｍ）の東西棟で，総柱の建物跡である。建物方位の南北軸は座標北に対して西へ４度36分00秒傾いている。柱間は桁行で各約1.65ｍ (5.5尺)，梁行で各約 1.8ｍ（６尺）である。柱掘方は方形プランで各辺約 0.9ｍ，柱痕跡の直径0.25ｍである。

ＳＤ 017南北溝（Fig.7，PL.10－２） 調査区の中央から東南に走る溝で，ＳＤ 018に接し切られている。幅約 1.5m，北端と南端の比高差は 0.7ｍあり南流する。

ＳＤ 018東西溝（Fig.7，PL.10－２） 幅 1.6m，深さは中央部で 0.8m，断面台形をなしている。東端と西端の比高差が， 0.3ｍあり，西へ行くにしたがって深くなる。おそらく流出口は嘉瀬川に面していると考えられる。南壁の大部分は破壊を受けている。

**ＲＡ地区の遺構**（Fig.9）

この地区には，３本のトレンチを入れ７条の溝と，１基の井戸跡ＳＥ 063を検出した。このトレンチで特に注目されることは，それぞれの溝が国府域の地割に関連しているように思われることである。しかし国府跡調査が全体的に不充分な段階にあるので国府地割のどのような位置を占めるか不明である。ＳＥ 063は青磁･陶器が出土しており平安時代のものである。

ＳＤ 033南北溝（Fig.8， PL.15－３） この溝は37発掘区の東側で検出した。東西３ｍ

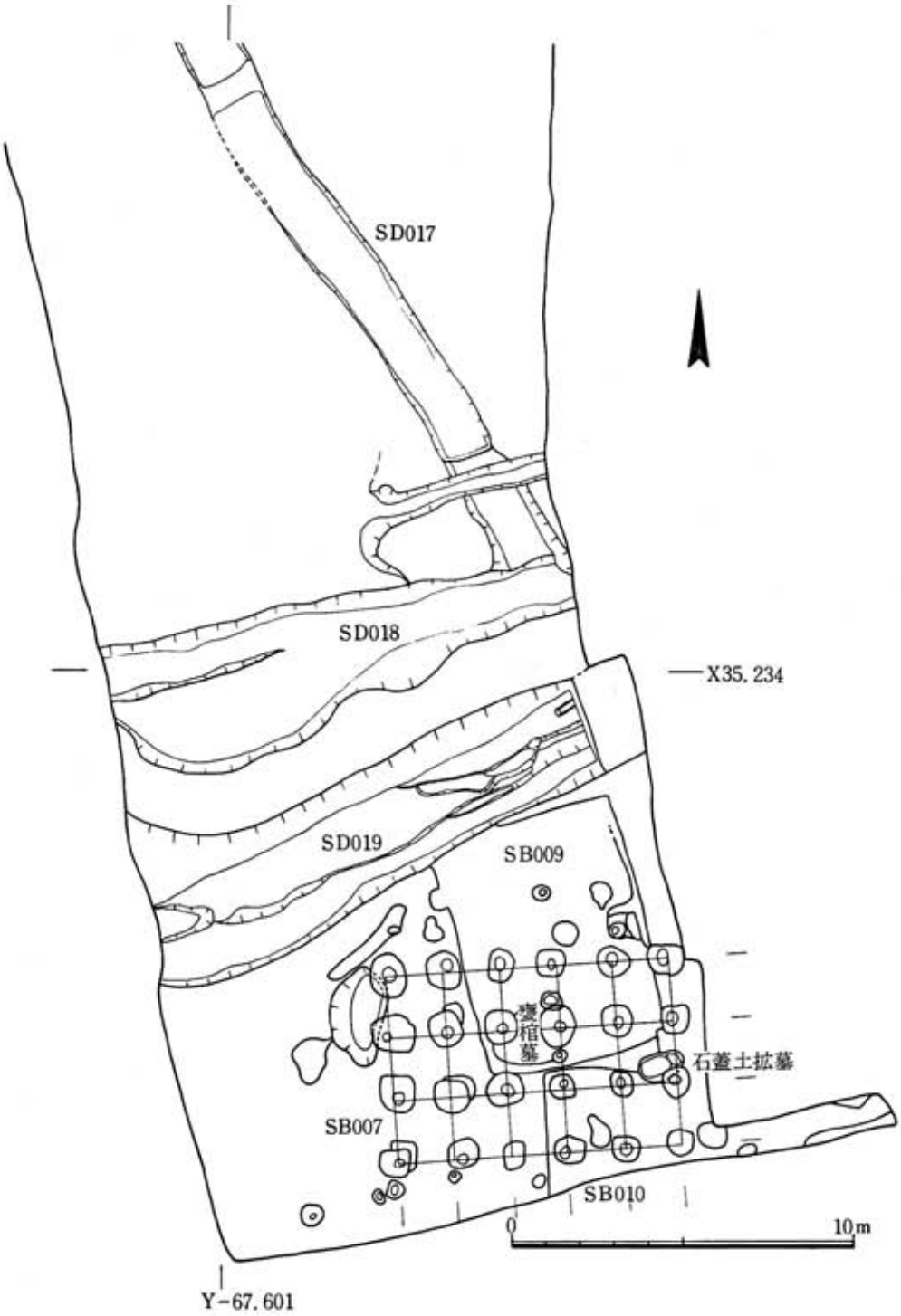



Fig. 7　DD 地区01 発掘区平面図

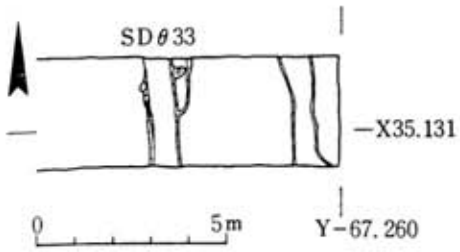



Fig. 8　RA 地区37 発掘区平面図

の間隔をおいて，南北に走る２条の溝で，共に幅約 0.7m，深さ 0.3mである。ＲＣ16・17発掘区の溝ＳＤ 050と，ＲＣ10発掘区の溝ＳＤ 051はこの溝と南北に通る同一の溝で，国府域を区割する道か，もしくは築地のなごりであるかも知れない。又ＲＡ39発掘区を入れそれぞれに遺構を検出した。特に 02発掘区では溝ＳＤ 049を確認した。

ＳＤ 049南北溝（Fig.10）この溝は２条の溝をなし，南北に走る。東側の溝は幅 1.7m，深さ 0.3m，西側の溝は幅 2.2m，深さ0.25mである。この２条の溝の間隔は 2.7mある。この溝は，ＱＣ地区のＳＤ 025南北溝と一連のものと考えられる。

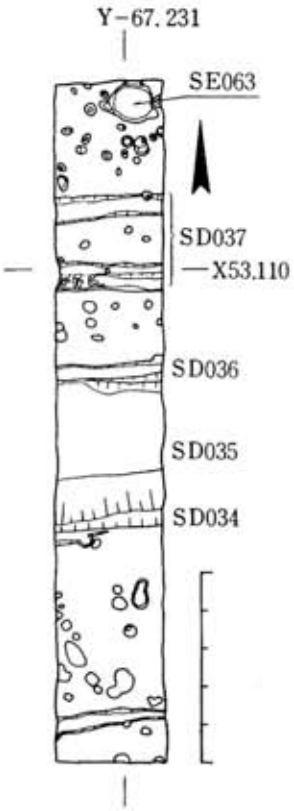



Fig. 9　RA 地区39
発掘区平面図

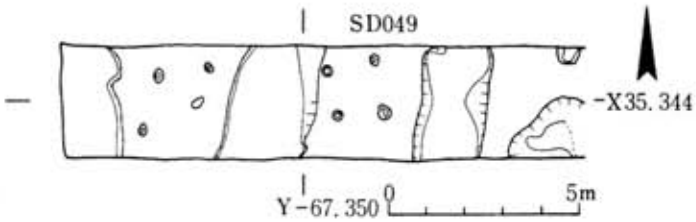



Fig. 10　RF 地区02 発掘区平面図

**建　物　一　覧　表**　Tab. 1

| 遺　構 | | 柱間数 | 柱間寸法 桁×梁 |
|---|---|---|---|
| ＳＢ００１ | 東西棟 | 7 × 3 | 1.9 ×2.1 |
| ＳＢ００２ | 東西棟 | 2 × 1 | 2.67×2.4 |
| ＳＢ００３ | 東西棟 | 3 × 1 | 1.5 ×1.5 |
| ＳＢ００４ | 南北棟 | 7以上×3 | 2.1 ×2.2 |
| ＳＢ００５ | 東西棟 | 1 × 1 | 2.85×2.65 |
| ＳＢ００６ | | 2 × 2 | 1.65×1.65 |
| ＳＢ００７ | 東西棟 | 5 × 3 | 1.65×1.8 |
| ＳＢ００８ | 東西棟 | 5 × 3 | 2.2 ×1.9 |

# Ⅳ 遺　　物

## 遺物の概要

当遺跡から出土した遺物は，土師器・須恵器・瓦・黄釉陶器・磁器である。土師・須恵器についてみると，O地区・S地区・R地区に多く出土している。また，遺構が集中して発見された第三次調査のQC地区，RG地区では数は少ないが時期の判断に足る資料が検出されている。瓦の出土地域にはかたよりがみられる。掘立柱建物遺構が発見されたRG32発掘区，D・D区とその周辺からは瓦は出土していない。これに対して瓦塚とその周辺からは多数の瓦が検出された。R地区より黄釉陶器と青磁が出土している。

全体的にみると調査面積に比べ量は少なく，特に米倉説の全域とそれに西接する水田には皆無であった。掘立柱建物跡が多く発見された惣座部落から南に延びる嘉瀬川の自然堤防上（現在は果樹園）には土器も多く，南端の瓦塚周辺（QC区）では瓦も非常に多い。今後，単弁瓦を出土した久池井とともに注目すべき地区である。

## 1．土　師　器

土師器はO地区05発掘区の溝，S地区03発掘区の溝さらにO地区・RI区・RG地区32発掘区の溝より出土している。

杯と椀がその大部分を占める。その形態の特徴より**杯A・B**の2型式に分けられ，法量によってⅠ～Ⅲ，さらに細部の特徴により**杯A**がa～e，**杯B**がa～gに細分することができる。

**杯A**aに分類できるものは8個体である。**A**aはその法量によって**A**Ⅰa～**A**Ⅲaに3分することができる。**杯A**Ⅰa（Fig.11－1）口径14.3cm，器高 4.8cm・底部径10.1cmであり，底部はやや丸底気味である。体部は直線的に外に開き内面の体部と底部の境に稜をもっている。外面での体・底部の境は丸みをもつ。底部はヘラ切り離しで，ロクロは右回りである。体部外面にはロクロ形成時の凹凸がある。胎土に少量砂粒を含み，焼成は褐色味を帯びた灰白色である。口縁～体部の一部を欠くのみでほぼ完形である。**杯A**Ⅰa（Fig.11－2，PL.31－9）口径14.2cm，器高 4.7cm・底部径10.2cmであり，形態の特徴は1と同様である。ロクロ回転は右であり，1と同様に胎土に赤褐色の粒子を含む。ほぼ完形であり，口縁～体部の一部を欠く。**杯A**Ⅱa（Fig.11－3，PL.31－7）　口径13.2cm，器高4.0cm，底部径7.7cmであり，体部は直線的に外反し，口唇部がわずかに外反する。底部は平坦に近く，外面の底・体部の境は丸みをもち，内面のそれは境が明確である。底部はヘラ切離しで，内側底にロクロ痕の凹凸がある。ロクロは右回り，色調は淡い赤褐色を呈する。胎土に少量の砂粒を含み，全体の$\frac{3}{4}$が現存し，口縁～体部の半分を欠く。**杯A**Ⅱa（Fig.11－4，PL.31－5）口径13.3cm，器高 3.3cm，底部径 8.3cmであり，形態の特徴は3と同様である。ロクロは右

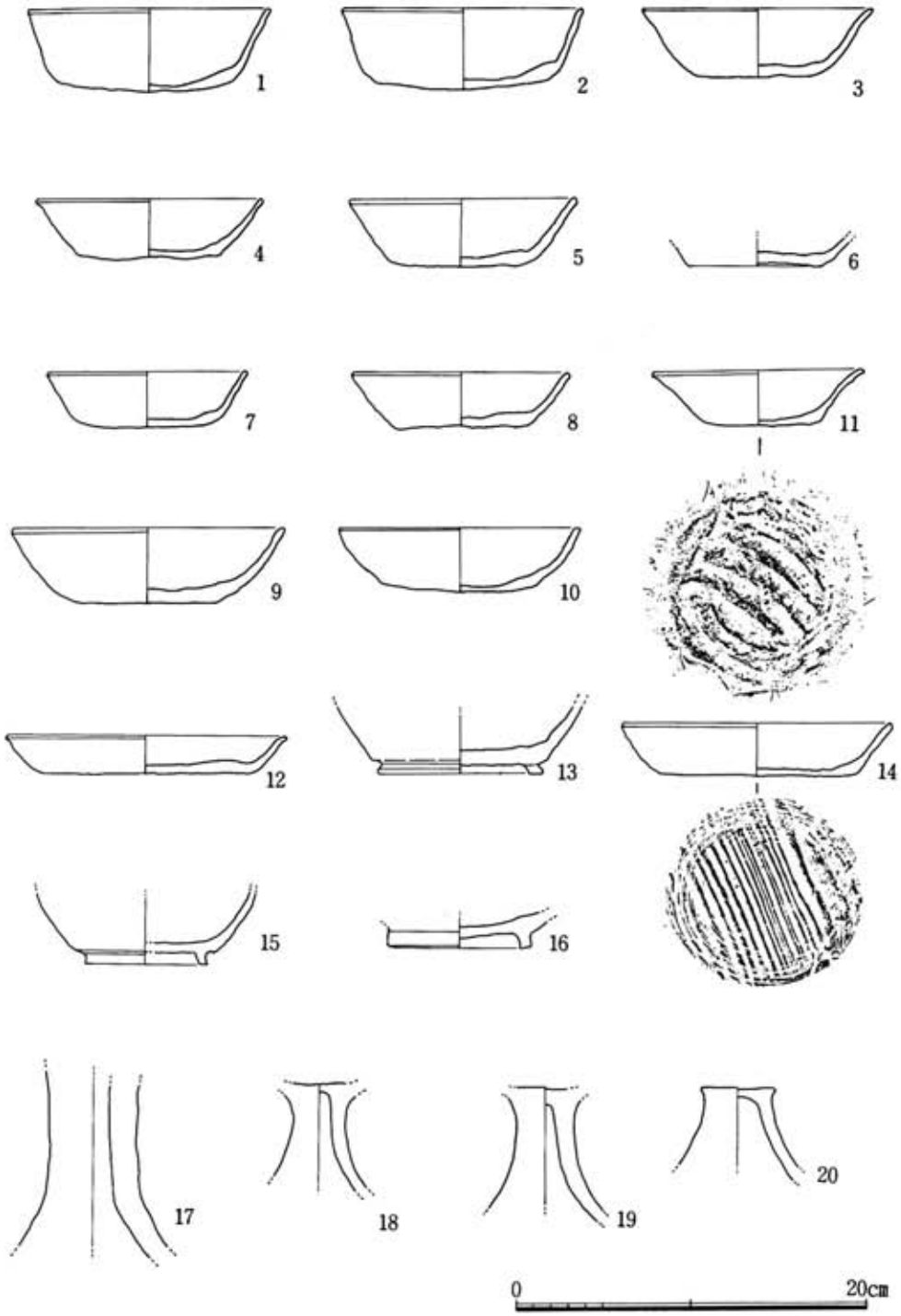



Fig. 11　土師器実測図(1)

回りで，焼成は極めて良好である。全体の$\frac{1}{2}$が現存し，体部～底部を一部欠く。**杯A**Ⅱa（Fig.11－5，PL.31－8）口径13.1cm，器高 3.9cm，底部径 7.7cmであり，形態の特徴は3と同様である。口縁～体部を一部欠き，全体の$\frac{3}{4}$が現存する。**杯A**Ⅱa（Fig.11－6）口縁～体部を欠き，底部径 7.5cmで，形態の特徴は3と同様である。色調は赤味を帯びた黄白色である。**杯A**Ⅲa（Fig.11－7）口径11.9cm，器高 3.6cm，底部径 7.9cmである。体～底部の$\frac{1}{2}$を欠く。**杯A**Ⅲa（Fig.11－8，PL.32－1）口径12.4cm，器高3.3cm，底部径7.6cmであり，7と同様である。

**杯A**b類に分類できるものは3個体であり，法量によって**B**Ⅰb～**B**Ⅱbの2種に分けることができる。**杯A**Ⅰb（Fig.11－9）口径15.6cm，器高 4.3cm，底部径 7.8cmであり，体部は内湾しながら外へ開く。底部は平底であり，内側の体部～底部の境は丸く，外側もわずかに稜を残すのみである。ロクロ右回り，焼成は良好，胎土に砂粒を含む。色調は淡黄～赤褐色を呈し，全体の$\frac{1}{4}$ほど現存している。**杯A**Ⅱb（Fig.11－10）口径13.8cm，器高 3.6cm，底部径 8.9cmであり，形態の特徴は9と同様である。ロクロは右回りで，胎土は精製されており，色調淡褐色を呈す。全体の$\frac{1}{2}$が現存する。**杯A**Ⅱc（Fig.11－11，PL.32－2）口径12.3cm，器高 3.1cm，底部径 6.9cmであり，体部が外反しながら大きく外へ開く。底部は丸底気味の平底，外側の体～底部の境が稜をなしている。底部はヘラ切り離し，胎土は精製され淡黄褐色を呈する。全体の$\frac{1}{2}$を残す。

**杯A**d（Fig.11－12）一個体ある。口径16.7cm，器高 2.1cm，底部径12.7cmである。口径に比して器高が低いのが特徴である。体部は直線的に外へ開き口唇部が短く外反する。底部ヘラ切り，赤褐色を呈し，胎土は精製されている。全体の$\frac{1}{2}$が現存している。

**杯A**Ⅰe（Fig.11－14，PL.31－10）口径15.5cm，器高 3.1cm，底部径11.1cmである。**杯A**dよりも杯の器高が高くなる。底は平底であり，内面はロクロ成形のあとヨコナデしている。胎土に砂粒を含み，淡黄褐色を呈し，口縁の一部を欠くのみで，ほぼ完形である。口縁の$\frac{1}{2}$が焼けこげている。

**高杯A**Ⅰ（Fig.11－17）3個体ある。脚部つけ根で径 5.2cmあり，大型品で中程より裾開きになる。完全形の杯に脚をとりつける型である。

**高杯A**Ⅱ（Fig.11－18・19）AⅠの小形品，形態の特徴は同様である。脚部は 4.1cmである。

**高杯B**（Fig.11－20）脚高に対して脚のつけ根の径が大きい。

**杯B**aは7個体である。法量により**B**Ⅰaと**B**Ⅱaに分類できる。**B**Ⅰa（Fig 12－1，PL.31－3）口径15.0cm，器高 6.3cm，高台径 9.5cmである。体部は内湾ぎみに外へ開く。高台は杯底部の内側寄りに取り付いている。長さ 1.6cmで直線的に外反する。ロクロ右回り，淡褐色を呈し，ほぼ完形である。底はヘラ切り離し，底内面中央ではヨコナデ施す。2～6（Fig.12－2～6）は**B**Ⅰaに属し，口径・器高・高台径も類以する。**B**Ⅱa（Fig.12－8）

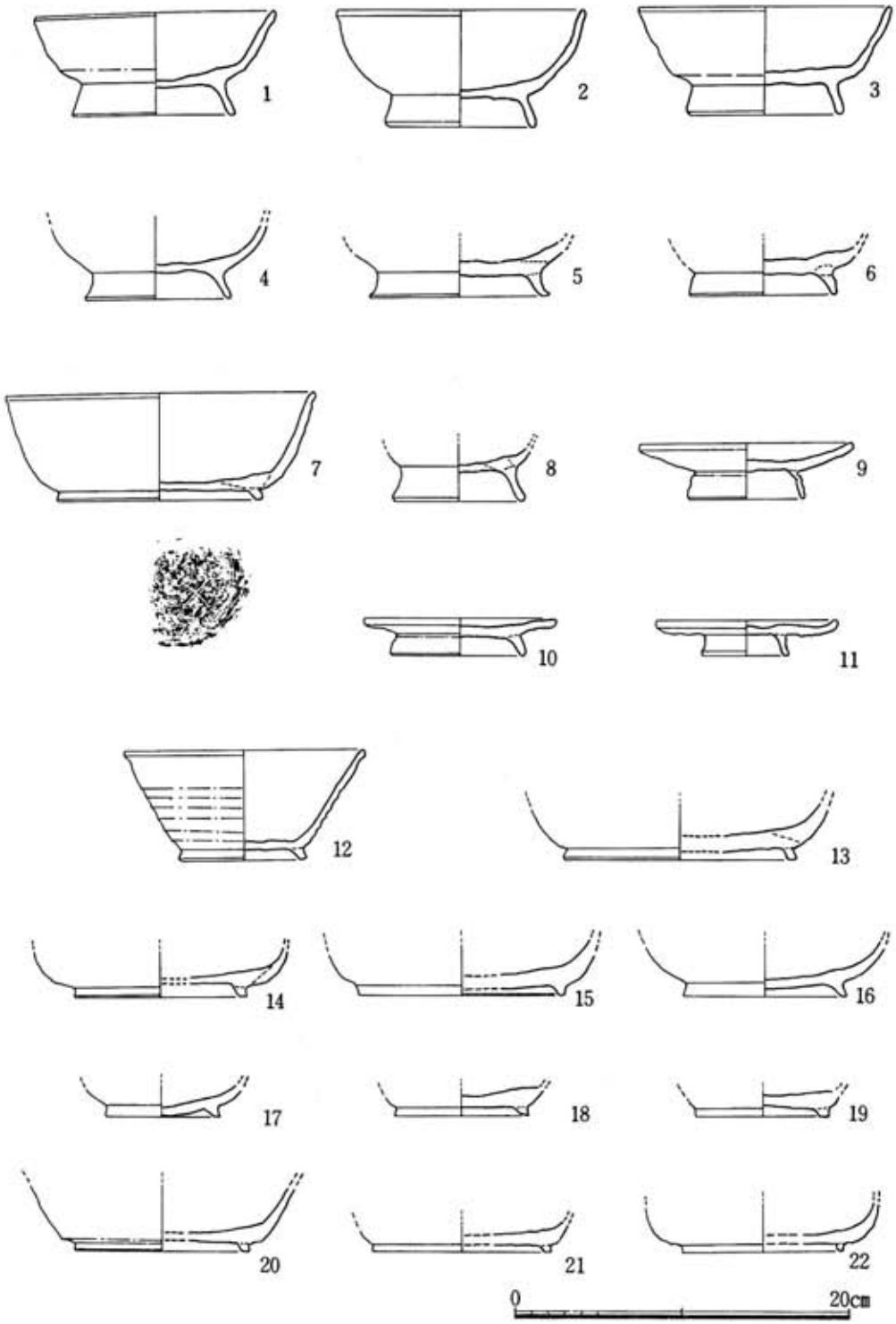



Fig. 12　土師器実測図(2)

高台径 7.8cmであり小型である。

**杯BⅠd**（Fig.12－12，PL.31－1） 口径14.4cm，器高 6.5cm，高台径 7.6cm，体部は直線的に開き，高台は 0.6cmで直線的に外反する。底部は平底であり，内面中央にナデ痕が残る。体部外面にロクロによる凹凸がある。底部ヘラ切り，ロクロ右回り，胎土は精製され，赤褐色を呈する。ほぼ完形品である。

**杯B**cは3個体であり，法量で**BⅠ・BⅡ**に分ける。**杯BⅠc**（Fig.12－9，PL.32－3）口径12.7cm，器高 3.3cm，高台径 7.0cmである。口径に対し器高が極端に低い杯部に 1.7cmの直線的に外反させる高台をつけている。杯中央に不定方向のナデ調整がある。胎土に砂粒を含み，淡赤褐色を呈する。全体の$\frac{1}{4}$が現存する。

**杯BⅡc**（Fig.12－10，PL.32－6） 口径11.8cm，器高 2.2cm，高台径 8.1cmであり，平たい杯部に外反する長さ 1.2cmの高台をつける。底部はヘラ切り離し，杯中央にヨコナデ調整，ロクロ右回しである。胎土は精製され，色調は淡灰茶色を呈する。口縁を一部欠くがほぼ完形である。**杯BⅡc**（Fig.12－11，PL.32－04）は口径10.7cm，器高 2.2cm，高台径 5.2cmであり，平坦な杯は口唇部がさらに内湾する。高台は中央寄りに小さくつけられ，直線的に外反し，端部のみさらに外へ反る。胎土は精製され，淡赤褐色を呈する完形品である。

**土師・須恵器出土地点一覧表** Tab. 2

| 地　　点 | Fig.11 | Fig.12 | Fig.13 | Fig.14 |
|---|---|---|---|---|
| DD発掘区 | 14 | 2・3 | | |
| NC発掘区 | | 6 | | |
| NC02発掘区 | 12・15 | 18 | 6・3 | 15 |
| NC03発掘区 | | | | 16 |
| NC05発掘区 | 1・2・8・20<br>18 | 5・16 | | 5・5・17　8 |
| NC08発掘区 | 19 | | | 2 |
| QD3 発掘区 | 3・6・9・13<br>17 | 1・8・13・15<br>19・20・21 | 1・2・7・8 | 3・4・7・9<br>10・12・19・21<br>22 |
| RB25 発掘区 | | 22 | | 14 |
| RC区 発掘区 | | 6 | | |
| RG32 発掘区 | 4 | 7・9・11・12 | | |
| RG33 発掘区 | | 4・10 | | |
| RI14 発掘区 | 5 | | | |
| S 3 発掘区 | | | | |
| S 6 発掘区 | 10・11・16 | | | |

## 2．須　恵　器

須恵器はＯ地区05発掘区の溝，ＱＤ地区03発掘区，Ｏ地区02発掘区とＲ・Ｓ地区より出土している。

器形は高台椀が最も多く，他に杯蓋・杯・長頸壺がある。

**杯Ｂ** ａは直線ぎみに外反する底部端に短く外反する高台を取り付けたもので法量により**Ｂ**Ⅰと**Ｂ**Ⅱに分類できる。

**杯ＢⅠａ**（Fig.13－３）であり，高台径10.8cm，巾 0.6cm，長さ 0.8cmの断面長方形のの高台がつき，体部との境まで回転ヘラケズリを施している。内面はロクロ痕をナデて消している。淡青灰色を呈し，口縁と底部の一部を欠く。

**杯ＢⅡａ**（Fig.13－５）**ＢⅠａ**と器形が同様であり，法量が小型である。口径12.4cm，器高 4.3cm，高台径 6.7cmであり，灰白色を呈する。胎土に細い砂粒を含み，体部外面下半に回転ヘラ削りを施し，底部内外面中央をナデ調整している。焼成は良好である。２個体が**Ｂ**Ⅱａに含まれる。

**杯Ｂｂ**　法量により，ⅠとⅡに分けられるが，直線的に外反する体部に平底の底部をつけている。体部底部の境より底部寄りに短い巾 0.6cm，高さ 0.4cmの高台をもっているものである。**ＢⅠｂ**（Fig.14－14）が属する。**ＢⅡｂ**（Fig.14－15）口径11.6cm，器高3.4cm，高台径 8.3cmであり，直線的に外反する体部はロクロによって成形され，内底面には不定方向のナデが施されている。底部外面はナデられ，外底部体部の境より底部に少し寄った位置に巾 0.8cm，高さ 0.4cmの高台が付けられている。

**杯Ｂｃ**は内湾しながら外へ少し開きぎみの体部に短い断面台形の高台をつけるものである。**ＢⅠｃ**（Fig.13－６～８）３個体であり，８は高台径 8.2cmであり，巾 0.6cm長さ 0.5cmの高台がほぼ垂直につけられている。

**杯ＢⅠｄ**（Fig.14－１）直線的に外反する体部に断面台形の短めの高台が垂直につく。口径13.3cm，器高 3.9cm，高台径 7.9cmである。体部外面の下半には回転ヘラケズリが施され，高台・底部はナデ調整である。高台の巾 0.6cm，高さ 0.5cmである。胎土に砂粒を少量含み，灰色を呈する。全体の$\frac{1}{4}$が現存する。ロクロ回転は右であり，他のものでは底部にヘラ切離し痕，さらにその上にナデ調整がある。また底部内面にも不定方向のナデが見うけられる。

**杯ＢⅠｅ**（Fig.14－５）やや内湾ぎみに開く体部に口唇部が小さく外反する。高台は高く外反するものである。土師器と器形では区別できない。口径15.5cm，器高 6.4cm，高台径 9.7cmである。底部の内・外面中央にはナデ調整が施されている。高台は下端部がさらに外反するものである。体部外面にはロクロ成形痕である凹凸がみられる。高台は巾 0.8cm，長さ 1.2cmである。６（Fig.14－６）は高台径 9.5cm，巾 0.8cm，長さ 0.9cmで，下端部が

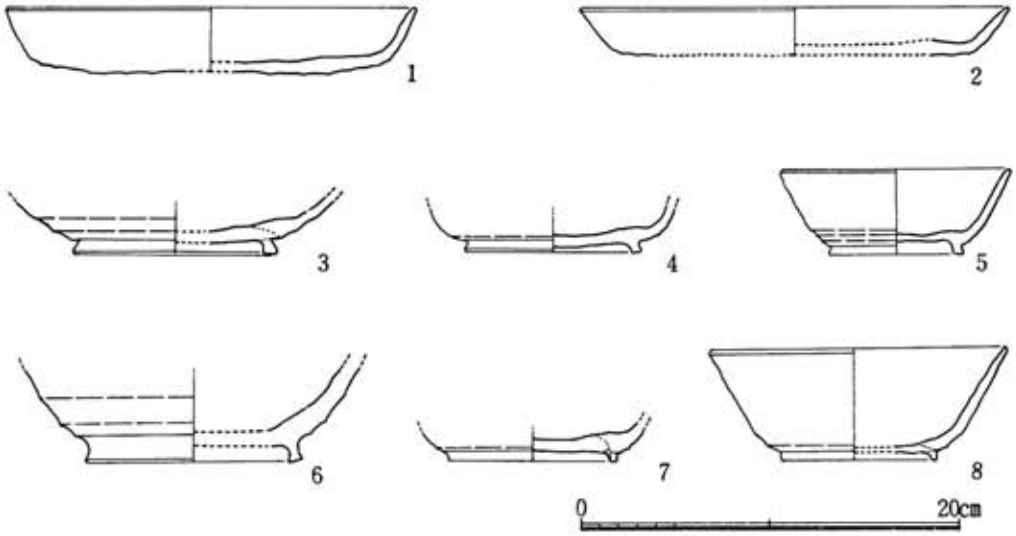



Fig. 13　須恵器実測図(1)

大きく外反する。

**杯B Ⅰ f**（Fig.14－7）直線的に開く体部と短くて外反する高台が特徴的である。口径14.8cm，器高 6.0cm，高台径 8.3cmであり，底部内面にはナデ調整痕がある，高台の巾は 0.7cm高さ 0.7cmで短く外反する。また，**杯B Ⅰ f**（Fig.14－9～11）は高台径 8.4cm，7.8cm，9.1cmであり，高台巾が 0.8cm・0.6cm・0.7cm，高さが 0.6cm・0.4cm・0.5cmである。底部内面中央には不定方向ナデを施しているものが多く，底外面にもナデ調整している。**杯B Ⅱ f**（Fig.14－12）形態は**杯B Ⅰ f** と同様である。高台径 5.9cm，巾 0.5cm，高さ 0.6cmで外反する。

**蓋杯A Ⅰ a**（Fig.14－16，PL.32－8）宝珠形のつまみを有し，平坦な天井部と直線的な体部とくちばし状の端部を有する蓋杯である。口径15.5cm器高 4.1cmである。口縁端部は丸みをもって内湾しながら直立する。天井部平坦面から体部上端部にかけて回転ヘラケズリをしている。**蓋杯**（Fig.14－17，PL.32－10）口径14.6cm，器高 2.4cmである。口縁端部には身受けの返りの痕跡をのこす。

**蓋杯A Ⅰ b**（Fig.14－19，PL.32－9）つまみを有し，天井部～体部全体が扁平になっている。口縁端部は口ばし状に垂直に反る。断面三角形を呈する。天井部～体部上半部にかけて回転ヘラケズリが施され，天井内面とつまみ，口縁端部は，ナデ調整である。口径13.8cm器高 2.2cmである。また**杯A Ⅱ b**（Fig.14－21）口径12.0cm，器高 1.8cmである。

**杯A a**（Fig 13－1）体部が極端に扁平化しているもので，底の平たい底部と直線的に外反する口縁部を特色とする。口径22.0cm器高 2.4cmである。また杯A a（Fig 13－02）口径23.3cm，器高 3.2cmである。

**長頸壺A**（Fig 14－18）胴部上半にはっきりした稜をもち，直線的に底部に至る。底部は

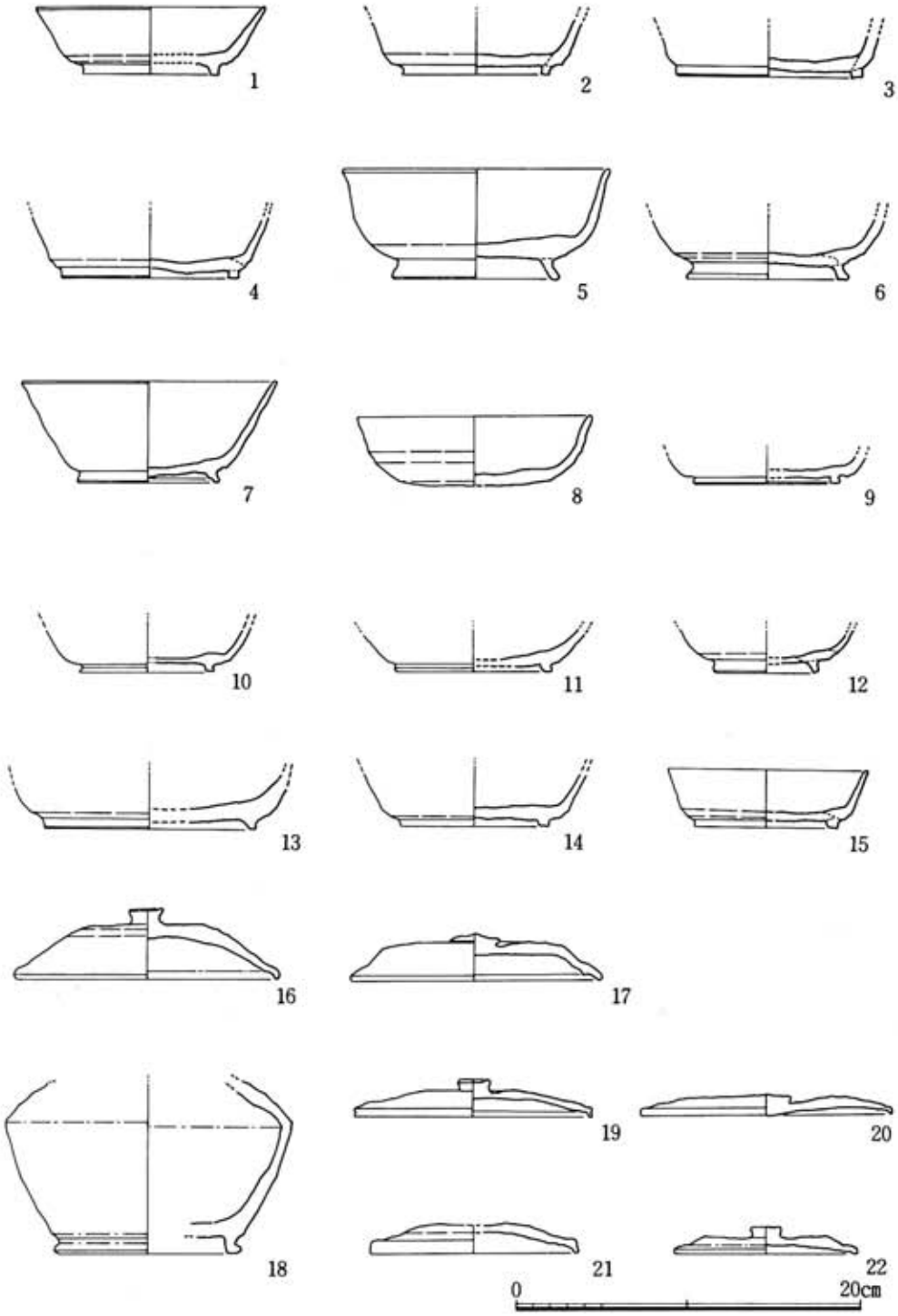



Fig. 14　須恵器実測図(2)

平坦であり，底部には短く直立する高台がついている。高台の下端部は大きく外反している。胴部上半部で径16.6cm，高台径10.8cm，現存高10.5cmである。

## 小　　結

以上，土師器・須恵器について述べてみたが，その時代的流れと遺構との関係について若干まとめてみたい。

国府に関連する遺物は7世紀中頃に初まる。O−5発掘区の溝中からは土師器・須恵器が一括で出土している。**杯AⅠf**（Fig.14−8），**蓋杯AⅠa**（Fig.14−17），**杯AⅠe**（Fig.14−5），また土師器では，**杯AⅠa**（Fig.11−1・2），**杯AⅢa**（Fig.11−8）である。その他O−3発掘区では**蓋杯AⅠa**（Fig.14−16）が出土している。特にO−5区の溝の土器の時期は7世紀後半〜8世紀初頭である。

次にくる，8世紀前半では，QD−3発掘区の土器があげられる。**蓋杯AⅠb〜AⅡc**（Fig.14−19〜22），**杯Ba**（Fig.13−1・2）がそれであり，他にS−6発掘区（Fig.14−18）の溝中の土器が入る。

RG区の溝中の土器とQD−3発掘区のそれは8世紀後半の時期が与えられる。7世紀〜8世紀初頭は須恵器がほぼすべてを占めていたのに比べ，この時期からはその大半が土師器である。**杯BⅠb**・**BⅠd**（Fig.12−7・12・13）はそれぞれSD 021・SD 022・QD−3発掘区溝より出土している。

8世紀末〜9世紀の時期に属するものは**杯AⅡa**（Fig.11−3）と**杯AⅡc**（Fig.11−11）である。すべて，QD−3発掘区より出土である。

**土師器BⅠc**（Fig.12−9・10・11），**BⅠa**（Fig.12−1〜4・6・8）はRG−32・33発掘区とQD−3発掘区・DO区・NC区からの出土であり，9世紀後半から10世紀前半に比定される。

最後に，**杯AⅠe**（Fig.11−14）は11世紀〜12世紀の頃と思われる。DO区の出土である。

遺構との関係では，調査区域の北側の扇状地の高い部分に7世紀中頃〜8世紀初頭の溝と柱穴群が造られ，8世紀前半〜9・10世紀になると嘉瀬川の自然堤防に近いQD区に溝，土拡，小かじ跡などの遺構が存在する。また同じ8世紀後半では自然堤防上のRG区のSD021 SD 022が，さらに9世紀〜10・11世紀にDD区の遺構が造られたことがらかる。高段土井の東のNC区でも9〜10世紀の土器を出している。

須恵器については，**杯AⅠf**（前掲）は『陶邑Ⅰ』（1976年）のⅢ型式の2段階[1]，『八女古窯跡群』（1971年）のⅥ形式[5]に相当する。**蓋杯AⅠa**は，同様に陶邑のⅣ型式の1段階，八女のⅦ形式にあたり，類以のものは，県内のいくつかの古墳群からも出土している。蓋杯**AⅠb〜AⅡb**・**AⅠc〜AⅡc**は陶邑Ⅳ−2，八女Ⅶ形式に該当する。東十郎古墳群，基肄城跡などからの出土が知られている。**杯Ba**についても基肄城から出土している。

土師器の類例については，**杯BⅠa**が太宰府出土のものより古く，太宰府御笠川南条坊遺

[7]跡や，肥前国分寺跡[8]のものに近い。寺浦廃寺跡[9]のものより後出すると考えられる。またBⅠc，BⅡcは，御笠川南条坊遺跡と類以するところが多い。

肥前における奈良〜平安時代の土器の編年の試みはまだ途についたばかりであり，このような概括的なかたちで述べるにとめておく。

以上，肥前国府跡においては，7世紀中頃より11〜12世紀までの土器が発見された。特に掘立柱による建物跡，それに伴う溝などは，8世紀後半〜10世紀前半の時期であることが明らかになった。

## 参 考 文 献


1．中村浩他『陶邑Ⅰ』，大阪府文化財調査報告書第28輯，大阪府教育委員会，1976
2．中井一夫他『飛鳥京跡』昭和49年度発掘調査概報，奈良県教育委員社，1975
3．石松好雄他『太宰府史跡』昭和49年度発掘調査概報，九州歴史資料館，1975
4．石松好雄他『太宰府史跡』昭和50年度発掘調査概報，九州歴史資料館，1976
5．真野和夫・山田富士夫他『八女古窯跡群Ⅳ』総集編，八女市教育委員会，1971
6．石松好雄他『太宰府史跡』昭和51年度発掘調査概報，九州歴史資料館，1977
7．前川威洋・新原正典・馬田弘稔『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第6集，福岡県教育委員会，1977
8．高島・樋渡他『肥前国分寺跡発掘調査概報』第1次，大和町教育委員会，1975
9．高島忠平・佛坂勝男他『寺浦廃寺跡』佐賀県文化財調査報告書第34集，佐賀県教育委員会，1976
10．田平徳栄他『特別史跡基肄城跡』基山町文化財調査報告書第2集，基山町教育委員会，1977


## 3．瓦

瓦はN地区・Q地区（瓦塚周辺）・H地区（大和町大字久池井周辺）を中心として，軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦が出土した。

**軒丸瓦**（Fig.15，16－5・6，PL.33）

軒丸瓦は6型式出土していて，その中で1〜3の瓦の類例が肥前国分寺跡でも発見されている。

1は瓦塚出土の複弁八弁蓮華文軒丸瓦で，いわゆる鴻臚館式軒丸瓦の基本形である。瓦当面径は19.0cmある。外区は幅1.5cm，高さ1.2cmの外縁があり，内縁に界線に囲まれた突出した24の珠文帯を配している。内区は，径5.7cmの中房を中心にして外側に間弁のある反りのある複弁蓮華文をめぐらしている。瓦当文様は彫りが深い。胎土は灰褐色で，少量の砂粒を含んでいる。

2は瓦塚出土の単弁七弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当面径は16.0cm，瓦当厚は2.8cmある。

外区は，幅 2.0cm高さ 0.7cmの外縁に「×」字文を，幅 1.2cmの内縁に簡略化された唐草文をめぐらしている。内区は径 5.1cmの中房を中心に，間弁のある彫りの浅い単弁蓮華文を配している。中房には1＋5＋10のバラついた蓮子を置いている。胎土は灰色で，白い砂粒を含む。

3は瓦塚出土の単弁九弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当面径は17.2cm，瓦当厚は 4.0cmある。外区は，幅 0.7cm高さ 0.7cmの外縁があり，幅 1.8cmの内縁に強く突出する20ほどの珠文帯を配している。内区は，径 5.7cmのややふくらんだ中房に1＋8の蓮子を置いている。蓮弁の中にはやや先の割れた子葉があり，各蓮弁間は界線で仕切られている。胎土は黄土色で，少し砂粒を含む。類例は先に掲げた肥前国分寺跡以外に見られない。

4は瓦塚出土の唐草文帯軒丸瓦である。瓦当面径は16.2cm，瓦当厚は 2.8cmある。外区は，幅1.2cmの外縁に珠文帯をめぐらし，幅 1.3cmの内縁には唐草文帯を配している。内区は，径 4.8cmの凹凸の少ない中房を中心にして，肉厚のふくらんだ文様が配されている。中房には数は明確でないが蓮子が配されている。胎土は灰褐色で，砂粒を含む。

5は瓦塚出土の単弁軒丸瓦である。瓦当面径は17.0cm，瓦当高は 2.4cmである。外区は，幅 0.9cm高さ 0.2cmの低い外縁をもつ，内区は，径 2.1cmの凹凸の少ない中房を中心にして，単弁蓮華文を配している。中房の蓮子の数は不明。胎土は黄土色で，砂粒を含む。

6は瓦塚出土の軒丸瓦である。瓦当文が内外区とも剝離・磨耗が甚しいので明確な文様構成をつかみにくい。瓦当径は19.4cm，瓦当厚は 3.9cmある。外区は，幅 0.7cm高さ 0.3cmの低い外縁があり，幅 1.9cmの内縁に楕円形の珠文帯をめぐらす。内区は径 3.9cmの中房を中心にしてやや彫りのある蓮華文らしきものを配している。中房に配している蓮子の数は不明。胎土は灰褐色で砂粒を含む。

**軒平瓦**（Fig.16－1・2，Fig.17，PL.34）

軒平瓦は6型式出土していて，その中で1～3の瓦の類例が肥前国分寺跡でも発見されている。

1は瓦塚出土の均整唐草文軒平瓦である。瓦当面複元幅は36.0cm，瓦当面厚は 6.0cmある。瓦当面は中心飾に逆「小」字形文をおき，その左右に5回反転の唐草文を配している。唐草文は大柄ではあるが，線が幅 0.2cmで細い。上・下外区には珠文を配しているが下外区の珠文はやや高い。顎は段顎である。顎上面には布目が，顎下面には縄目の叩きが見られる。胎土は黄褐色で，砂粒は少ししか含んでいない。

2は瓦塚出土の均整唐草文軒平瓦である。瓦当面厚は 4.8cmである。瓦当面内区は中心飾に「小」字形文をおき，その左右に4回反転の唐草文を配している。文様全体は，いわゆる鴻臚館式軒平瓦のそれが大柄になったものである。上外区には楕円形珠文を配し，下外区には外向陽起鋸歯文を配すのが基本であるが，文様のずれによってないものもある。顎は段顎である。平瓦部上面はヘラ削りで調整しているが布目痕も所々に見られる。平瓦部下面はナ

デで調整している。胎土は灰白色で，砂粒を少し含む。

3は瓦塚出土の均整唐草文軒平瓦である。瓦当面幅は26.6cmで，瓦当面厚は 4.0cmである。瓦当面の内区，中心飾に上が三方に割れた文様をおき，その左右に8回反転の唐草文を配している。唐草文は反転が強く，なめらかに巻きこんでいる。上外区には，21の外向陽起鋸歯文を配し，下外区には21の珠文を配している。脇区にも各5の珠文を配しているが，脇区の珠文の方が径が小さい。顎は段顎である。平瓦部は両面ともナデて調整している。胎土は暗灰色で，砂粒を少し含む。

4はＱＤ地区3トレンチ，ＳＫ 064出土の偏行唐草文軒平瓦である。瓦当面厚は 5.5cmである。瓦当面の内区の中心飾の文様及び左右に配している唐草文の反転回数は明らかではない。唐草文は断面が三角形の鋭い線で流れている。上外区には円形の高い珠文を配し，下外区には外向陽起鋸歯文を配している。脇区にも4の外向陽起鋸歯文を配している。顎は段顎である。平瓦部の凹面はヘラ削りで，凸面はナデで調整している。又，瓦側面はヘラ削りで調整している。胎土は暗灰色で，砂粒を含む。この瓦片は均整唐草文軒平瓦の可能性もある。

5はＳＤ 025出土の偏行唐草文軒平瓦である。瓦当面厚は 5.0cmである。瓦当面の内区は左方から唐草文が2つを一組として流暢に流れている。唐草文はなめらかに流れており，高さもややある。上外区には高い珠文を配し，下外区には外向陽起鋸歯文を配している。顎は段顎である。平瓦部の上下両面はナデで調整している。胎土は灰白色で，砂粒を多く含む。この瓦の唐草文は，いわゆる老司式と称される軒平瓦の流れと逆に流れている。しかし，その点を除いては文様構成が同じであるので，老司式軒平瓦の踏み返しとも考えられる。これと組合せ関係にある軒丸瓦は，現在のところ発見されていない。

6は瓦塚出土の軒平瓦である。内区の中心飾には菊花文をおき，その左右に唐草文を配す均整軒平瓦であろう。顎は段顎であるが，顎幅が小さく，その断面形は曲線を呈している。胎土は灰褐色で，細かい砂粒を含む。

**鬼　瓦**

鬼瓦は瓦塚で破片が一点発見されているのみである。この瓦片は丸く突き出た大きな瘤や釘穴が残っており，平城宮跡や太宰府跡から出土した鬼瓦と比較してみると，鬼面の左目のあたりではないかと思われる。胎土は黄褐色で，砂粒をやや含んでいる。

瓦類について以上述べてきた通り，今調査では軒丸瓦6種，軒平瓦6種が出土した。

その軒丸瓦と軒平瓦の組合せ関係については，軒丸瓦の2と軒平瓦の3が組み合うものと思われる。又，続日本紀により天平勝宝八年(756年）までにほぼ完成していたといわれる肥前國分寺と今回調査の関係を考えてみると，まず軒丸瓦・軒平瓦それぞれ3種が同類例として見られる事があげられる。その中で軒丸瓦の1は，國分寺の創建時に使われたと思われる軒丸瓦と同じ類例である。さらに，國分寺のその軒丸瓦と組み合せ関係になる軒平瓦が國分寺の東の國分寺瓦窯跡と佐賀県神埼郡辛上廃寺で出土している。辛上廃寺の軒平瓦については組

み合せ関係を確定できてないが，当軒平瓦が國分寺瓦窯跡で焼かれたのは明らかであり，國分寺瓦窯を中心とした國分寺，辛上廃寺，今回調査地点の関係を考える上でこの組合せ関係は重要なものとなろう。太宰府政庁跡出土のこの形式の瓦には，八世紀初頭が上限という事が考えられている。いわゆる鴻臚館式軒丸瓦の類例は他に，筑前鴻臚館跡，・観世音寺・筑前國分寺・杉塚廃寺・有智山廃寺・浜口廃寺・蔵司跡・長安寺廃寺・筑後千代久廃寺・肥前大願寺廃寺・寺浦廃寺・肥後陳内廃寺・豊後日田林工高校校庭など多くの遺跡で発見されている。今回の調査で，瓦についての主な対象地点は瓦が集積されている瓦塚であったが，資料点数が少ない事，道具瓦となると皆無であった事，佐賀郡大和町大字久池井字久池井付近で比較的多数の瓦が採集されている事などが留意すべき点としてある。特に第１・２次調査で掘立柱の建物跡を多く検出した大和町大字久池井字惣座付近では，瓦の出土例がわずかしかない。

最後に，本調査の出土瓦ではないが，大和町大字久池井字久池井より単弁軒丸瓦（ＰＬ33－７）が採集されているので参照されたい。

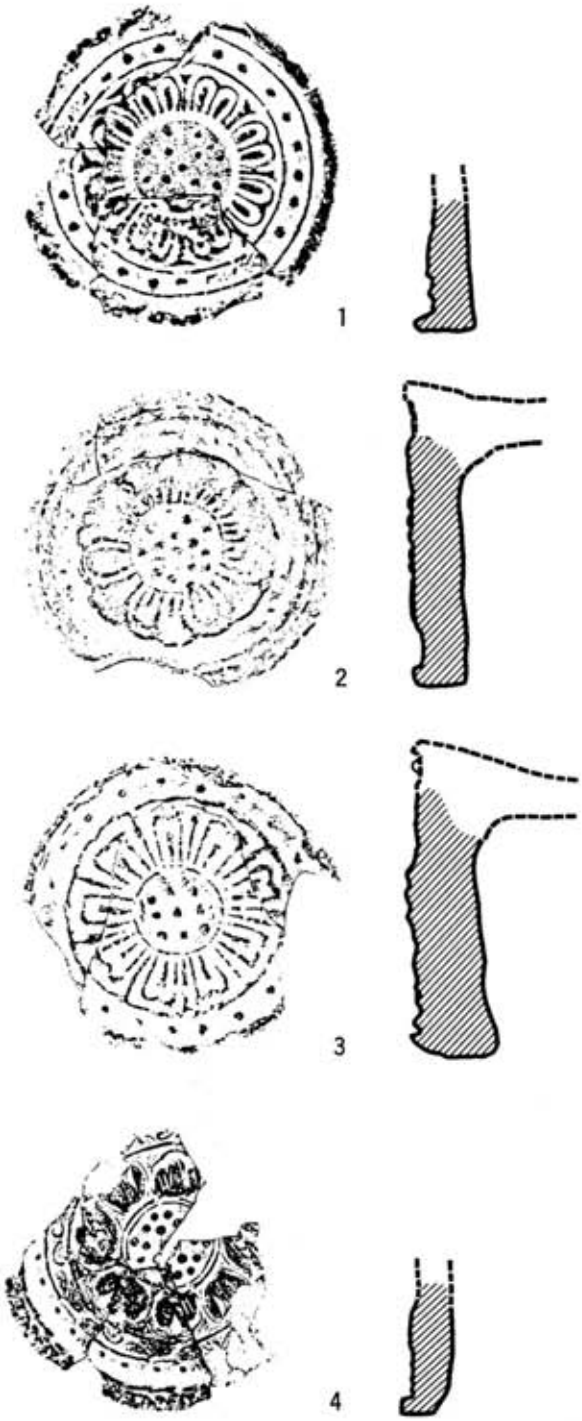
## 参　考　文　献


高島忠平・樋渡敏暲・亀田修一他，「肥前國分寺跡」佐賀郡大和町教育委員会

高島忠平・仏坂勝男他，「寺浦廃寺跡」佐賀県文化財調査報告書第34集，1976

田平徳栄他，特別史跡「基肄城跡」基山町文化財調査報告書第２集，1977

高島忠平他，「平城京羅城門跡発掘調査報告書」（第１次～第３次発掘調査）大和郡山市教育委員会，1972




**1．複弁八弁蓮華文軒丸瓦**

瓦当－径19.0cm・内区－中房径 5.7cm・蓮子1＋4＋8 外区－内縁幅 1.5cm・珠文24・外縁幅 1.5cm・外縁高 1.2cm・胎土－灰褐色・砂粒やや含。

**2．単弁七弁蓮華文軒丸瓦**

瓦当－径16.0cm・厚 2.8cm・内区－中房径 5.1cm・蓮子1＋5＋10，外区－内縁幅 1.2cm・唐草文，外縁幅2.0cm・外縁高0.7cm・「×」文字，胎土－灰色・砂粒含。

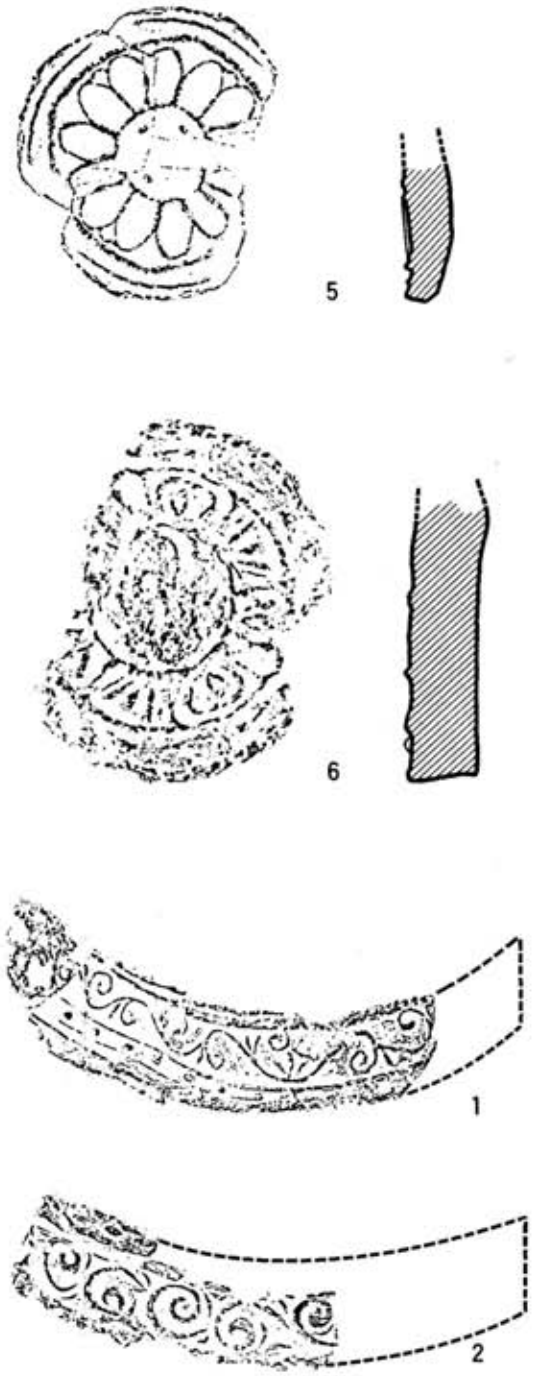
**3．単弁九弁蓮華文軒丸瓦**

瓦当－径17.2cm・厚 4.0cm・内区－中房径 4.9cm・蓮子1＋8 外区－内縁幅 1.8cm・珠文20（？）外縁幅1.1cm・外縁高 0.5cm・胎土－黄土色・砂粒少し含

**4．唐草文帯軒丸瓦**

瓦当－復元径16.2cm・厚 2.8cm 内区－中房径 4.8cm・蓮子不明 外区－内縁幅 1.3cm・唐草文・外縁幅 1.2cm・外縁高 0.6cm・胎土－灰褐色・砂粒含。

Fig. 15　軒丸瓦実測図




**5．単弁軒丸瓦**

瓦当－復元径17.0cm・厚 2.4cm 内区－中房径 2.1cm・蓮子不明 外区－内縁幅0.9cm・外縁幅0.9cm・外縁高 0.2cm，胎土－黄土色・砂粒含。

**6．軒　丸　瓦**

瓦当－径19.4cm・厚3.9cm，内区－中房径 3.9cm，外区－内縁幅1.9cm・珠文，外縁幅0.7cm・外縁高0.1cm，胎土－灰褐色・砂粒含。

**1．均整唐草文軒平瓦**

瓦当－復元幅36.0cm・厚 6.0cm 段顎－高 6.5cm・厚 0.6cm，珠文－上下外区，平瓦部－上面布目下面縄目叩，胎土－黄褐色・砂粒含。

**2．均整唐草文軒平瓦**

瓦当－厚 4.8cm，段顎－幅 8.1cm・高 0.3cm，上外区－珠文，下外区－外向陽起鋸歯文，胎土－灰白色・砂粒少し含。

Fig. 16　軒丸・軒平瓦実測図

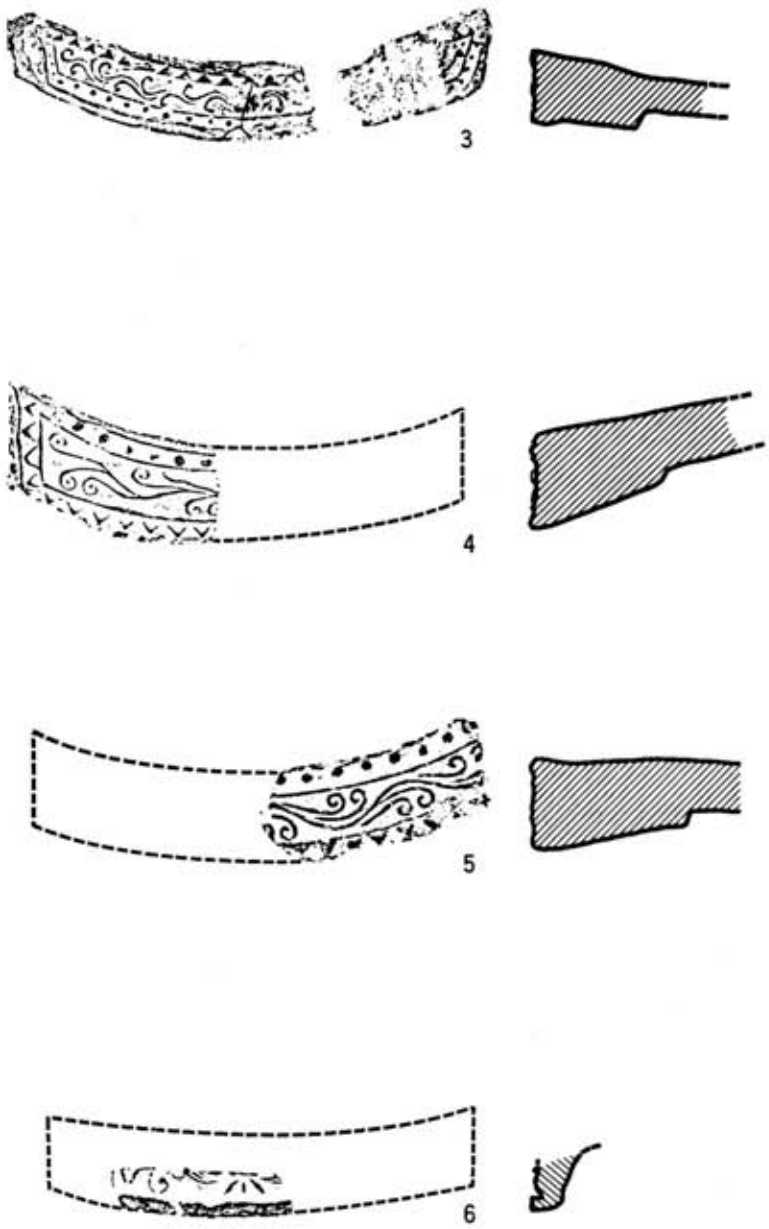



Fig. 17　軒平瓦実測図

**3．均整唐草文軒平瓦**

瓦当－幅26.6cm・厚 4.0cm，段顎－幅 6.3cm・高 0.9cm，上外区－外向陽起鋸歯文21，下外区－珠文21，脇区－珠文各5，平瓦部－下面斜格子叩目，胎土－暗灰色・砂粒少し含。

**4．偏行唐草文軒平瓦**

瓦当－厚 5.5cm・段顎－幅 7.9cm・高 0.4cm，上外区－珠文，下外区－外向陽起鋸歯文，脇区－外向陽起鋸歯文4，胎土－暗灰色・砂粒含。

**5．偏行唐草文軒平瓦**

瓦当－厚5.0cm,段顎－幅 8.7cm・高 0.8cm,上外区－珠文，下外区－外向陽起鋸歯文，胎土－灰白色・砂粒含

**6．軒 平 瓦**

段顎，胎土－灰褐色・中心飾－菊花文，内区－唐草文細砂粒含。

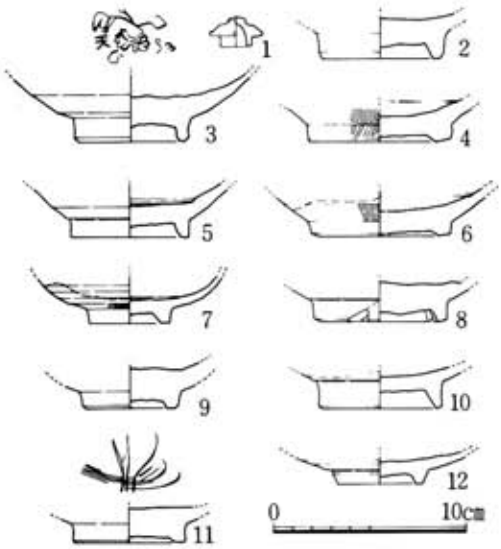



Fig. 18　陶磁器実測図

## 4．その他の遺物

今回の調査では，その他に磁器・陶器などが出土している。その中で，ＲＡ地区の素掘りの井戸ＳＥ063とＱＣ地区の瓦塚より出土した陶磁器について述べてみたい。

**ＳＥ063出土陶・磁器**（Fig.18－１～４）

**1**は何らかの容器の蓋と思われる陶器である。内外面全面に淡緑黄釉がかかっていたが今は所々にしか見られない。胎土は淡灰褐色で，細かい砂粒が多く混じっている。

**2**は青磁の椀である。高台径 6.2cm。高台の内側まで緑白色の釉がかかっている。内底部に草花文がある。胎土は灰白色。

**3**は青磁の椀である。高台径 5.6cmで底部から体部にかけて円味があり，底部はやや上げ底である。高台外面まで淡緑色の釉がかかっている。内底部に，草花文らしきものと「天」字が裏返しに彫られている。胎土は灰色。

**4**は白磁の椀である。高台径 7.4cmで，高台高がかなり低い。底部から体部にかけては直線的である。内底部の見込みに沈線がある。釉は淡灰白色で，内面だけにかかっている。

**瓦塚出土陶磁器**（Fig.18－５～12）

**5**は青磁の椀である。高台径 6.2cm。底部はヘラ削り。淡緑白色の釉が，外面では高台に少し流れ，内面では蛇の目積みではがれている。胎土は灰白色である。

**6**は白磁の椀である。高台径 7.3cmで高台高が低い。内底部の見込みに沈線がある。高台際の調整がやや雑。胎土は白色。

**7**はやや灰白がかった白磁の椀である。高台径は 4.2cm。外体部と内底部にヘラ削りの痕が見られる。内底部の釉は蛇の目積みではがれている。胎土は白色。

**8**は白磁の椀である。高台径は 6.8cm。高台の畳付の部分に５箇所刻みがある。釉には貫入が多い。内面の見込みに沈線がある。底部にヘラ削りが見られる。胎土は灰色。

**9**は青磁の椀である。高台径は 4.6cm。釉は青緑色で多量の気泡が入りこんでいる。見込みの沈線部分は釉が厚い。底部に焼成の際の付着痕がある。胎土は灰色。

**10**は白磁の椀である。高台径は 6.2cm。高台と体部の境が鋭い。底部は荒いヘラ削りである。内面釉に気泡痕がある。胎土は灰白色。

**11**は珠光青磁の椀である。高台径は 5.6cm。内面の見込みに沈線がある。内底部に櫛描の文様がある。釉は全体的に厚い。高台の周囲は鉄分の為に赤変している。高台内部には焼成の際の付着物が多い。胎土は灰色。

**12**は青磁の椀である。高台径は 4.4cm。釉は淡褐緑釉でうすくかかっている。内底部に三ツ目積の痕が見られる。底部はヘラ削り。胎土は薄茶色。

# Ⅴ　その他の遺構・遺物

この章では，肥前国府跡発掘時に検出された遺構・遺物のうち，国府よりさかのぼる時期主として弥生時代のものを扱う。

縄文時代の遺物として，ＲＧ地区で押型文の土器片が一片と，ＲＣ地区では大きな掘り込みの中から夜臼式土器片が出土したが，土師器片などと混在しているため，遺構との関係は不明である。ＤＤ地区では石鏃が出土している。弥生時代の遺構としてとらえられるものは発掘区域の西側，嘉瀬川に近いＤＤ地区とＲＧ地区に集中しており，溝・住居跡・甕棺などが検出された。中でも溝ＳＤ019とＳＤ023では特に多数の土器が出土している。その他にＳＤ019では鉄器や石器が数点と小型の仿製鏡が，ＳＤ023では舶載鏡片が出土した。またＮＣ地区では土壙が検出され，壺や甕が出土している。遺構に伴なうものではないが，瓦塚やＲＨ地区で中期の甕棺片も出土した。その他に先土器時代のナイフ型石器がＤＤ地区より出土している。

## １．遺　　構

遺構については調査次にそって説明する。

第１次調査の遺構として明確なものは，ＮＣ地区17発掘区（ＰＬ．23－３）で検出された弥生時代の土壙があげられるのみである。トレンチの東南隅と，トレンチの東端より約３ｍの北壁にかかって，長径約２ｍ，深さ約50cmの不整楕円形の土壙２基。トレンチのほぼ中央に，同様のプランで深さ約20cmの浅い土壙，計３基を検出した。いずれの土壙からも後期の土器が出土している。

第２次調査においては，明確な遺構は検出されなかった。

第３次調査の遺構としては，弥生時代の溝２条（ＳＤ019・ＳＤ023）と住居跡５軒（ＳＢ009～013）と甕棺墓１基，石蓋土壙１基を検出した。いずれも後期後半に属する。

**○ＳＤ019**　東西溝（Fig.7，ＰＬ．29－５・６）

断面Ｕ字形を呈する東西溝で，幅約３ｍ，深さ約 1.3ｍを測るが，西端部は 2.5ｍと特に深い。底面には大きな礫があったが，底面より 0.6ｍと 1.3ｍの高さ付近から土器が集中して出土した。調査区内での長さは約14ｍで，東西両端は調査区外に延びている。

**○ＳＤ023**　南北溝（Fig.6，ＰＬ．26）

断面Ｕ字形を呈する溝で，幅約 2.5ｍ，深さ約75cmを測り，底面より約25cmの高さに土器が集中して出土した。検出した溝の長さは約25ｍで，西端は調査区外に延びている。北東～南西に走り，南西端近くで方向を変え南に向っている。

**○ＳＢ009**　竪穴住居（Fig.7，ＰＬ．28－１）

東西約 5.5ｍ，南北約 7.5ｍの方形を呈する。幅約８cm，床面よりの深さ約５cmの溝が東

壁沿いにあって，中央部には径約４ｍの範囲で木炭と焼土が広がっており，火災に遇ったと考えられる。床面の精査にも係らず，住居内に主柱穴らしきものは発見できなかった。この住居跡はＳＤ019に切られている。遺物としては床面直上より投弾３個と土器片が若干出土し，覆土よりガラス小玉20数個が出土した。又，この住居跡の西南部に甕棺墓1基を検出した。

**○ＳＢ007**　竪穴住居（Fig.7，ＰＬ．28－２）

完掘してはいないが，東西約 4.5m，南北約５ｍの方形を呈すると推測される。幅約20cm床面よりの深さ約５cmの溝が壁に沿って巡る。床面は一部貼り床となっている。遺物としては，床面直上より石包丁，床より７cm上で砥石，その他手捏ねの土器が出土した。

**○ＳＢ011**　竪穴住居（Fig.6，ＰＬ．27－１）

完掘はしていないが，東西（２＋α）m，南北（２＋α）mで，東壁沿いに幅 1.5mのベッド状遺構をもつものである。床面直上での遺物は無かった。

**○ＳＢ012**　竪穴住居（Fig.6，ＰＬ．27－２）

完掘はしていないが，（２＋α）m×(1.5＋α）mの方形を呈すると思われる。ベッド状遺構と推定できる。床面より５cm高く，幅90cmの部分が西壁に平行してある。北コーナーの近くから高杯の杯部の破片が出土した。

**○ＳＢ013** 竪穴住居（ＲＧ33発掘区）（ＰＬ．27－３）

完掘はしていないが，（５＋α）m×(2.5＋α）mの方形を呈すると思われる。床面は中央部よりも周辺部の方が３～４cm低い。周溝は見られず，主柱穴と考えられるものが2個ある。床面直上での遺物は無かった。

**○石蓋土壙**（Fig.7，ＰＬ．29－３・４）

蓋石は２枚で，土壙は長軸をほぼ東西にもつ125cm×65cm，深さ15cmのもので，内部は丹塗りを施してあり，蓋石は粘土貼りになっていた。副葬品，人骨等は無かった。

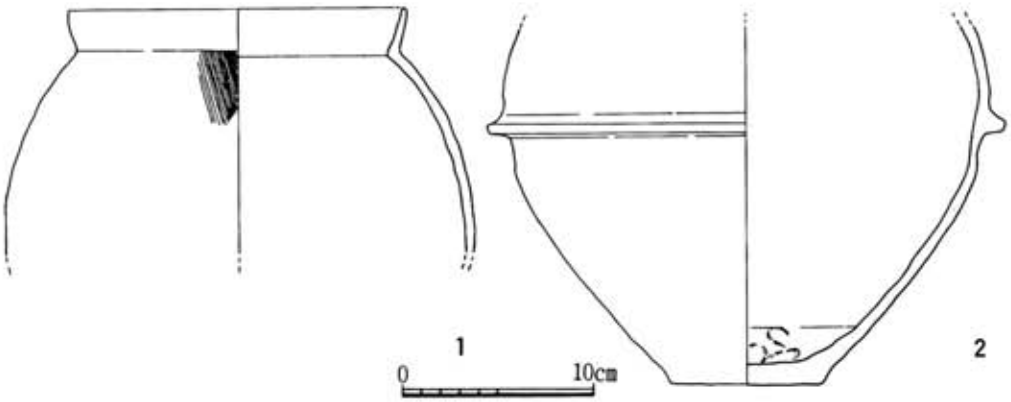



Fig. 19　NC 地区土壙出土土器実測図

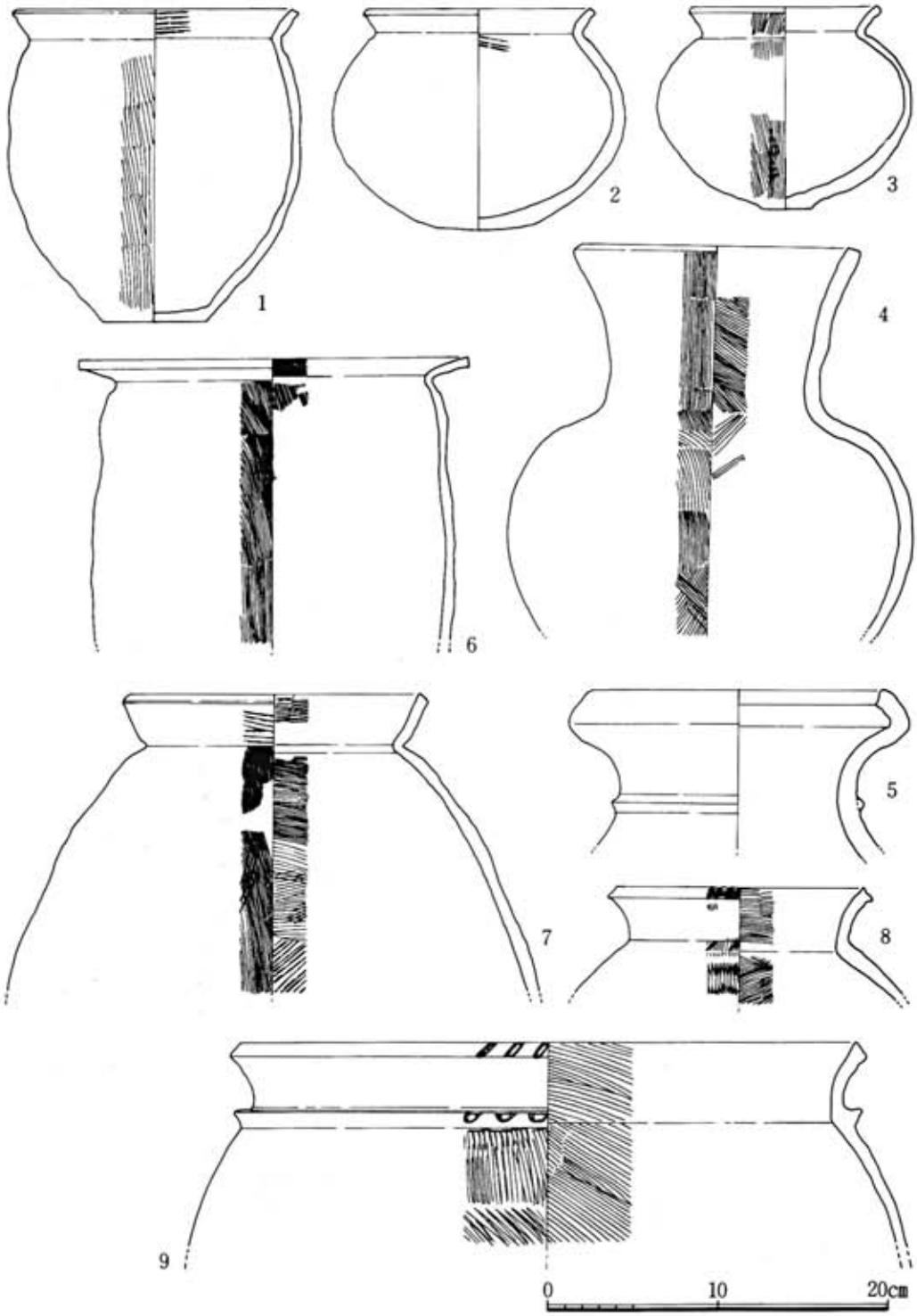



Fig. 20　SD023 出土土器実測図(1)

○甕棺墓（ＰＬ．29－１・２）

失蓋の単甕で，ＳＢ009竪穴住居の西南部に埋置されていたものである。甕の口径48cm，胴部径62cm，器高85cmである。

## ２．遺　　物

土器については，主な遺構別に説明する。なお，ＳＤ019とＳＤ023の土器については，形態（Ａ～Ｅ），大きさ（Ⅰ・Ⅱ），細部調整（ａ～ｄ）による分類を試みた。全体的に見て，ＳＤ019の方が新しいと思われる。

**○土壙出土の土器**（Fig.19，ＰＬ．27－３）

１は短頸壺で，頸部がしまり，口縁部がやや外反する。胴部は球形で丸底をなすものと考えられる。２は口縁～胴部上半部を欠き，胴部中ほどに断面台形の突帯を有する。いずれも胎土に砂粒が多く，器面がかなり荒れているため調整は不明であるが，１の外面にはわずかに刷毛目の痕跡が見られる。時期は後期前半と考えられる。

**○ＳＤ023出土の土器**

**壺**（Fig.20－２～５，ＰＬ．35－１～３）

**Ａ**：くの字口縁で球形の体部をもつもの(2)(3)，**Ｂ**：複合口縁で，口縁反転部に稜のない袋状口縁を呈し卵形の体部をもつもの(5)，**Ｃ**：直立ぎみに長い口縁で，球形の体部をもつもの(4)・（ＰＬ35－３）に分類し，更に**Ａ**をａ：丸底(2)・（PL.35－１）とｂ：平底(3)・（PL.35－２）に分類した。壺の調整方法は，外面が刷毛目，内面はナデによるものが多いが，他に内面にヘラ削りや刷毛目を施したものもある。

**甕**（Fig.20－１・６～９，ＰＬ．35－４）

**Ａ**：くの字口縁とやや丸味がかった体部をもち，口縁径と体部最大径が等しいもの(1)(9)，**Ｂ**：大きく外反するくの字口縁をもち，体部はほとんど張り出さず，口縁径が体部最大径より大きいもの(6)，**Ｃ**：くの字口縁をもち，体部が大きく張り出しており，口縁径より体部最大径が大きいもの(7)(8)に分類し，更に**Ａ**をａ：突帯のないもの(1)・（ＰＬ.35－４），b：突帯のあるもの(9)に分類し，**Ｃ**をａ：口唇部及び頸部にキザミをもつもの(8)とｂ：もたないもの(7)に分類した。甕の調整方法は，内外面ともに刷毛目が多いが，内面にはナデも見られる。

**高杯**（Fig.21－１～３，ＰＬ．35－５・６・８）

**Ａ**：杯部において口縁の立上りと体部の接合部分に稜をもち，口縁へやや立上りながら大きく外反するもので，外面に刷毛目の後カキ目を施しているもの(1)，**Ｂ**：体部から口縁へ直線的に開くもので，脚部と体部の接合部分の粘土を体部から伸ばし叩き目を施しているもの(2)・（ＰＬ.35－６），**Ｃ**：体部が内湾するくの字形を呈し，口縁部は短かく外反するもので，外面にヘラ調整を施しているもの(3)・（ＰＬ．35－５）に分類した。各高杯は内面の調整方法は刷毛目で，脚部に４孔を穿っているものがほとんどである。

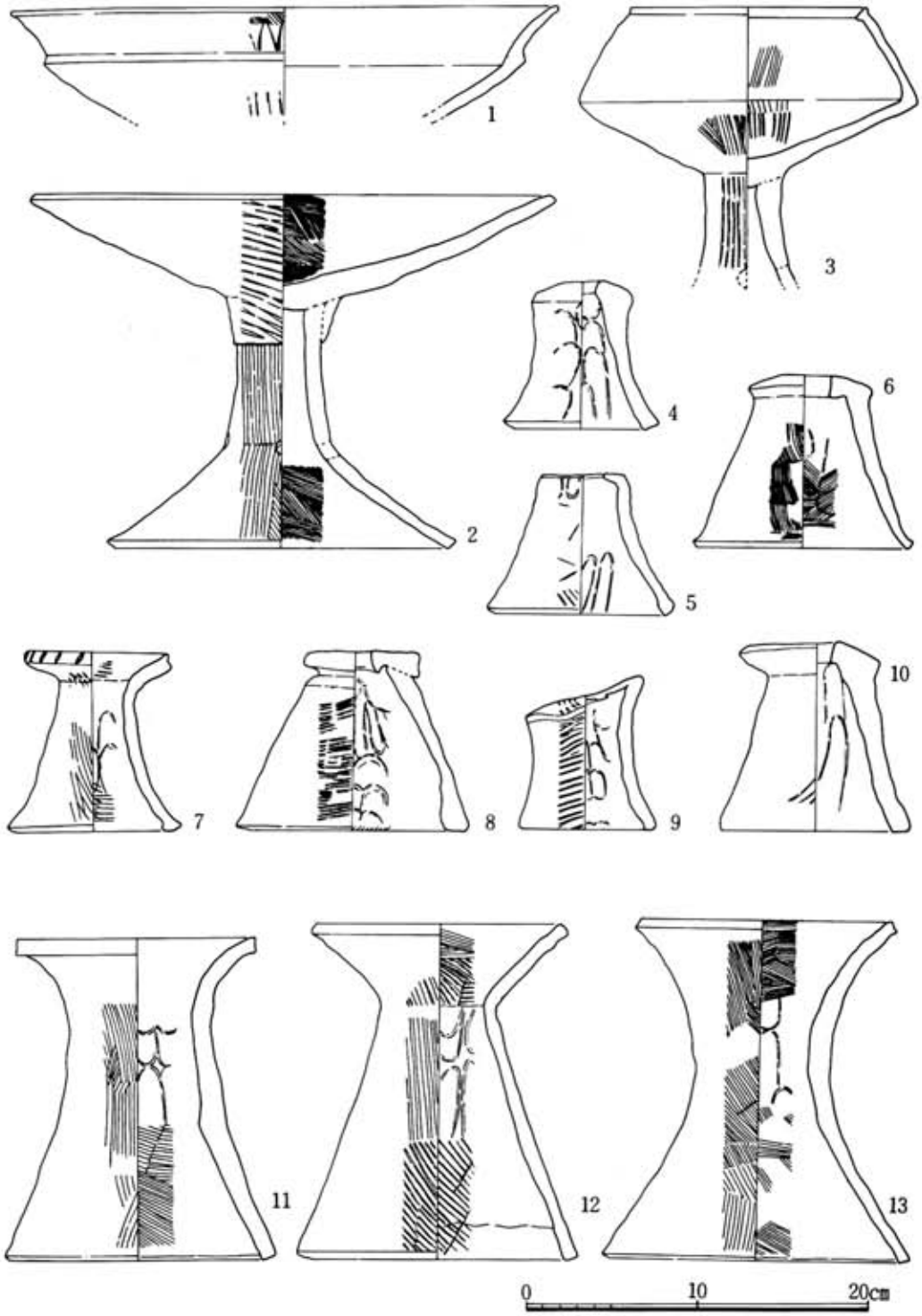



Fig. 21　SD 023 出土土器実測図(2)

**支脚**（Fig.21－4～6・8～10，PL．36－1～6）

**A**：上面が凸面を呈すもの(4)・(6)，**B**：上面が平坦なもの(5)・(8)，**C**：上面が傾斜しており裾部がややひらきぎみのもの(9)・(PL．36－2)，**D**：上面が嘴状に突出しているもの(10)(PL．36－6)に分類し，**A**を更にa：上半にくびれのないもの(4)・(PL.36－1)，とb：あるもの(6)(PL．36－4)又，**B**をa：上半に張り出しの無いもの(5)・(PL.36－3)，とb：あるもの(8)(PL．36－5)に分類した。支脚の調整方法は，内外面ともに指頭圧痕のあるものが割合多く出土しており，外面は叩き目，ナデか刷毛目である。

**器台**（Fig.21－7・11～13，PL．36－7～9）

**A**：上半のくびれの弱いもの(7)・(11)，**B**：くびれの強いもの(12)・(PL．36－10)，**C**：鼓形を呈するもの(13)・(PL．36－9)に分類し，更に**A**の大をⅠ(11)・(PL．36－8)，小をⅡ(7)・(PL．36－7)とした。器台の調整方法は，外面が刷毛目，内面中央を指頭圧痕，上部下部に刷毛目を施したものが多いが，他に外面叩き目・ナデ等もある。

**鉢**（Fig.22－2～9，PL．37－2～9）

**A**：体部から内湾しつつ口縁へ至るボール形を呈するもの(2)・(4)・(8)，**B**：丸い体部に大きく外反するくの字口縁をもつもの(3)・(5)・(9)，**C**：**A**と同様の形態で手捏ねのもの(6)・(7)に分類し，**A**を更にa：丸底のもの(2)・(PL．37－2)とb：平底のもの(4)・(PL．37－3)とc：口径に対し器高の高いもの(8)・(PL．37－4)に，又，**B**をa：平底のもの(3)・(PL．37－6)とb：丸底のもの(5)・(PL．37－5)とd：底部を穿孔し甑としているもの(9)・(PL．37－7)に，**C**をa：丸底のもの(6)・(PL．37－9)，b：尖底のもの(7)・(PL．37－8)に分類した。鉢の調整方法は**A**では外面ナデ又はヘラ削り，内面ナデのものが多く，**B**では内外面刷毛目のものが多い。その他**B**では外面ナデのものもある。

**台付甕**（Fig.22－1，PL.37－1）

卵形の体部を呈し，台脚はひらく。調整方法は内外面刷毛目のものがほとんどである。

**○SD019出土の土器**

**壺**（Fig.24－3，PL．38－1）

**B**：複合口縁であるがSD 023のものとは異なり，口縁反転部にシャープな稜をもち，頸部が長く体部へ向ってすぼまってゆく。調整方法は内外面とも刷毛目である。

**甕**（Fig.24－1・2，PL．38－2）

両者とも口唇部端をナデて丸くしており，口縁部は直立に近い。大きく張り出した卵形の体部をもち，口縁径より体部最大径が大きいものを**D**(1)・(PL.38－2)，頸部のくびれがほとんどなく，口縁径と体部最大径が等しいもの**E**(2)とした。調整方法は，**D**は口縁部内外面ともナデ，体部は外面上半が刷毛目，下半がナデ，内面は刷毛目で底部はその後ナデである。**E**では外面口縁部は叩き目，体部はヘラ削りで上半はその後刷毛目を施してあり，内面刷毛

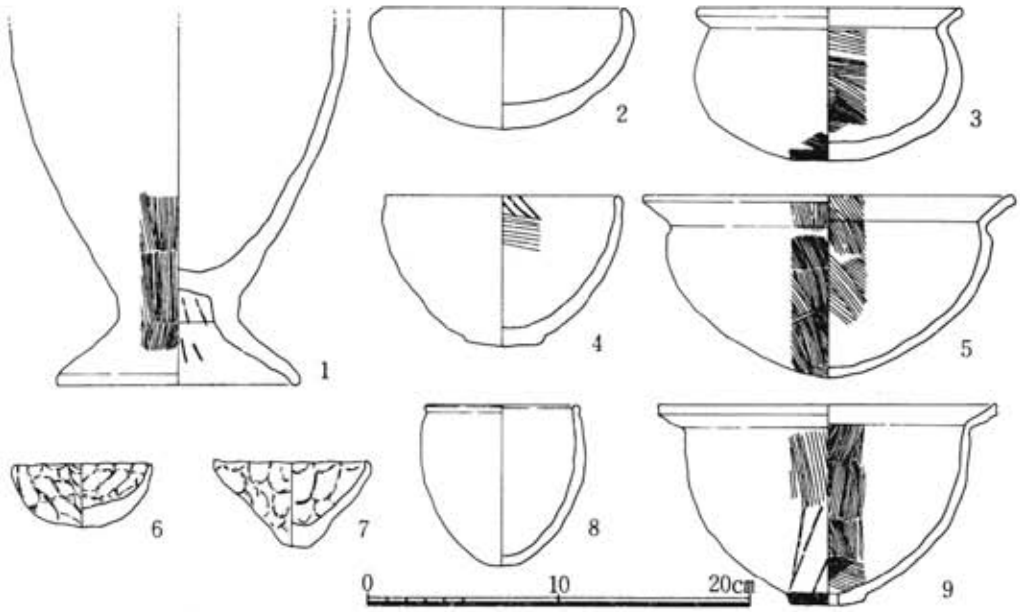



Fig. 22　SD023 出土土器実測図(3)

目であるが底部に指頭圧痕がある。

**鉢**（Fig.24－5～12，PL．38－3・4）

**A** a(6)は形態的にはSD023と同様であるが，内外面刷毛目を施したものが多い。**A** b(8)は底部から口縁部へ直線的に開くもので外面刷毛目，内面ナデである。**A** c(7)は口径より器高がやや短かいもので，調整方法は外面ヘラ削り，内面上半はヘラ削りの後ナデ，内面中位はナデであり，底部に指頭圧痕が残る。**A** d(5)は**A** a に分類できるが，底部に穿孔し，甑としている。外面ヘラ削り，内面刷毛目を施している。**B** a(11)はやや内湾ぎみのくの字口縁をもち平底を呈するもので，外面は刷毛目，内面はナデである。**B** b(10)(PL．38－4)はやや外反するくの字口縁に丸底をもち，外面上半は刷毛目，下半はヘラ削り，内面は刷毛目である。**B** d(12)は**B** a と同様の形態であるが底部を穿孔し甑としている。**C** a(9)はSD023のものと同じ形態のものである。

**高杯**（Fig.24－14・15，PL．38－7）

形態的には**A**の範囲に入ると考えられるが，口縁の立上りと体部の接合部分の稜がシャープではない。内外面とも刷毛目であり，脚部に4孔をもつ。**D**(14)(PL．38－7)は脚部が短かいもので，体部がやや膨らみをもつ。外面脚部上半にヘラナデが見られる。**E**(15)は脚部が長いものである。

**支脚**（Fig.24－13・18）

**B** a ：上面平坦で傾斜しているもの(18)と**D**：上面が嘴状に突出しているもの(13)が出土した。(18)の調整方法は外面指頭圧痕の上をナデ，内面は上半ナデ，下半はヘラ側端のアタリと思われる痕跡がある。(13)は外面と上面が叩き，内面には指頭圧痕が見られ，上半にはしぼり痕も見られる。

**器台**（Fig.24－16・17，ＰＬ．38－５）

**Ａ**：くびれの弱いものの中で，大きさの大きいⅠと小さいⅡがある。**Ａ**Ⅰ⑯・（ＰＬ．38－５）に分類できるものの中には，手捏ねのものの他，内外面ともに刷毛目のもの，外面叩き目，内面に指頭圧痕の残るもの等がある。**Ａ**Ⅱ⑰は外面刷毛目，内面に指頭圧痕の残るものが多い。

**柑**（Fig.24－4，ＰＬ．38－６）

やや内湾ぎみに直立する口縁部と，球形の体部をもつもので，口縁部は内外面ともナデ。体部外面は刷毛目，内面上半はナデ，下半は刷毛目である。

**特殊器台**（Fig.23，ＰＬ．38－８）

くびれ部と脚裾近くに断面M字状突帯が巡る。突帯間に略方形の透しが3個あり，その上辺，下辺それぞれを結ぶ細い沈線が巡っている。これはおそらく透しの割付けの為のものであろう。調整方法は外面が刷毛目，内面上部はナデ，以下は刷毛目を施してあり，特に外面に丹塗りを施した痕跡が見られる。なお，口縁部は欠損していて，上部の形は不明である。

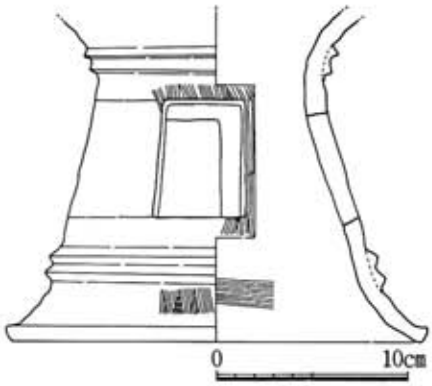


Fig.23　特殊器台実測図

## その他の遺物

### 石　製　品

**ナイフ形石器**（Fig.25－３）

ＤＤ地区01発掘区黒褐色土層中より出土。石質は黒曜石。裏面に基部加工がある。

**石鏃**（Fig.25－２）

ＤＤ地区01発掘区黒褐色土層中より出土。石質はサヌカイト。基部に浅い抉りがある。

**石包丁**（Fig.24－４・５）

ＤＤ地区01発掘区黒褐色土層中より出土。外湾刃半月形態の両刃式で，２個の孔を両面より穿孔。４は輝緑凝灰岩である。５は粘板岩で，孔はやや背部寄りに穿孔されており，表面に不定方向の研痕が見られる。

**砥石**（Fig.25－６）

ＤＤ地区01発掘区黒褐色土層中より出土で石質は粘板岩で四面を使用している。

### 土　製　品

**土製模造鏡**（Fig.25－７）

ＲＧ地区表採。完形品である。やや楕円形に近く，胎土に細かい砂粒を含む。中央部に鈕をつまみ出し，穿孔がある。鏡面は凸面である。

**土錘**（Fig.25－８）

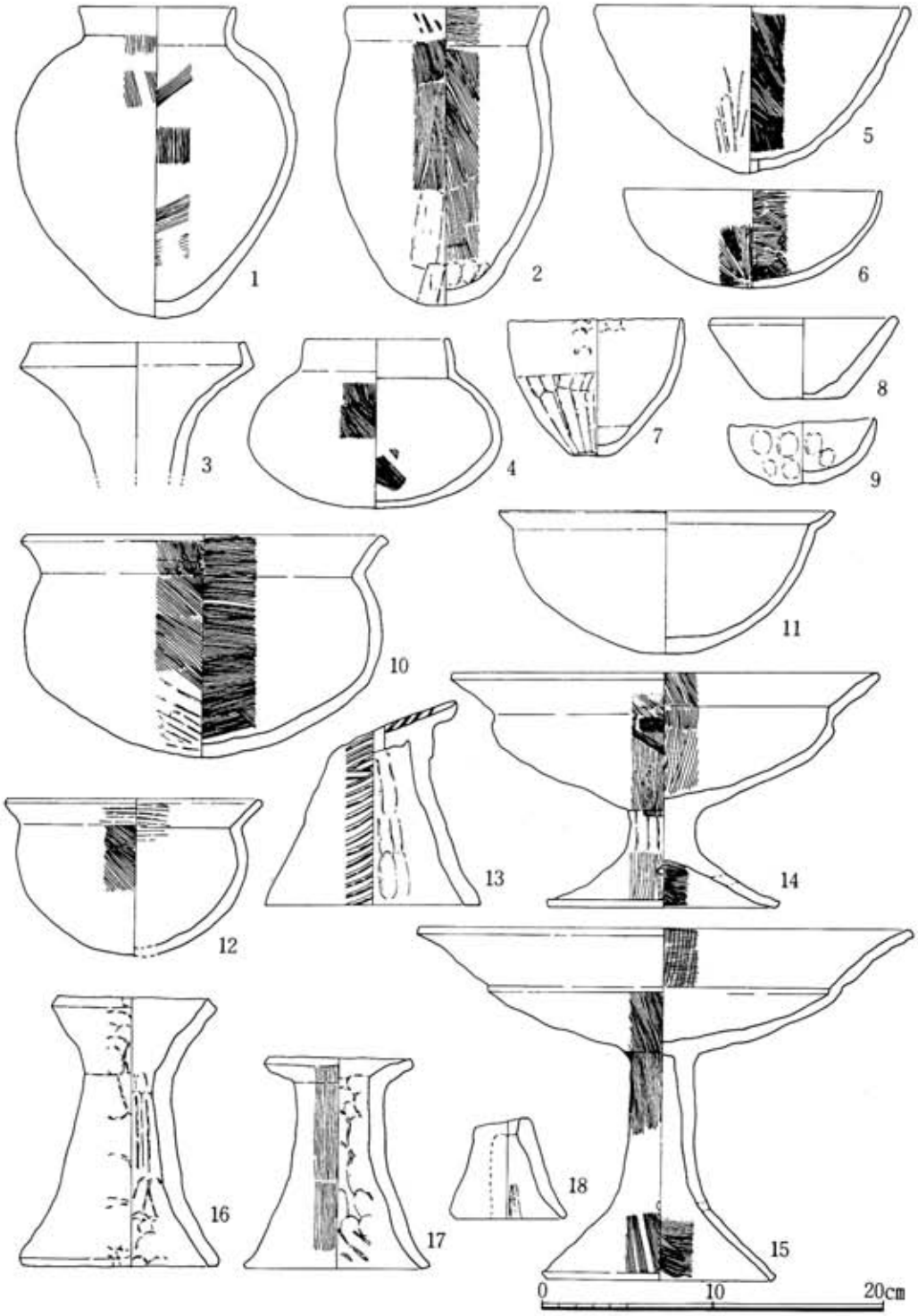



Fig. 24　SD019出土土器実測図

ＱＤ地区03発掘区黒褐色土層中より出土。管状土錘でやや厚手である。１次調査で出土し，他にも２点出土している。

**ガラス製勾玉**（Fig.25－１）

ＳＢ004の西北隅の柱痕の覆土中より出土。不純物を多く含み多孔質である。色調は緑。一部欠損している。

**鉄　製　品**

**手鎌**（Fig.26－１）

ＳＤ019出土。装着部は折り返して作られている。装着部に横方向の木質が観察される。

**鎌**（Fig.26－２・３・６）

ＳＤ019出土。３は装着部のみ残存。装着部は折り曲げている。６は装着部と先端を欠き，刃部最大幅 3.3cm，背の厚さ 0.3cmである。刃部は内湾している。２は刃部の中央より折り曲げているが，鎌であったと思われる。

**手斧**（Fig.26－４・７）

ＳＤ019出土。４は刃部を欠き，袋部は鉄板を折り返して作られている。袋部幅2.0cm。５も袋部は折り返して作られ，内面に凹みがある。全長11.4cm。刃部幅5.4cm。袋部幅4.7cm。

**鉄鏃**（Fig.26－５・８）

ＳＤ019出土。５は柳葉形で鋒部最大幅 2.9cm，茎部は断面方形である。８は凹基式である。装着した木質が残っている。基部を一部欠損。

**刀子**（Fig.26－９）

ＳＤ019出土。刃部は先端を欠き，残存最大幅 1.3cm。蕨手風であるが，素環頭の可能性

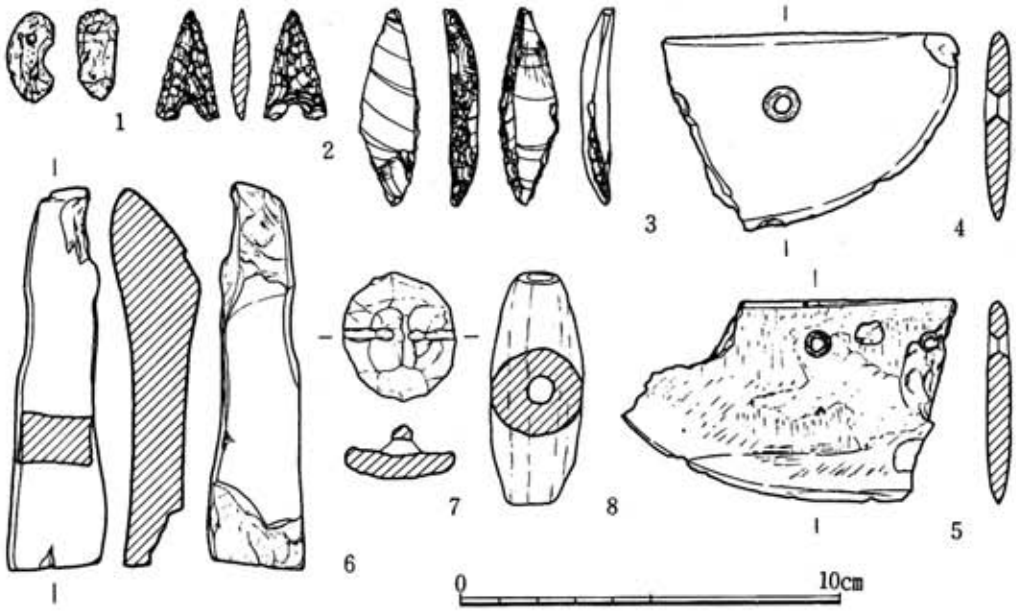



Fig.25　石器及び土製品実測図

もある。

**不明鉄器**（Fig.26－10）

ＳＤ019出土。長辺の一方に刃を持ち，短辺に装着用の折り返しがある。残存最大幅 4.2cm。鎌の可能性もあるが，残存部で刃部がわずかに外湾している。再加工のためか折り曲げられている。

**青銅製品**

**鏡**（Fig.26－11）

ＳＤ019出土。ほぼ完形の小型仿製鏡である。鈕座に続き，内区にＳ字文(6)と珠文が交互に配され，連弧文（12弧）帯がめぐる。外区は斜行櫛歯文帯で平縁である。面径は 6.1cmを測る。錆が進み非常にもろい。他にも鏡片が一片，ＳＤ023より出土している。

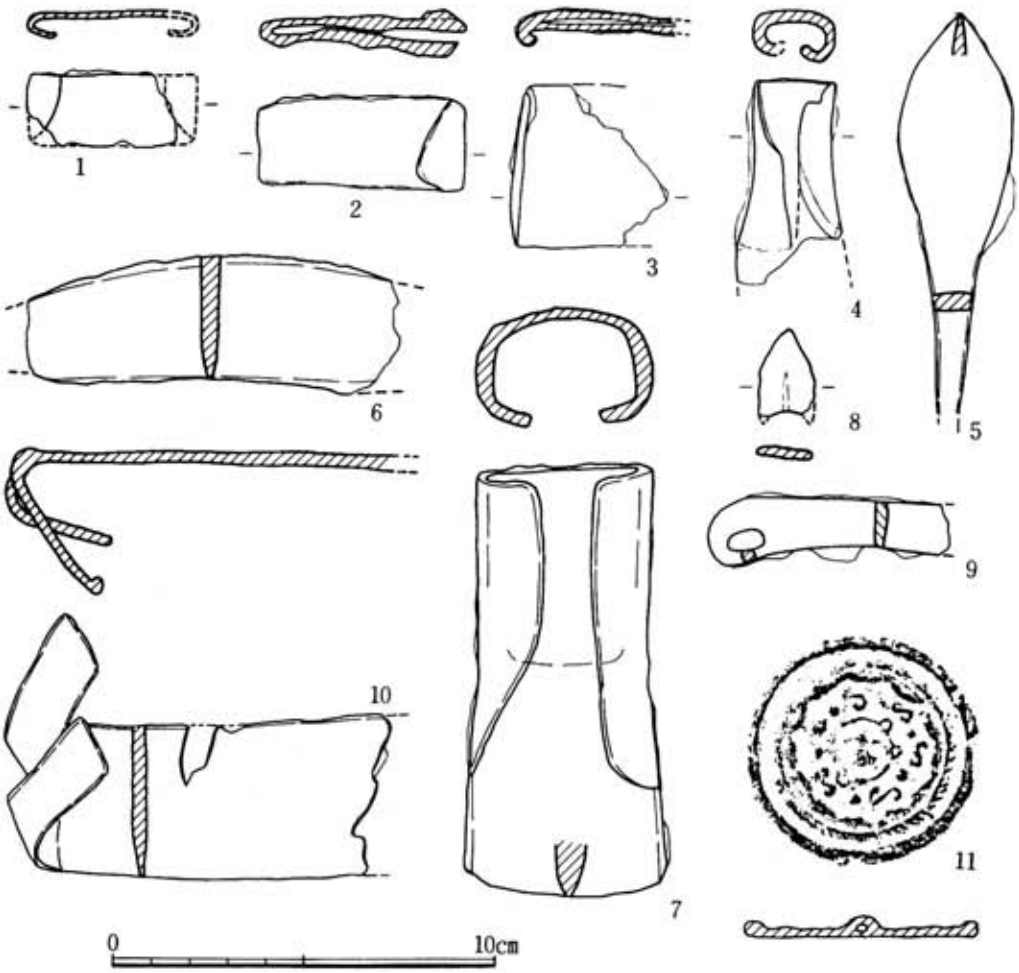



Fig. 26　鉄器及び鏡実測図

# 総　　括

肥前国府跡は佐賀県佐賀郡大和町久池井一帯であるとの見方は大方の一致を見ているが，府域及び国庁（衙）については歴史地理学の立場から推定地については諸説があり，考古学的な発掘調査による「位置」の確定が望まれていた。

今回の発掘調査は九州横断道路の建設が契起となり，その路線が国庁域を避けて設計されるために，早急に国庁跡の所在地を明らかにする必要に迫まれて実施されたものであった。昭和50～52年度の三次にわたる発掘調査は，結論からいうと，肥前国府跡の調査はようやく端緒についたということである。

最初の発掘調査は米倉二郎によって推定されていた「丁の坪」一帯について実施したが，国庁にかかわる遺構は検出できず，国道 263号線東側の水田一帯には国庁跡は存在しなかったと考えられた。国道 263号線西側で，嘉瀬川左岸の自然堤防上からは，この地域が蜜柑園であったため，偶然の空地を捜しての無作為の発掘ではあったが，いずれの発掘区でも掘立柱の建物跡を検出することが出来た。これらの建物跡はいずれも同一の建築方位を持っており，一連の建築によるものと考えられる。

各発掘区の様子をみるとＲＧ区の掘立柱建物群は重復しており，Ａ・Ｂ・Ｃ期の三時期大別される。Ｂ期の建物ＳＢ004が最も大きく，整った建物で，桁行７間以上，梁行３間の南北棟である。このＳＢ004は東と南側に逆Ｌ字に交叉する東西溝ＳＤ021と南北溝ＳＤ022を囲まれた位置にある。したがって溝ＳＤ021と溝ＳＤ022によって画された地域があって掘立柱建物はこれらの地域の東西隅に配置された建物跡とも見られないことはない。しかしこの地域の瓦の出土量は極端に少ない。

ＤＤ地区（惣座）の総柱の掘立柱建物ＳＢ007は構造的に倉庫跡と見られ，柱痕径も大きくあるいは正倉かも知れない。掘立柱建物ＳＢ007の北側にある東西溝ＳＤ018はこの北側になんらの遺構もなく，掘立柱建物群の北隅を画する溝と考えられる。

ＱＣ地区（瓦塚）の掘立柱建物ＳＢ008東西棟は柱掘形も大きく立派である。発掘範囲が限られたため，他に顕著な建物跡は見られなかったが，近所には同規模の建物群が存在する可能性が強い。瓦の出土量も豊富で，今後の発掘調査によって国庁跡の可能性の最も高い地域である。ＲＧ・ＤＤ地区では掘立柱建物が多数あるが，瓦の出土量が極端に少なく，ＱＣ地区に比べると国府の中枢になりにくい。なお「肥前風土記」に「郡の西に川有り，名を佐嘉川という……」とあり，ＲＧ・ＤＤ地区の遺構は郡衙との関係が深いとも考えられる。

他にＳＤ033・ＳＤ050・ＳＤ051などの南北溝が一連のもので延長約160ｍの溝になるものがある。溝はこのほかに方位的に南北あるいは東西方向をとるものが確認されているが，国府跡遺構としてどういう配置関係または，地割をなすのか説明するには，検出状況が不充分であり，これらの溝も今後の発掘調査で検討される必要がある。

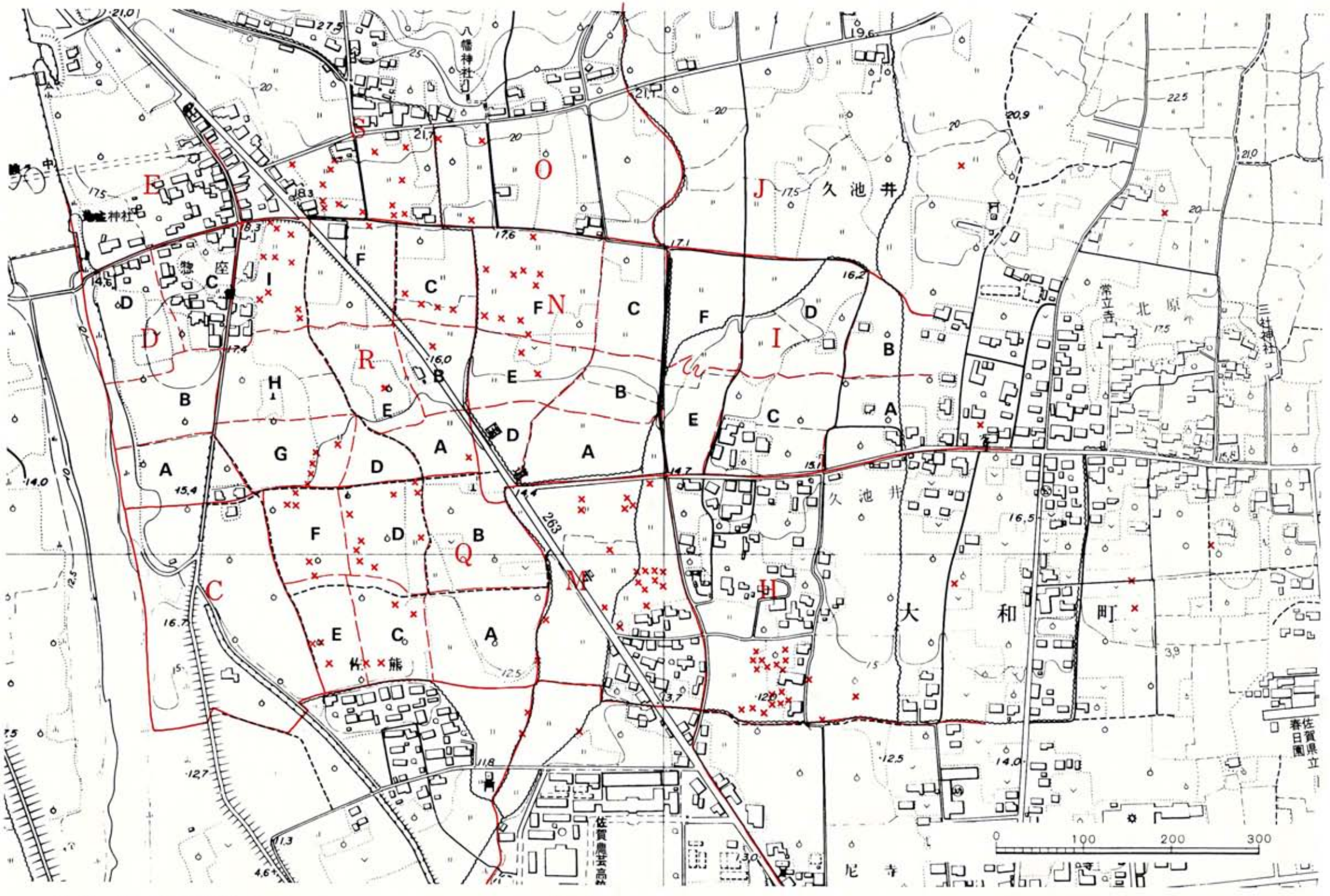
ところがＱＣ地区（瓦塚）についで瓦の出土量の多い久池井の部落内での発掘調査を実施しておらず，今後この地域を発掘し，検出した遺構の他地区遺構との比較検討によって国庁域を決定すべきであろう。「倭名類従抄」の「小城郡国府」の記載から，一時期小城郡に国府が存在した可能性が説かれ，また，各地への移動とも考えられているが，肥前国府の所在の長い時期は，この大和町久池井・惣座にかけた一帯にあったことは今回の調査を通じて得た所見でいえることである。

出土遺物は全体として多いものではなかったが，出土した古瓦・土師器・須恵器を見ると７～10世紀にかけての遺物であり，国府の所在時期と一致する。瓦は，鴻臚館式軒丸瓦や，唐草文帯軒丸瓦など肥前国分寺との同笵関係が認められるものも多い。また老司式軒平瓦をそのまま踏みかえしたような物もあり興味深い。以前に久池井で出土した単弁軒丸瓦は今回確認できなかったが，肥前国府跡出土の瓦としては最古式に位置ずけられよう。

須恵器と土師器は，７世紀後半から８世紀前半にかけてのものがＯ区の小穴群一帯から多く出土している。８世紀から９世紀にかけてのものはＤＤ地区・ＲＧ地区に多い。杯を見ると８世紀までは須恵器の土師器に対する量的な割合いは多いが９世紀になると土師器が急速に多くなり，成形・技法・器形とも須恵器の系譜を引き継ぐ傾向が見うけられる。

その他，弥生時代後期後半の土器がＤＤ地区（惣座）のＳＤ019東西溝とＲＧ地区ＳＤ023溝とから多量に出土している。形態的にこの二つの溝出土の各土器は共通性が強いが，ＳＤ019の溝が新しい傾向を持っている。弥生土器後期後半の土器の編年資料として貴重であろう。また鉄製品も出土しており，各種の鉄製品の他に意識的に折り曲げた欠損品があり，再利用の過程を思わせるものがある。なお，ＳＤ019からは小形の仿製鏡，ＳＤ023からは舶載鏡片が検出されている。いくつか検出された竪穴住居跡を含めて，嘉瀬川東岸のこの自然堤防上には弥生時代の大集落跡の存在が推察され，今後の発掘調査に興味が持たれる。

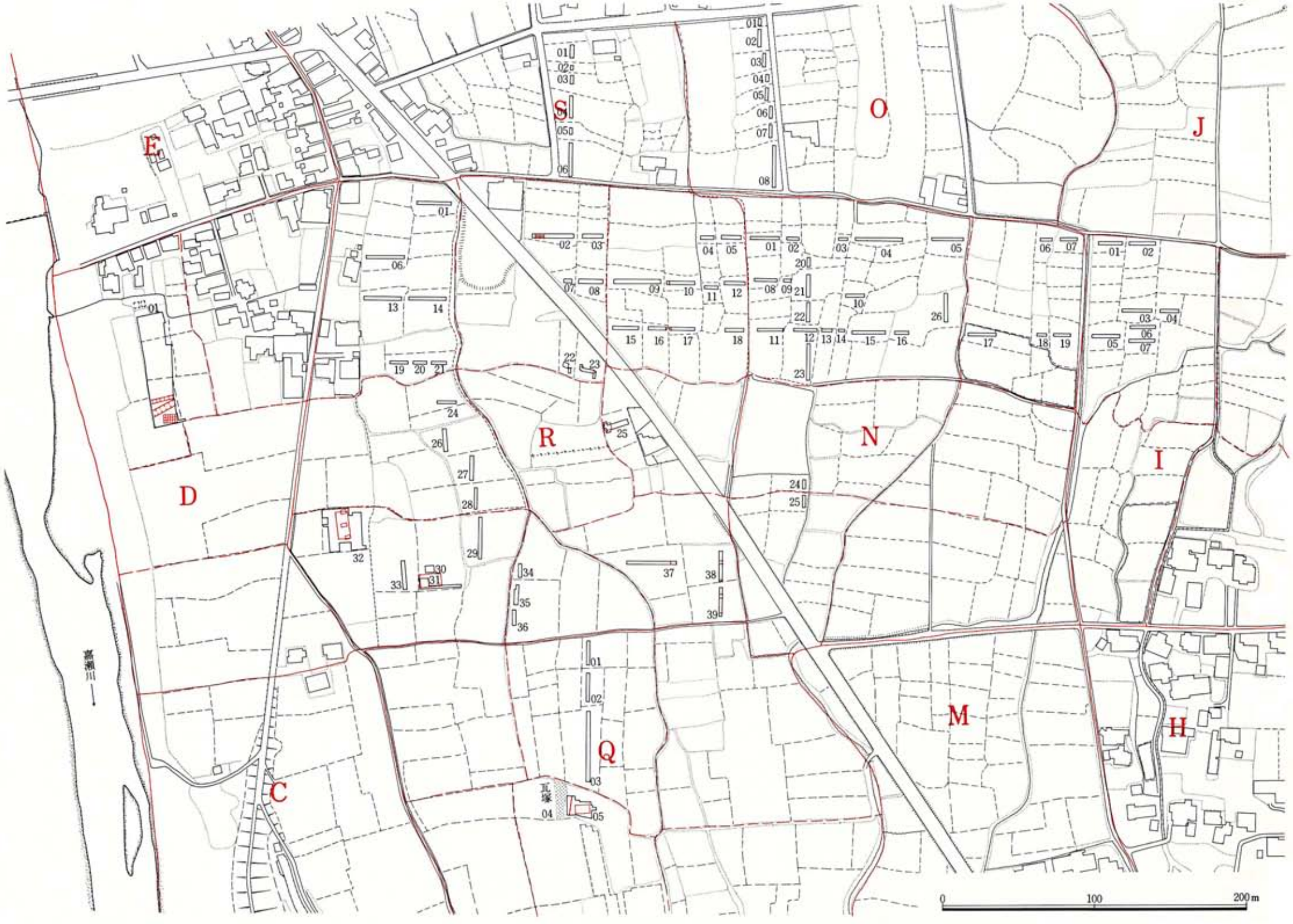
PLAN1




× 印　布目瓦採集地点

国府跡周辺瓦分布図

PLAN2




発掘区位置図

国 府 跡 空 中 写 真

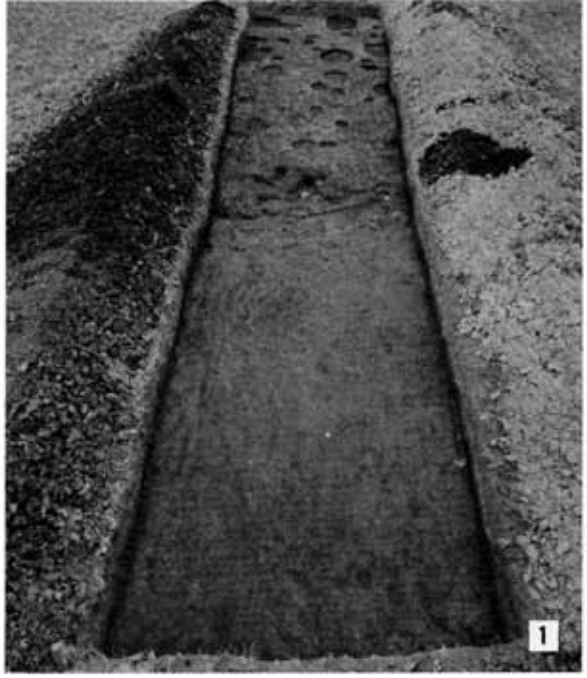
RG 地区31発掘区 SB 001 1．南から 2．西から

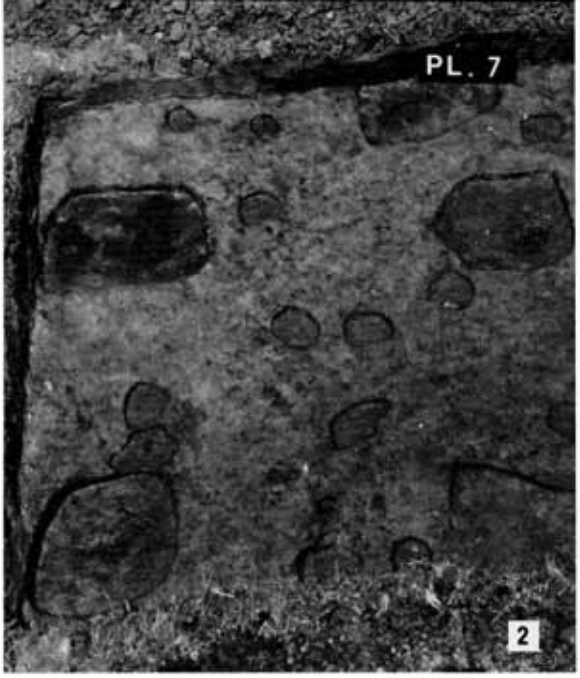
RG地区 1. 31発掘区SB001 掘立柱建物〈西から〉 2. 30発掘区小穴群〈北から〉

RG地区32発掘区　1．SB 004 掘立柱建物〈北から〉 2．同西側柱列とSD 020 南北溝〈北から〉

RG 地区32発掘区　1．SB 005 SB 004 掘立柱建物南妻〈東から〉
2．発掘区西北隅柱穴掘方群〈西から〉

RG地区32発掘区 1．SD 021 東西溝〈西から〉
2．SD 022 南北溝〈南から〉
3．SD 020 南北溝と手前SD 021 東西溝および
SD 023 弥生時代斜行溝
4．SB 004 柱穴掘方断面〈西から〉
5．SB 004 柱穴掘方断面〈北から〉





RB 地区25発掘区　1．SB 006　2．SB 006 掘立柱建物
3．SB 006 掘立柱建物

IF 地区05発掘区　1．SD 060 南北溝〈西から〉　2．同西側溝〈北から〉

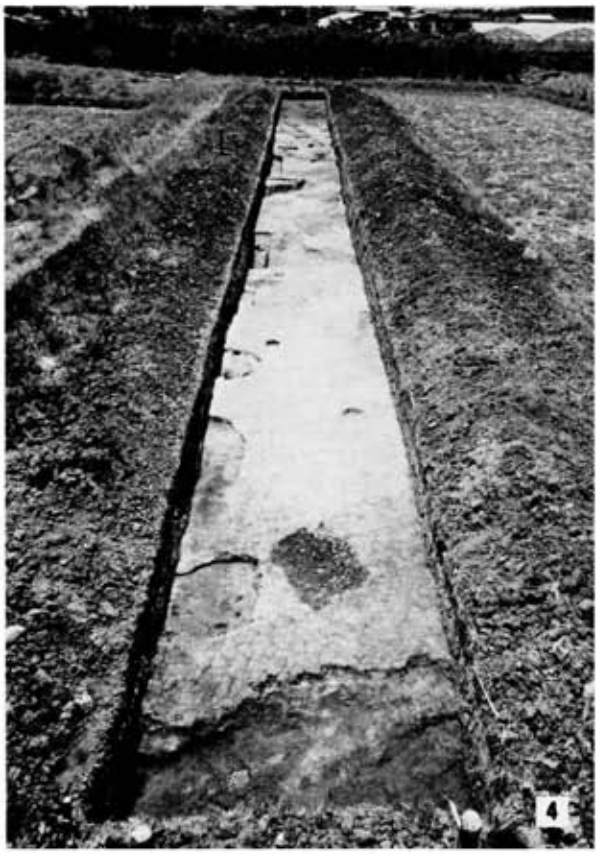
DD 地区01発掘区　1．全景〈南から〉　2．SB 007 掘立柱建物〈西から〉

DD 地区01発掘区　1．SB 007 掘立柱建物，弥生時代住居跡と重復〈南から〉
2．SD 018 東西溝右SD 019 弥生時代溝〈西から〉

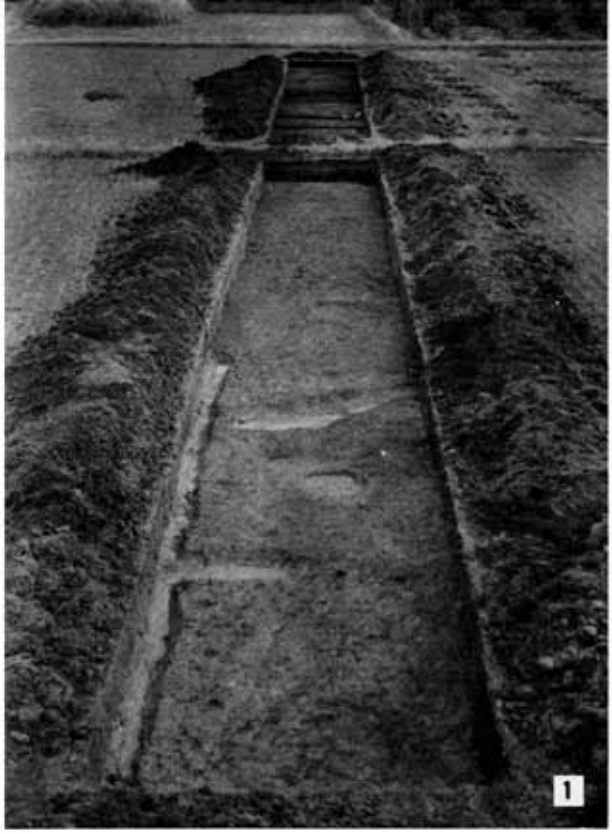
RC 地区05発掘区　1．全景〈北から〉　2．SB 008 掘立柱建物〈北から〉

QC地区05発掘区 1. SB008 掘立柱建物〈東から〉 2. SD026 南北溝・SD025 南北溝〈手前〉

1．QC 地区04発掘区，瓦塚　2．RD 地区36発掘区，斜行溝




QD 地区　1．01 発掘区小穴群〈北から〉　2．02 発掘区小穴列〈北から〉
3．03 発掘区全　景〈南から〉　4．03 発掘区全　景〈北から〉

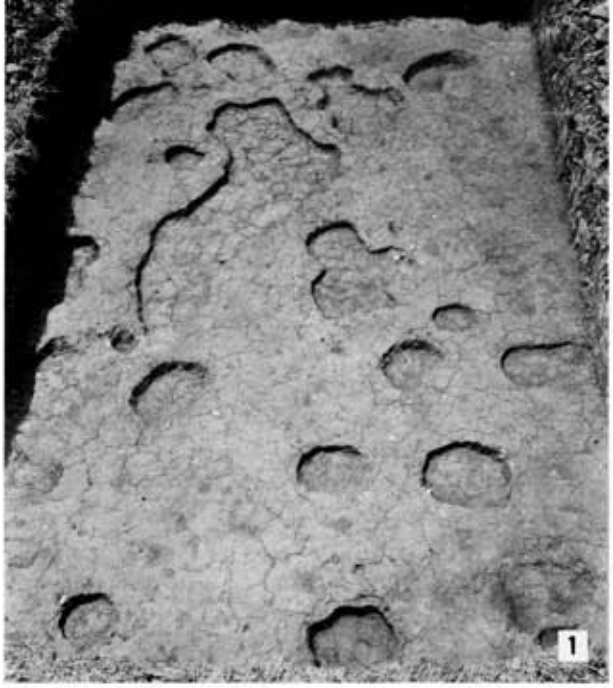


RA地区

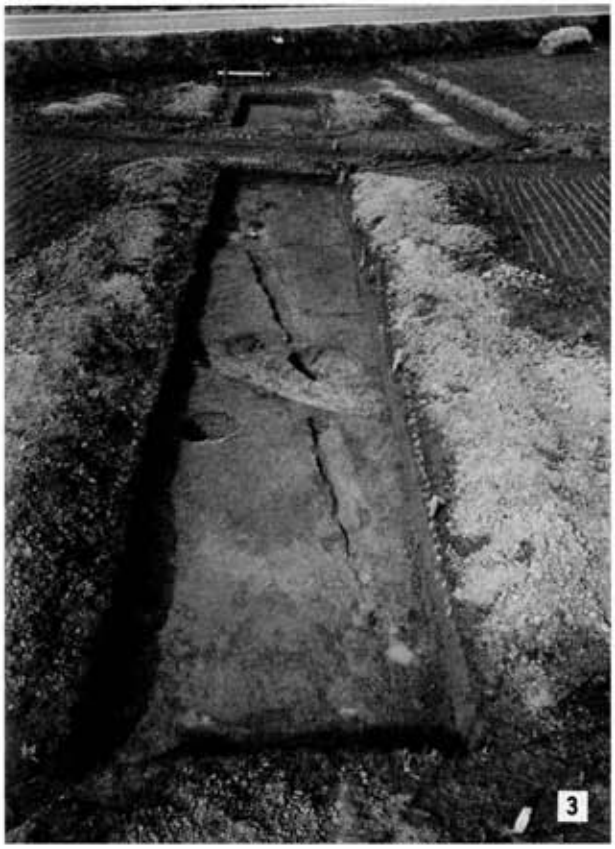
1. 38・39発掘区全景
〈北から〉

2. 同SD035から037東
西溝3条〈南から〉

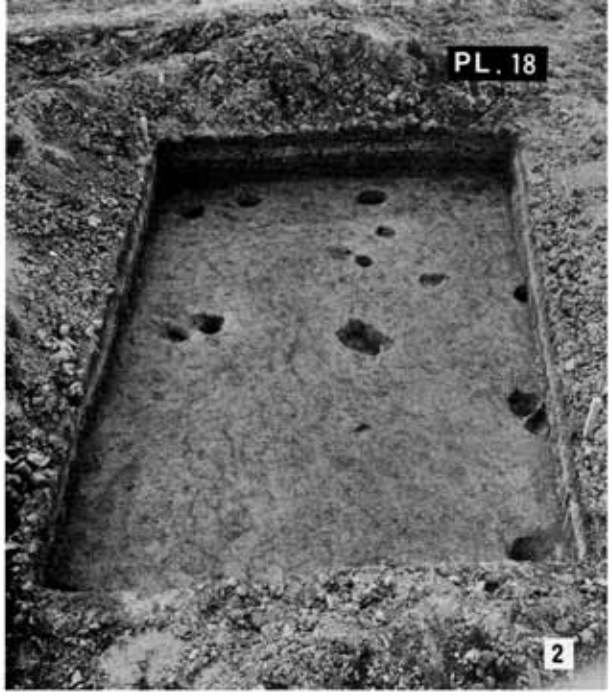
3. 37発掘区SD003
南北溝2条〈東から〉



RF 地区1．22発掘区〈南から〉 2．02発掘区小穴〈北から〉 3．08発掘区SD048



RF 地区　1．03 発掘区全景〈西から〉2．02 発掘区全景〈東から〉
3．07･08 発掘区全景〈東から〉4．23 発掘区全景〈西から〉



O 地区　1．01 発掘区小穴群〈北から〉　2．06・07 発掘区小穴群〈北から〉
3．09～16 発掘区小穴群〈北から〉

O地区 1．05 発掘区全景〈南から〉　2．07 発掘区全景〈北から〉

S地区 1．01発掘区全景〈北から〉 2．02～4発掘区全景〈北から〉
3．05発掘区全景〈北から〉 4．06発掘区全景〈北から〉

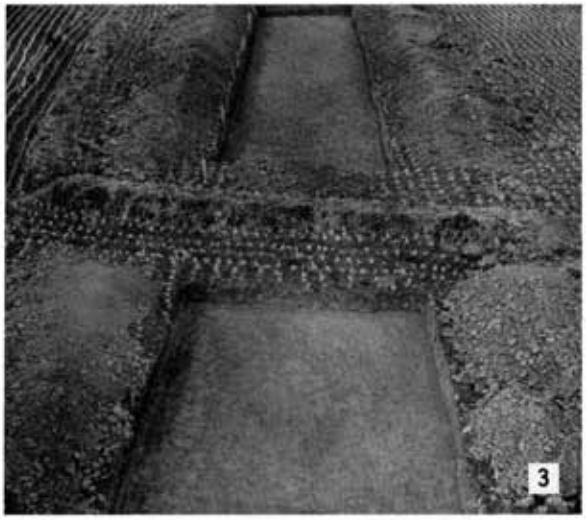
RI 地区 1．01 発掘区全景〈東から〉 2．06 発掘区全景〈東から〉
3．13 発掘区全景〈西から〉 4．14 発掘区〈西から〉

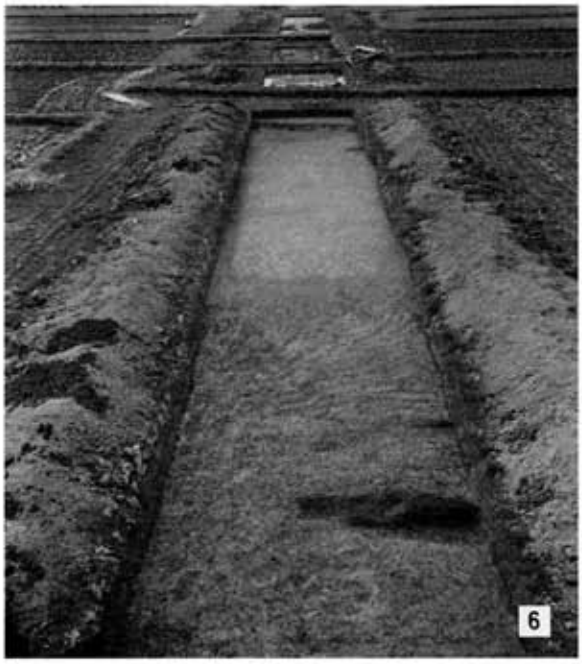
RC 地区

1．04･05 発掘区全景〈東から〉
2．16 発掘区全景〈東から〉
3．15 発掘区全景〈西から〉
4．09･10 発掘区全景〈西から〉
5．09 発掘区全景〈西から〉

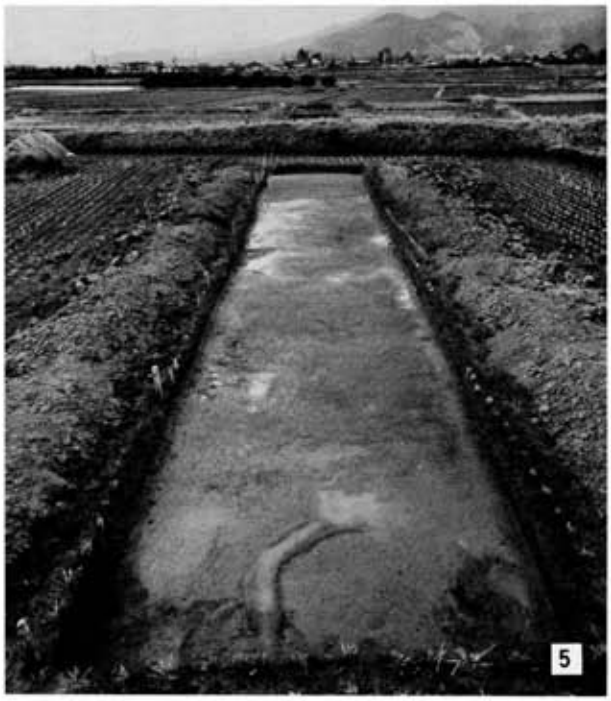
NC 地区

1．06 発掘区全景〈東から〉
2．07 発掘区全景〈西から〉
3．17 発掘区全景〈東から〉
4．18 発掘区全景〈東から〉
5．19 発掘区全景〈西から〉






NF 地区
1．12発掘区全景〈西から〉 2．16発掘区全景〈東から〉 3．08･09発掘区全景〈東から〉
4．11･12発掘区全景〈東から〉 5．26発掘区全景〈南から〉 6．15発掘区全景〈東から〉



ＩＦ地区　1．01発掘区全景〈東から〉 2．02発掘区全景〈西から〉 3．03発掘区全景〈東から〉
4．06発掘区全景〈西から〉 5．05発掘区全景〈東から〉 6．07発掘区全景〈東から〉

RG 地区32発掘区 SD 023 弥生時代溝土器出土状況

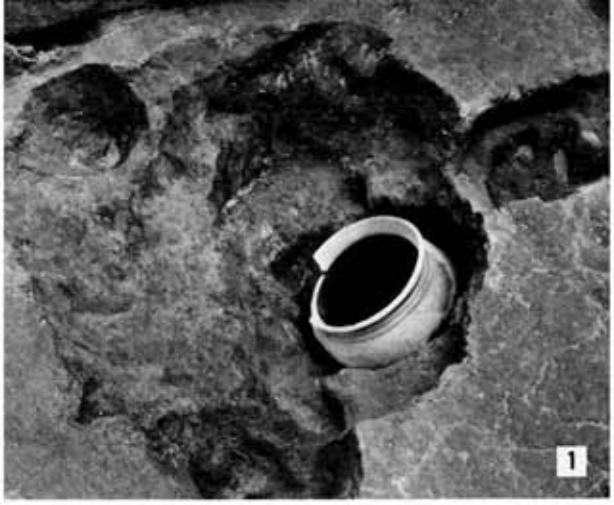
RG 地区弥生時代住居跡

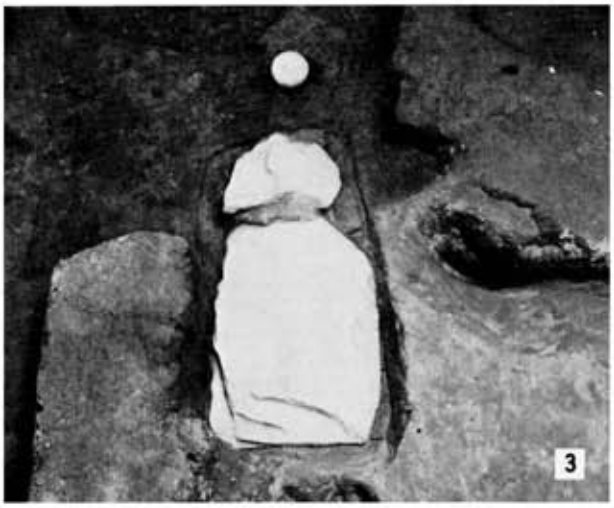
1．32発掘区SB 001〈西から〉

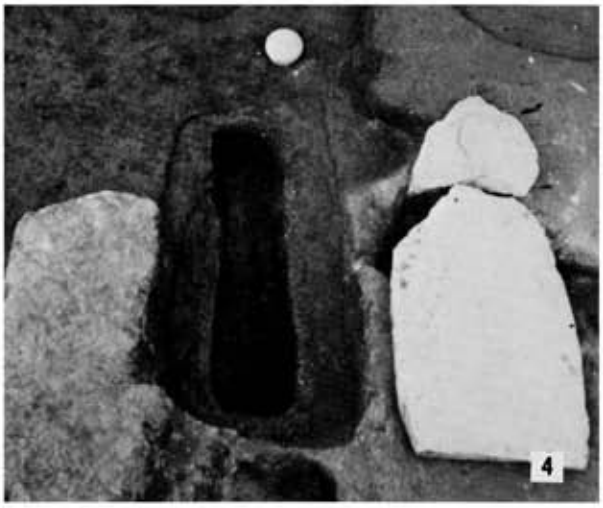
2．同SB 022〈東から〉

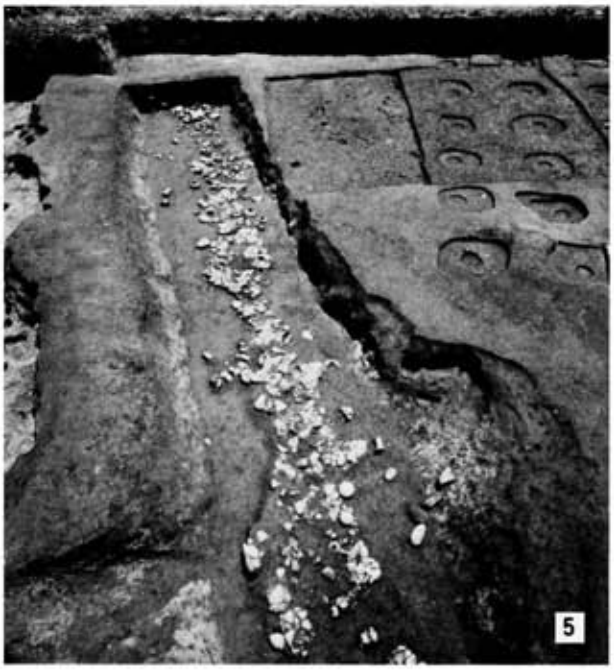
3．33発掘区SB 013〈東から〉

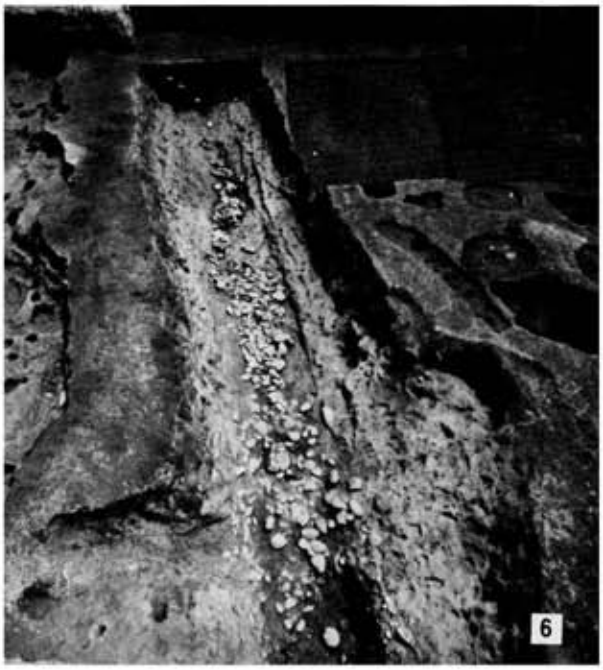
DD地区01発掘区弥生時代遺構　1．SB 009〈西から〉2．SB 007〈西から〉





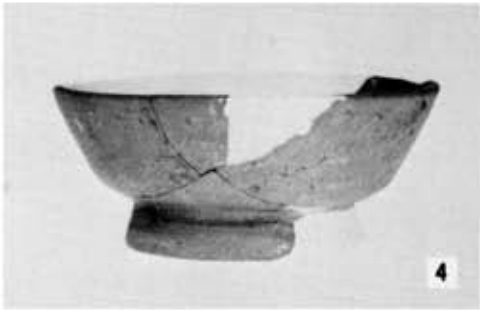



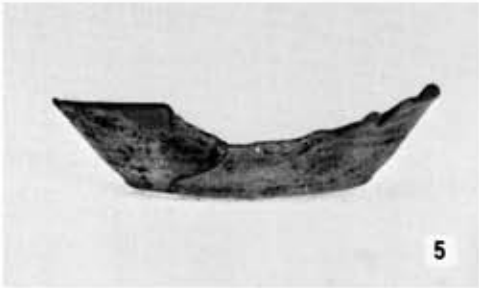



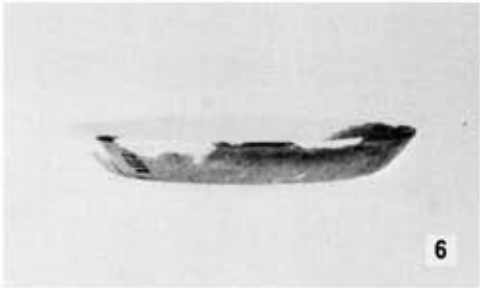

DD地区01発掘区弥生時代遺構

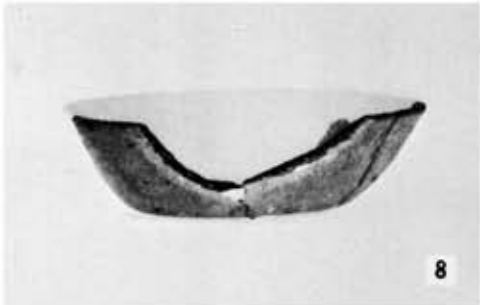
1．甕棺墓〈北から〉 2．同 3．石蓋土壙 4．同 5．SD019東西溝遺物出土状況〈西から〉 6．同東西溝底

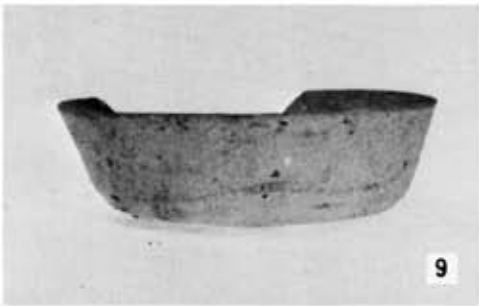
RF 地区08発掘区古墳時代住居址
1．SB 065〈西から〉 2．SB 015〈東から〉



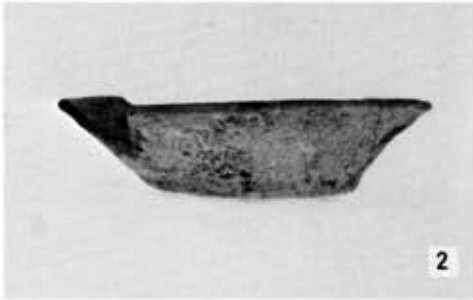



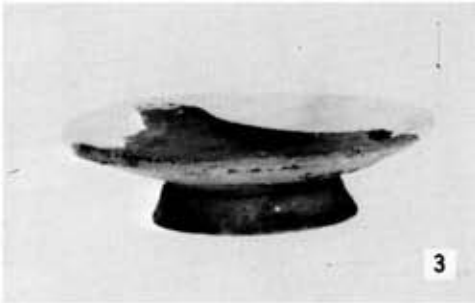



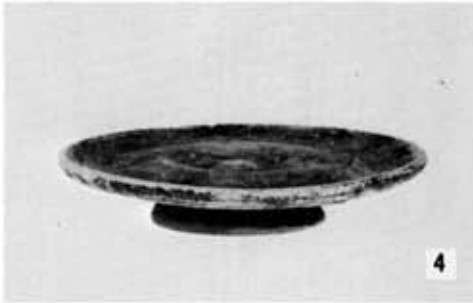


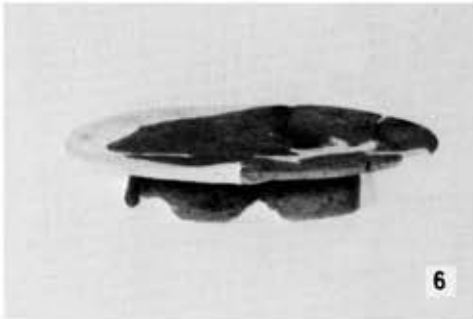



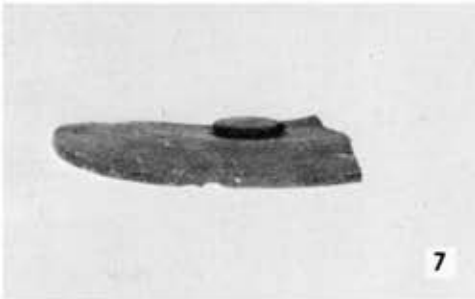
土　師　器



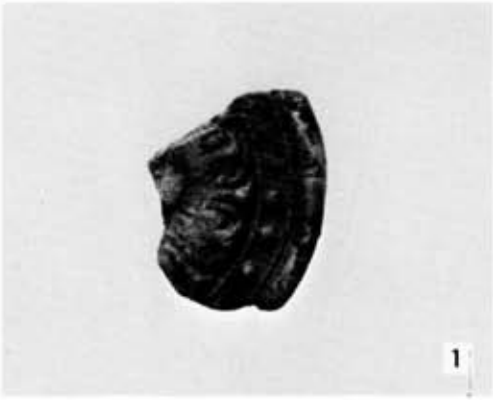



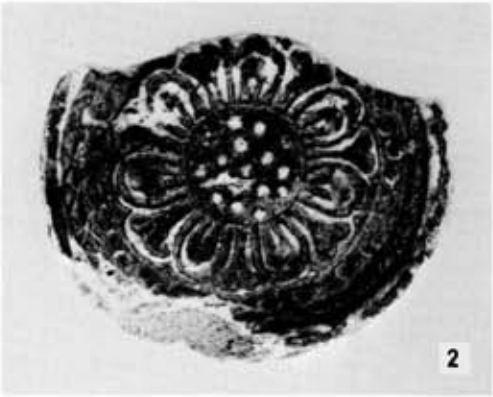



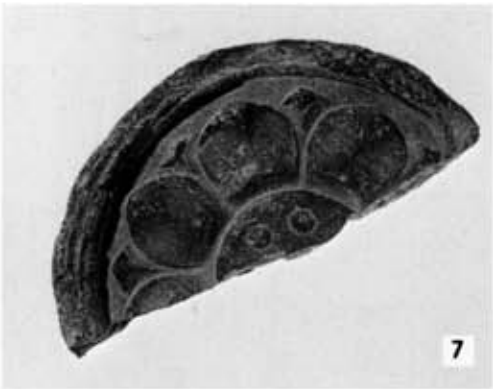


土師器・須恵器

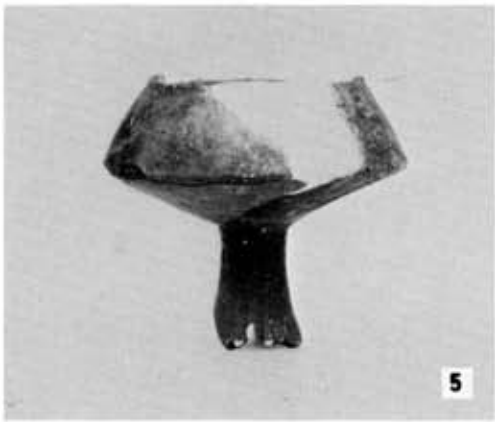


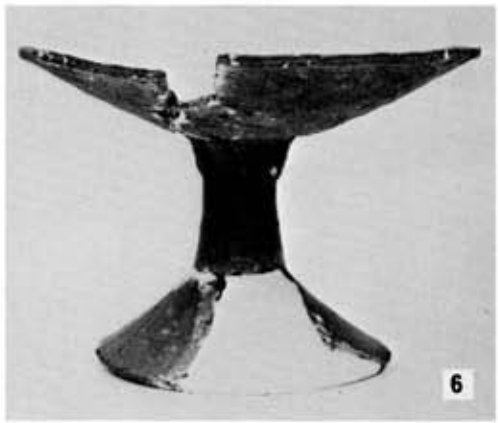



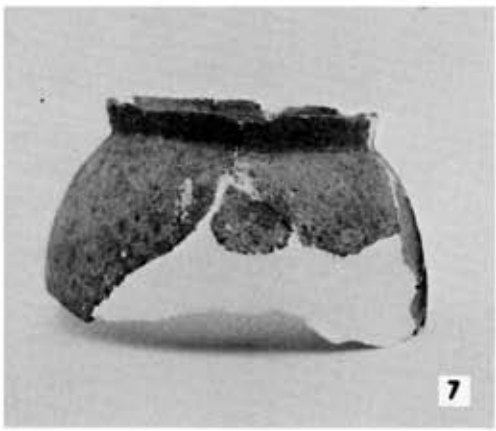


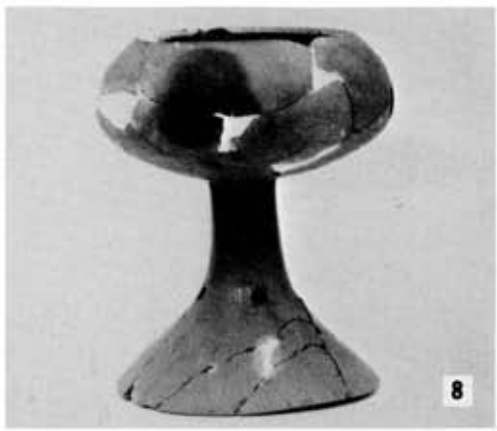

1．瓦塚出土複弁八弁蓮華文軒丸瓦
2．　〃　単弁七弁　〃
3．　〃　単弁九弁　〃
4．　〃　唐草文帯軒丸瓦
5．　〃　単弁軒丸瓦
6．　〃　軒丸瓦
7．大和町久池井出土単弁軒丸瓦

1．均整唐草文軒平瓦
2．均整唐草文軒平瓦
3．均整唐草文軒平瓦
4．偏行唐草文軒平瓦
5．偏行唐草文軒平瓦
6．軒　平　瓦

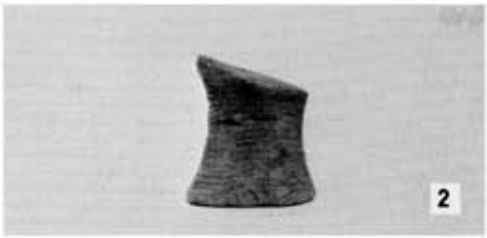


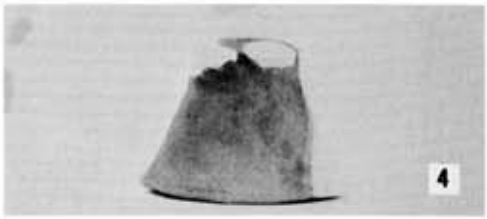



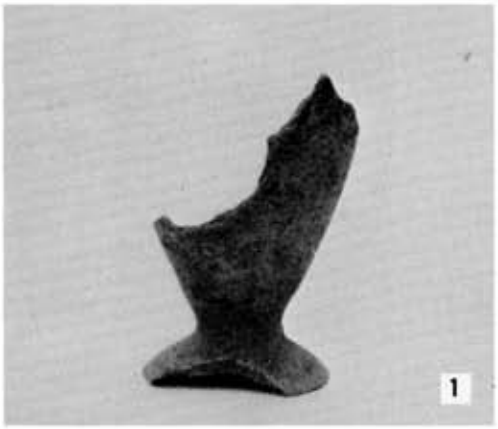



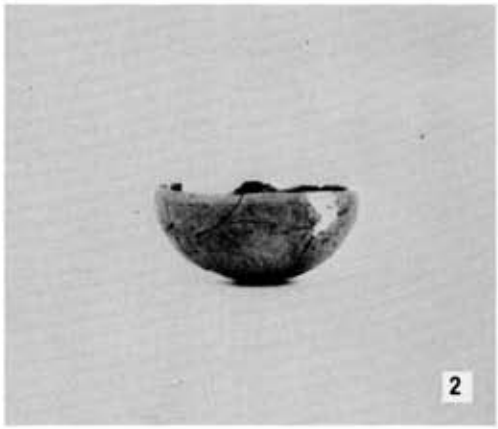

弥生土器 1～6・8（SD 023出土）7．NC 地区土壙内出土

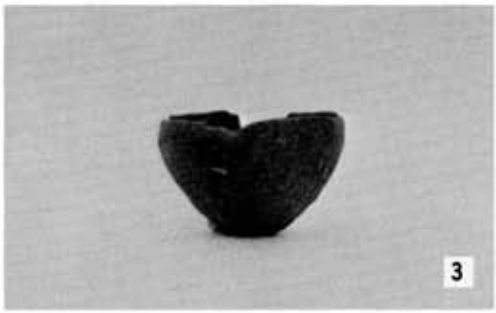


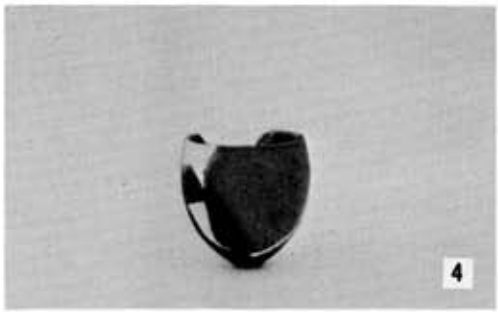


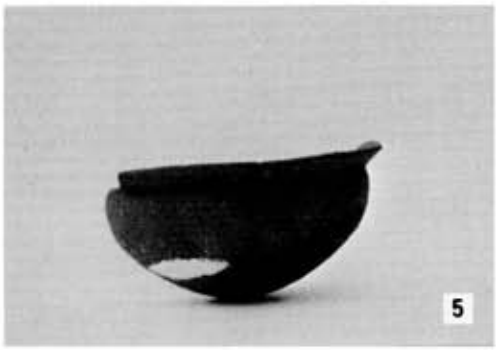
弥 生 土 器 (SD023出土)

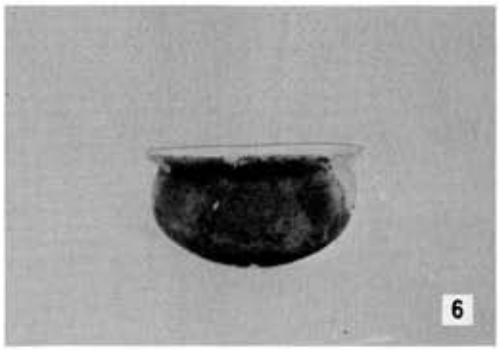


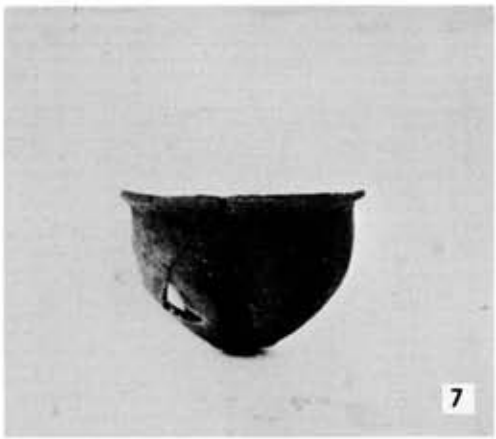



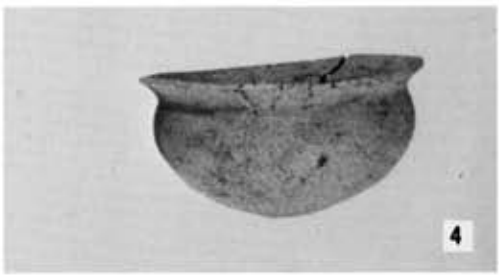



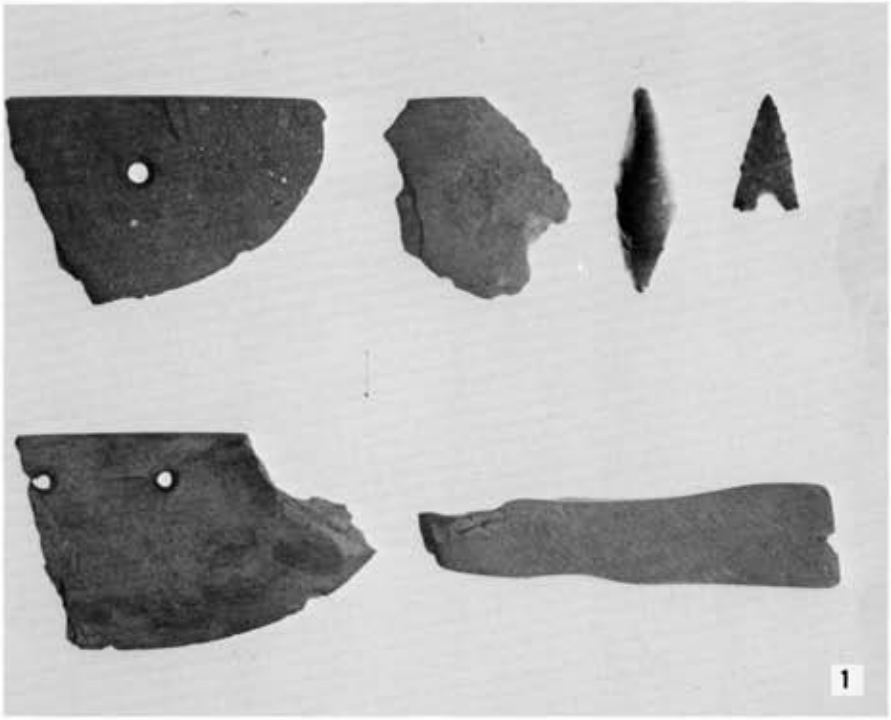



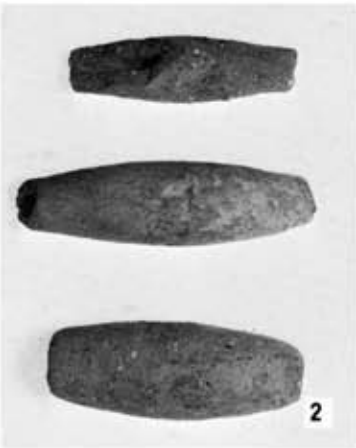



弥 生 土 器 (SD023出土)

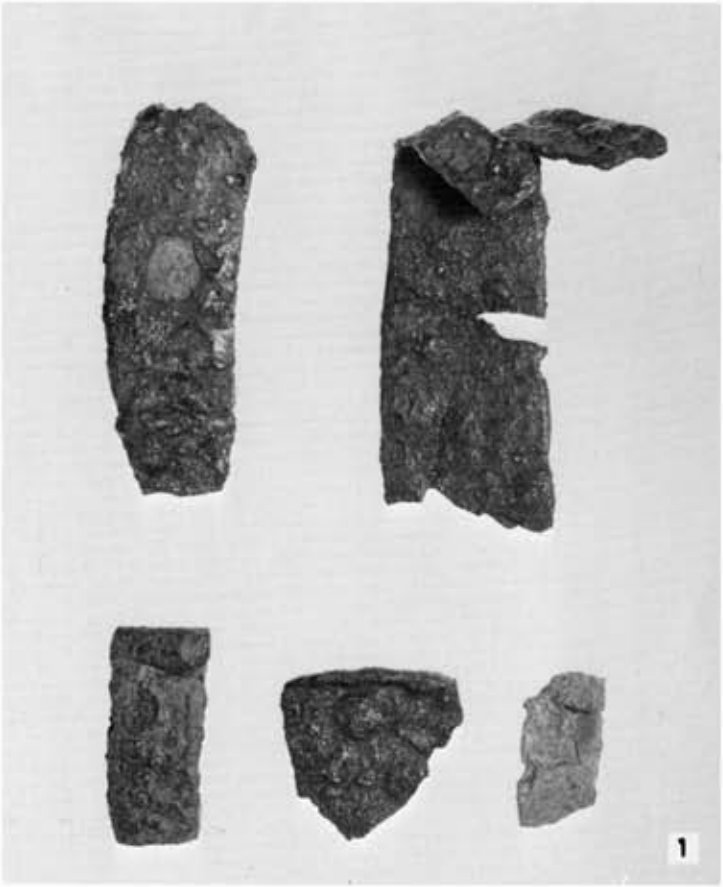


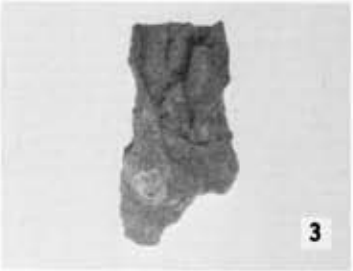
弥 生 土 器 (SD 019出土)



石器・土製品・ガラス製勾玉・鏡





鉄　製　品

佐賀県文化財調査報告書第39集

肥　前　国　府　跡　Ⅰ

（第１次～第３次）

昭和53年３月30日　印刷
昭和53年３月31日　発行

発行　新郷土刊行会
佐賀市城内1丁目教育庁文化課内

印刷　㈲弘文社印刷
佐賀市天神２丁目